

河村宗長

右文化十四年八月朔日、他所養子御免被仰付、松平伊賀
守様御家中河村喜兵衛二男婿養子成、願之通御免被仰付
候、典膳殿御差図赤松造酒御取次、

一文化十二年亥二月十五日、典膳殿御差図平島平八御取

次ニ而奥医師被 仰付、御役料米被下置候、

一文政六未年正月十一日、監物殿御差図種子島六郎御取

次ニ而六人賄料被下置候、

一同年二月十五日、監物殿御差図種子島六郎御取次ニ而

白金御付被仰付候、

一文政八酉年正月十一日、八人賄料被 仰付候、美濃殿

御差図岩下長左衛門御取次、

一文政十一子年八月三日、御家老座御差図梅田九左衛門

御取次ニ而、御広敷御用人格被仰付候、

一同年十二月六日、御家老座御差図平川市左衛門御取次

を以、御広敷御用人格被仰付候、

〔米〕但白金御付御免、芝勤被仰付候、

一文政十二丑五月十四日、亡養父宗瀧繼目家督被仰付候

段、央殿御差図北郷權五郎御取次ニ而被仰付候、

一文政十三年寅五月廿五日、御太刀進上ニ而繼目之御礼

申上候、央殿御差図北郷權五郎御取次、

但宗瀧と願之通名替被仰付候、

一同年五月廿三日、代々小番御番入被仰付候、央殿御差

図喜入多門御取次、

一天保二卯二月廿二日、央殿御差図新納四郎衛門御取次

ニ而、式拾人扶持御加扶持被成下候、

一天保四年巳六月六日、央殿御差図永江伊右衛門御取次

ニ而、御納戸奉行格被仰付、御役料米七拾三俵被下置

候、

一嘉永四亥年二月七日、將曹殿御差図井上逸作御取次ニ

而、拾五人賄料被仰付候、

一嘉永六丑年二月六日、筑後殿御差図井上逸作御取次ニ

而、拾八人御賄料被仰付候、

右之通ニ御座候、以上、

八月

河村宗瀧

冊子原寸 縦二七・五糎 横二〇・五糎 五枚

〇四五 重富郷調書

高頭、人口、社寺

四六

「ペルリ」来航ニ付阿久根白浜六郎ヨリ

平川喜兵衛ヘノ書及喜兵衛ヨリ六郎ヘノ

返書

右三通一綴

国家ノ前途ニ対スル憂国ノ至情

〔端裏書〕
「平川毅先生と阿久根某贈答二通」

寓禧

嘉永七年

正月二日

白浜六郎

貫

平川喜兵衛様

御同喜太郎様

参ル人々御中

禧

二白、昨年は東西海寇ニ付心外之御無音、平ニ御高免可

被下候、急變御用之節ハ、無滯出陳仕候様被仰付、難有御受申上、実場相臨申候フマハクて碎身粉骨之御奉公申上度、今や〜と相待居申候得共、先平和ニ而幸然奉存候、併当年は不安寝食時に御座候、浦賀港渡来之夷賊、山海測側量放恣侮慢之態可惡事、幕府初守衛之侯伯、唯彼れか航海術砲術ニ氣を吞れ、驚愕と被存申候、有翅者ハ無牙水あり山有害、何そ悉不足懼、成程洋中之地對抗戦は頗六ヶ敷候得共、登陸之上ハ乍憚此匹夫たりとも賊五六人ニハ敵対可仕候、当今天下之総領たる阿部侯初、百爾庶官徒凡座、大息余り遠慮ニ過候欤、尤蕭牆之禍旁之時機を恐れ候欤、何れ征夷之二字を以論る時は、水戸老公御意道通可然欤、旧臘ハ又候崎陽ヘ魯西亜船三隻入港、最早十四日ニは詰所ヘ罷出、穩便之応接、十七日ニは奉行初別段夷人応接之為、此節罷下候御徒目付・御目付其他警衛之諸侯上船之処、種々饗応至極畏恭、亜墨利加トハ雲泥之違ひ、巷説承り申候、初より交易利徳之訳ニ無之、皇国御為筋を考、偕交固信之為罷出候由杯、風説も御座候、

虚実ハ不相分候得共、巷説通ニ候ハ、迭ニ寛置態相整候状ニ相見得、寛裕之処置ニ相決候哉、終ニは国病相成可申候、先兵之強弱ハ政令之苛喜を深察、敵猛を以攻撃ハ如何御座候哉、被髮左衽之夷人共ニ過信候て、聖賢之道被行不申候、干戈之禍絶申間敷被存候、実ニ国家安危可致時ニあらん、他ニは愚意難述候得共、窃ニ奉伺尊意度、此旨申上候、以上、

辱賜履端之祥封欣然焉、余亦同染翰以祝、足下、

嘉永七年正月五日

平川毅

白浜笋操子

二啓、御細翰之趣、一々御尤千万奉感入候、扱夷賊共昨年浦賀港江致到着、通好貿易之訴翰差出シ、彼此之成行実ニ日本之虚弱ヲ窺済シタル姦策ト被察候、中々彼が一朝一夕之企テとハ相見得不申候、夫ニ付諸侯方之吟味等も段々有之候由、如仰日本危殆之時節嘆ケ敷事御座候、

乍然今幸ニ水戸侯と申日本之大極柱有之、其外肥前侯・会津侯、且又当国

太守様、英傑五六侯被為在候間、先ハ日本之大幸と被存候、将又崎陽江魯西亜船致到着、彼より申出候趣有之、随分皇国之為ニ助力之筋と表向キハ相聞ヘ候得共、此時ニ至リ右魯西亜共江御許容有之候而は、弥日本之虚弱庸劣之態ヲ外国より見スカサレ可申候、尤古より独立之皇国、今ニ至リ亜墨利加国杯より段々露郤ヲ窺ヒ、軍艦等差向ケ候勢ひ之砌ニ相成候而、同シ外夷之兵力ヲ借、日本之力と相成シ候様ニと之儀ハ、小兒輩之至而浅間敷見識と被察候、爰許ニ而も風聞承候ニは、此節崎陽江参り候魯西亜共之申シ立ハ尤之事ニて、日本之任合ニ候間、御許容可然と誰人カ將軍家江致上訴被申候風聞承申候、噫一時之安ヲヌスミ、遠慮モ無キ無字卑劣之見識と被察候、先々荒々御返礼迄、早々不備、

右此一巻、阿久根住白浜某より平川氏江贈申候由ニて、右之贈答ニ通写得置者也、

嘉永七年正月十五日写也、

平山氏

文書原寸 縦一七・五糎 横三四五・七糎

四七 斉彬公ヨリ久光公へ

幕府外交ノ拙劣等

書添共二通

四七ノ一

〔包紙ウツ書②〕

「とら四月廿九日

〔包紙ウツ書①〕
一周防殿

御報

薩摩守

芳翰忝致披見候、愈御平安珍重存候、御紙面之趣忝存申候、当地先ツ無事平穩ニ御座候、御報可申入如斯ニ御座候、恐々謹言、

四月廿九日

薩摩守

周防殿

猶以時氣御自愛專一ニ存申候、以上、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 斉彬公史料」第三卷第五四八号
文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一八・四糎 包紙原寸 ①縦二八・八糎 横四〇・三糎
横四四・三糎 ②縦三〇・〇糎 横三七・三糎

四七ノ二

〔封紙ウツ書〕
一書添

別紙申入候、下田異船も追々箱館江参り、老艘残居候趣ニ相聞得申候、応接之次第散々成事ニ而、内々承候へは、初発応対之節交易并ニ人引移り商館取建之地所迄も、可差免段迄相談ニ相成候由之処に、水老公御不承知ニ而、又々応答仕直シニ相成、漸々交易年延、商館取建人移り之分は相止ミ、漂人御救且追而交易取結ニ相成候節は、下田・箱館ニ可相成、且石炭可被下、薪水も以洋銀可遣、且入津之節々下田之内七里廻り之分勝手ニ步行可為致と申談シ相済候よし、林家はしめ兼而西洋之儀大嫌ニ而、出立前之勢は十分ニ説破之心

得之様子之処、其場ニ相成雲泥之相違ニ而、筒井・川路之応接とは格外之相違之由、左候而當時は西洋之事を称美いたし、交易之外は無之と申居候趣ニ承り申候、此程筒老人も被參承候得は、同様之趣残念之様子ニ相見得申候、此節ニ至り承候得は、下田ニ而余り異人我侃之よしニ候故、取締之為又々林家はしめ參候よしニ承申候、最早 皇国之御威光も無之、残念千万ニ存申候、水老公も被成方無之趣ニ而、御歎息之御書面被仰下候、左候而此節は御登 城御断ニ相成申候、未タ御返事は無之よし、全く勢州はしめ是迄油断之ゆへ、か様之有様と相成申候、老公御登 城無之を、却而閣中ニ而悦ひ居候哉ニ被存申候、右ニ付此程中より 尾州殿是非老公江御委託ニ相成、以来 御国威振興相成候様、老中江被 仰聞候、尤少々被 仰聞方御手強過と承申候、左候処ニ閣老之受不宜、被 仰立損之様子ニ相成候、誠ニ可惜事ニ御座候、以後被 仰立被行候処無覚束、左候得は弥 御国威衰候基、任天命候外は有間敷存候、老

公よりも徳川之天下十年とは難保と、余程御歎息之御様子ニ被 仰下候、此上は臨機応変之外は無之、御引入ニ而閣老共之所置御覽之思召と被伺申候、老中ニ而も以来御手当は心配被致候様子ニ候得共、兎角ニ長評議ニ相成候様子、最早此節も退帆後は人氣も相違ニ而、武器之売物も出候而、大砲鑄立等も何となく相止候姿ニ候間、以来十分ニ相調候義千ニ一も無覚束、扱々可恐世上と相成申候、六七月は魯・亜共又々可參由ニ聞得申候、此様子ニ而は異人之存分ニ相成外有間敷と存候、猶追々可申入候、此分は駿河江も御見セ可給候、一參府早目之訳、只今ニ何事も無之候、例之御一条も未タ有無之様子不相分候、誠ニつまらぬ世上ニ相成申候、右之通可恐世上ニ候間、成丈ケ不掛合引込居候心得ニ御座候得共、老公はしめ有志之向より書通等多く、甚タ掛念至極ニ存し居申候、余は後便万々可申入候、以上

廿九日

猶々弾正・安芸打つゝき之事、何とも驚入候、其上

下町出火、困り入申候、且また

京地炎上、誠ニ恐入候事、右ニ付而も有志之向色々

議論も有之候、猶追々可申入候、以上、

文書原寸 縦一六・九種 横二三六・五種

四八 斉彬公ヨリ久光公へ

下田条約後ノ情勢

(包紙ウツ書)
「とら五月廿九日

」

一筆申入候、其後愈御平安珍重存候、此地相替儀無之

候、然は異船之様子箱館・下田共、先可也ニ相濟候哉

と聞得申候、応接人之以心得、最早交易も開ケ候哉ニ

聞得申候、先兩三年戦争之掛念は有間敷、異人益我侭

之振舞可有之掛念計ニ候、琉球も是迄日本服従内々ニ

候得共、此節之場合ニ而は、夫ニ而は相濟間敷との事、

(阿部正直)
辰より相談も有之候、いつれ今少し治定相成候ハ、

誰そ差下し、委細可申入、且琉江も細事申遣し篤と治

定無之候而ハ相濟間敷存候、此上は琉ニ而も商道開ケ

候より外御座有間敷と存申候、扱例之義も異人之儀炎

上旁何分難分、辰之口ニ而も当時何分返答難致、少々

折合候上之事と此間も被申候、三次郎母子案んし可申

と存候間、内密御伝可給候、何分善悪相知兼申候、

一異人下田之様子七里方勝手ニ歩行いたし、品物も自由

ニ取替も有之よし、此間内々人遣候処、誰ニ而も金銀

と取替出来候段見届ケ罷掃申候、其通故、琉地は猶更

之事と存申候、武備何分御手薄之様子ニ御座候、委細

は後日可申入候、恐々謹言、

薩摩守

五月廿九日

周防殿

猶々御自愛專一奉存候、海国凶志之内亜国之分出

板ニ相成候間、煙草入相添致進入候、取込早々申

入候、以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 斉彬公史料」第三卷第五三号

文書ト同文ナリ

文書原寸 縦一七種 横一一九種 包紙原寸 縦二二種 横四二種

〇四九 琉米条約

久光公手写並句読訓点

五〇 真木和泉ノ魁殿物語

(表紙)
「魁殿物語」

魁殿物語

心にもあらで世をのかれて田舎に住人ありけり、霜月廿日はかりのことにやありけん、霜いと冴て月の峰をはなれたるハ、氷をかけたるやうにえたえかたう寒き夜なれハ、埋火にさしよりて、かつ眠りゐたりけるに、砌のあたり何やらん物いひあふけはひすれハ、やをらはひ出てそうしの破たるひまより見たりけれハ、二人のをのこなん立たりける、一人ハとしのころはたちはかりなるか、烏帽子高うきて、白き狩衣に黄なるさしぬぎ下にてくゝ

りたり、一人ハ少しをとなひて見ゆるか、四十にハわかし、これも烏帽子きて黄なる水干に、けそうにハあらず菱の紋の見ゆるハ大口などにやあらん、いつれおとらぬ姿なり、水干きたる少しさしよりて、誠やおなし所におひ立て、物いひたる事さへなく、年月過しハほめなく、はたむらいなるわさになん、むねあはぬ友ならハさる事なから、おなしう歳寒の友なるをよそめもわひしかし、あそんのの給はせたる様にこそ、おのれもその事のみおもひ過しつ、むらいハおのれのみにも侍らねハ、罪ゆるし給へ、さてかう打とけ物したりつるには、かたみにうらなくかたらひてこそ、今までの罪はらふわさにも侍らめなといふなり、しはしありて狩衣きたるかまうとハしんかりに名高くものし給ハさる事ながら、おのれも魁と世にまミれ侍れハ、をちなきものにも侍れと、かたみに心あはせて軍し侍らハ、をさくまけもし侍らし、年ころ魯西亜・英吉利・仏郎察、又ハ亜米利加などいふ多しとも、大きな船にふとき石火矢なとりのせて、を

りをり長崎あるハ浦賀にまる来て、交易とかいふ事をひたむきに願ものすとか、をろしやハさときものや、おほきゑその千島にて皇国とおのか国との界わきためなければ、正しうし侍ん、界にていひもて行ハ、隣国なれハゆくさきまめやかに交りなんなど、いとせちに聞えあけたるハ、いとうらめしきわさなり、さりとして彼らハ年久しう軍のみして兵を強く国を富し、軍の調度ものゝふの教などもよくしたてゝ侍れハ、さすかにはしたためられましうこそ、まして四か国うちつれて参来にハ、たゝ世の常に物してもえたえかたうなん、真人ハいかにおほし給へるにか、朝臣もさおほしめすにや、うれしうこそ、おのれハ此年月此事のみ心くゝおもひ侍りて、夜もをさゝねふり侍らす、むかしより天下みたるゝ事も度々なれと、家のうちにて兄弟のうたへあらそふ様なるわさにて事治り侍れハ、又もとの国なるか、彼ゑみしともにまけ侍りて、国をとられたらんにハ、ふたゝひ天津日の光を仰ぎ見る事もなく、夜ひるのわきためなくとこよゆくなど歎

きしむかしの様になり侍らんかし、我一步を退れハ彼一步を進るわさなれハ、一日もはやく策を定て、一步を進る様にあらまほしきことなるを、肉食の人とやせんかうやせんとのみおもひみたれて、年月をいたつらに過し侍るこそ、けにつたなきわさなれ、三百余年の太平にて人もむかし人にハ侍らす、たよはくハ侍るとも、上のおきてたにひたすらに定まりなん、なとかはかのえみしともニむけにおしけたれハし侍らし、むかし弘安の頃元といへる国より十万の軍やり侍らんとせし時、東の將軍の執柄時宗といへるいたく怒りて、国々の大名ともに、我よりさかよせし侍らん、用意せよと、にはかに申下せしか、やかてかの十万の軍筑紫にわたりつきて、さうなくせめかゝりしを、其あたりの大名とも用意したることなれハ、我さきにとはせ参りてふせき矢いたりけるに、をりふし大風吹て船ともものこりなく海に沈たりけれハ、島々にやうゝはひのほりたるをおひつめて、(備か)はつかに三人国にかへしつとなん、太平の世のならひにて、大かた人の心

一定せずあるか、中には真心に用意して令を待ものも侍れと、さる事あるものにもあらず、吾ハかほにさわき立んハ、たい／＼敷わざなりなど、なか／＼にまめなるをいひくたすそおほき、されハ今の急務ハ人の心を引立て、天下一般に真心になりて、あはれ人にハおくれしとあるハ、軍艦あるハ大砲あるハ農兵をおき、あるハ水軍をならはし、春こそ渡らめ、秋こそ出たらめなどひしめく様にてこそ、かのえみしか軍し来るに応し得へきわざなれハ、さるを只いたつらにさまよふ中に、彼らか奸計いよ／＼熟して、はて／＼はいかにもすへき様なく、彼らかおきてのまゝになりもてゆきて、国ハいつしか吾国にも侍らす、今こそ大臣なり近臣なりなど、いみしきおもゝちしたるも彼か囚となりて、あらぬ国にうきめを見るより外のことこそなかるへけれ、けに／＼など云て手うち膝打物するか少し耳さわりなれと、かう何ふをしられしといきもせて聞かたるに、さらはとて四の国の兵をおなしく待んハ、むけに謀略なきわざなり、かのをろしや

もおなしうはらきたなき国なるを、仁義の辞もてまめにいひおこせけるを誠と聞なして、こなたよりも使などやりて、いとまめやかに交り、外の国々よりをろしやを奸謀あるにやなとうたかはせ、国の界わかつ事ハ千島をまたくみくにの物と定めん事も、今の世にてハ難かるへけれハ、くなしり・えとろふをはしめ、北なる島々ハ極寒の地にて益も少く、守るにも便なけれハ総て彼に与て、からふと島をミナから皇国の物として、間民あるハえとりの壮強なるを数十万人扱ミ出で、伍什の組をたて将校をおき、島々浦々嶮要の地に保障をとりたて、土地のよろしきを視て耕耨を教へ、漸々にかの黒水靺鞨、満州、朝鮮の人を懐け、其地をとり建牧置監国の藩屏となし、清国に使をさして、共に蹄角して、西洋のえみしとも巢窓ニとしたるしやわの地をとり、彼等を逐はらひ、ふたゝひ東海に帆影をも見せえぬ様にすへき事なり、さて其をろしや交易を請はんには、皇国も世久しう治りて、金銀の類いと少く、はた交易すへき物も侍らす、米穀ハ少

しつゝあまりもあるへけれハ、望にまかせて、をりく物し侍らん、其かはりには軍艦炮器の調度など用あるものミとりて、艶麗あるハ翫好の類ハいたく費してもて参る事をとめ、又皇国より軍を出さんにも、亜米利加など寇し来んにも、援兵など請ことをせず、仮初にも彼か恩を物すへからず、朝臣ハいかに、真人ハ深く思ひはかり給へり、いたつらに腹たゞしう思へるにハ侍らず、されハこそ夜もやすくハいね給はさりつらめ、あなたふとやなといふ、さてかうせんには、先つ内の政教を正しくすへし、教といふハ人心をかたうするを要とす、されハ昔の神なからなる道更張して、人心ひたすらに天をいたゞき、異物を見てうつらす、仏の道も邪教の一端なれハ、此時を時として、其害を除き、其人を人にし、其書を焼て其調度田宅みな兵を養ふに共しなは、おのつから費を省くにもなれり、政といふハ人の世をわたらふ道なれハ、財用を理る事を要とす、先つ今の世の奢といへる筋をことくのそぎ、人ハ四民に限り、業ハ九職を

正しくし、或ハ衣食住の制を定め、あるハ冠昏喪祭の礼を正し、形体おさめて半髪の見くるしき姿をかへ、称呼を一にして、兵エ御門の虚名をすて、実名をなのり、庶人に至までも服色をかきり、奇衰のおこりを防ぎ、士農ハ田地を均賦し、工商ハ職業をおほせ、各其業を精勵し、十年に三年の食をあまし、終に菽粟水火のことく、国にあふれ生を養ひ、死を喪してうらみなく、曝々たる事上古の民のことならしむへき事なり、かくあらまはしとおもはゞ、天下貴賤親疎の差別なく人才を択とりて、其徳を尊ひ、其能を使ふにあり、あはれ天照大神また国をすて給はぬにや、天災地妖をもて人主を戒め給へり、ありかたきみたまのふゆなるをいめとはかり打過しなん、行末いかならん、とみに眠を覚して、其みめくみに報ひ奉るへき事なりかし、今宵ハいと更にけり、又の夜にこそと立わかれぬれハ、そうしひきあけて見るに、月ハやうくなかそらなるか、鳥のからくと鳴わたるハ、夜や明ぬらん、ありし所を見れハ若木の梅と少し色あせたる菊一

もとなん有ける、

またの夜と契れりしハ今宵ならんと障子ちかう火桶すひつなと引よせて待居たるに、今宵はたいと寒う、かせさへそよと吹わたたりて、いと物すかう更行に、いつしかうちふして眠れるを、例の砌のあたりに、水干きたる立出ていさ給へ、過し夜の物かたりをかしかりけれハ、又なんといふ、狩衣きたるおのれも早う物すへかめるをさわらふ事ありて、おそうなりつ、よくうけ給はりつる事、つく／＼と思ひ給ふるに、けにうらめしきわざになん、さりとてにはかに左様にもなり侍らし、今の勢にてはいかにかなり行侍らん、まうとのおもひ給へる所うけ給はらまほしうこそ、けにあそのの給へるやうに、よく物語りしハ、上に明主あり、下に賢臣ありて風雲際会の時に乗してこそおこなはるへけれ、只今の勢もて思ふニ、三四年、五六年の間にハ、天下二つにわかれなんとこそおもへ、そハかのおとなととにかくにおほとかにのみはからひて、猛なる事をせず、えみしとものねぎ事十か

うちに三つ四つ、五つかうち二つハゆるして物するはとに彼ら之くにの政ハかうなりけりと見て、はて／＼ハいひましき事をいひ、すましき事をもしてむけに心にまかすへけれハ、心ある人ハえたえかたうおもはんに、さつまなりと火の国・こしの国などいへる君ハ、おとなとものしわざあなつらはしく思て、世いかてやかうなりや、彼らにさしましらひて、おなしう恥かしからんハ口をしきわざなり、今ハ至尊こそ賢くましますせ、よもあしうハはからはせ給はし、まして徳川の流にも、前の中納言の君こそいますれ、おのれらハ至尊をいたゞき、黄門のおきてにこそ従はめなと、外様の侯伯とも大きなもちいさきも、一むきになりて、今こそえみしとも参来なは、きたひつけめうきめ見せんと口々にゆるぎ物せんに、おとなともハ、いよ／＼おそれて、とさまかう様はからふに、普代の侯伯をはしめ旗本の小名とも打集て、いみしき大事こそ出きにけれ、えみしともよりハ、外様の人ニなんおそろしき、かくてハ君ハいかにたとせ給ん、黄門

こそよからぬ人なれ、至尊こそ見すてさせ給へなと云て、
あらぬばかり事をするうちに、いよ／＼二つにわかれて、
東の人ハ西を恨み、西の人ハ東をあなつらはしう鼎のわ
くかことくなるへし、かゝるをりふしにえみしともいか
にかする、彼らか為にハ又なくよきをりなりや、さりと
は天照太神また世を棄給はねハ、えみしとものおもふま
ゝにもなり侍らしとおもふなり、あなまさなや、おとな
どものひかいえよりこそ左様にもなりなめと、少し声高
うなるをいとかたはなり、壁にも耳ありと制してさゝや
けハ、いと時めきせらるれとせんすへなし、しはしかほ
とハさゝやきたるか、やう／＼高うなりて又よく聞ゆな
り、狩衣きたるか声とおほしくて、真人のあけつらひ給
へるをいかにそやおもひ給ふるふしあるにもあらねと、
魯西亜はかりを親うし侍りて、外のえみしともハのこら
すうちきためんとの謀略ハ、いみしきわさの様なるか、
つら／＼おもひはかるに、百年の後にハいかにかなり侍
らん、えみしといふなかに、をろしやハ又なき大國に

て、國とみ兵もつよく、蝦夷の千島をかつ／＼とりて、
今ハえとろふさへ守りかたく、まして唐太ハ大かた彼か
物となりて、彼らか仰き尊ぶ仏の教を敷て、よく其國の
人の心をとり侍るとか、御國と親うし侍らんとこの心も、
其國の東のはてなるしへりかむさすかなといふ國々を、
ゆたかににきはゝしくし侍らんとこのわさなるへけれハ、
今かれに親うし侍りたらハ交易ハ許すとも、おのつから
彼か望る様になりて、其東の國々いとよく開けて、人も
多く、國もとみ、やう／＼城墩など取立て、軍するに便
よからんをりになりて、界を争ひ人を懐けなとし侍らハ
御國の為にハいみしき大事になり侍らん、万ことハ始を
慎み侍らねハ、後になりてせんすへなき事になりゆくそ
かし、むかし唐の太宗といへるハいみしき王なりしか、
軍を起しゝ時、突厥といふえみしに力をかり侍りしか、
其禍やみかたかりしとなん、晋の石氏・漢の劉氏などハ
えみしの力にておこりたるか、膝を屈めて奴と申けり、
されハ始大かたにおもひてわか便よきわさのみ物し侍れ

ハ、後になりていかにともすへき様なくなりゆくわさなり、さらハとて四国の兵をとにも受んハ、え堪かたけれハ、彼あめりかを御国の助とし侍らんそよき、先つ彼か願事一つ二つハゆるし侍りし事なれハ、今更にはかに打払ひ侍らんも辞なけれハ、御国よりさるへき大臣を使にさして、交易ハ昔よりのおきて有て許しかたう、はた交易すへきものもなし、少しつゝの米穀あらハ、農器器皿などハやり侍らん、其かはりには兵器船舶を参らせよと、いと懇に心を尽て物し侍らんには、あしうも聞侍らし、亜米利加ハ船路にてハ早く往来すとも、国も遠く王とも共和にて末永く強も侍らし、御国さへやう／＼国とみ兵つよくなり侍らハ、正朔をも仰き奉る様になりなん、さまたへなり侍らすとも、国からよからねハ、とにもかうにも我おきてにこそ従はめ、今の勢にてハをろしやを親しみ、あめりかを打払ふそたやすきわさなるへけれとも、行先の事おもひはからハ、かうなんするそよきとおもふなり、けに朝臣のの給はせたる様に、さうこそおの

れかおもひはかれるハ、まのあたりの事にて、姑息とも云へきわさなり、こは朝臣の謀にこそ従ひ侍らめ、あなかしこひか事おもひ出し侍りけるかな、になうかしこまりたるけはひなり、さてかうやうなる謀略もせすてやみなんや、皇国小しとハ申なから、人ハ三千万あり、食物ハ瑞穂の名もしるく、五千万も養にあまり、黒かねも細戈の名に恥しからず、精英なほ外国にかゝやけり、軍艦こそたらはね、今より作りたらハなとかは千二千ハ一年の中にもなり侍らん、いて／＼謀をやめて、ひたむきニ参来んえみしかつ／＼にきたためつけてこそやみなめ、かくてをろしやも、あめりかも、ふらんす、いきりすも、こと／＼に一つになりて参来ん時には、御国を一城となして老弱男女の差別なく、とり／＼に長きみしき兵仗儀仗にかきらす手々にとり持て、只一軍とおもひなして、かつ防きかつ戦ひなは、天地鬼神も祐給はん、かくてもまけ侍らしはいかにせん、為へき事してやみなは、天地にも神明にもおもなく、やさしとおもふ事も侍らし、いて

く用意せん、朝臣ハなにを得物とし給へるにか、おのれハ遠きハ弓もて射おとし、ちかきハ長刀太刀など時に応して物し侍らん、大砲小銃ハ其人あり、おのれまた其術を学ひ侍らねハ、今更ニ真人ハいかに、おのれハわかゝりし時より小銃をかつく学得し事なれハ、これなんよきとおもふなり、大砲とてもおなしわざなれハ、をりにふれてハいなみもせし、いて魁殿の契ハよも違はし、あはれうらめしき世の中の末の松山波はこさしと、かたみにかはほり打ならしてたちわかれぬ、

甲寅のとしの神無月廿日あまり八日にかきつゝりぬ

冊子原寸 縦二六・七糎 横一九・三糎 一三枚

〇五一 重富領高調帳

五二 佐久間象山蟄居ノ幕命

吉田松陰米艦乗組一件ニ付

真田信濃守家来
佐久間修理
(幸敷)
(森山)

右之者儀、和漢兵学・西洋学・砲術等師範いたし罷在、近年西洋之風教国力等漸々盛大ニ相成、加之蒸氣を以走り候迅速之船出来候趣、先年書籍之上ニ而発明いたし、自ら西洋茂隣候道理ニ而、殊ニ異国船屢渡来いたし候ニ茂、万一本邦を以窺竄いたし、近海江運艦を進め候儀茂可有之と、業体江対し実用之場合專御為を存、海岸防禦は勿論、必勝之籌策を考、日夜苦心摧肺肝候処、戦は彼を知り己を知ると申内、当今之形勢は彼を知るに止り候儀と研究いたし候折柄、門人吉田寅次郎義茂、(松陰)此者同様海防策等之儀を平常心痛いたし、外国江渡り間隙細作を用度旨議論いたし、元来同志之申分ニ而其器ニ当り候者ニ候得共、異国江渡候儀重き

御国禁ニ付 官許は有之間敷、自然漂流之体ニいたし、成年手段を以西洋江渡り、事情探索いたし候て帰来之功茂可相立と申聞せ、其後同人義九州筋遊歴として発足い

文書原寸 縦一四種 横七五種

たし候由ニ而、暇乞ニ差越、右は渡洋之企と同人胸中を
 索、其意を合送別之詩作を送候得共、右手段は不取行立
 帰候儀、当春亜墨利加船浦賀表江渡来いたし、主人信濃(真田幸教)
 守義横浜表応接所警衛被 仰付、此者義を軍儀役として
 同所江出張いたし候砌、猥ニ異船江近寄間敷旨別段被
 仰出も有之候処、水夫ニ紛れ異船江可近寄と、吉村一郎
 江相願、或は吉田寅次郎義重之助俱々宿陣江尋参り、異
 船江可乗込と通弁之為投し、漢文之書籍草稿を差出候逆
 添削いたし遣し、殊ニ寅次郎義異船江寄候策を索メ候節、
 是又吉村一郎江頼之文通認メ遣し、終ニは寅次郎外ニ忝
 人義、下田表江相迫り同所ニおゐて上陸之異人江右書籍
 を投し置候、夜中窃ニ異船江乗込、外国同伴相頼候得共
 承引不致被送戻候次第ニ至り候段、専
 御国之御為を存量仕成候旨は申立候得共、元来同志ニ而
 重き 御国禁を犯候段不届ニ付、真田信濃守家来引渡、
 在所ニおひて蟄居可申付候、

〇五三 齊興齊彬二公へ下賜ノ御製

五四 齊彬公ヨリ伊達遠江守へ

八戸南部侯其他ノ件

(封紙ウツ書)
一藍山公閣下

齊彬拜

愈御安康奉賀候、別紙御覽可被下候、五日は何卒登城前
 ニ早く御出可被下候、小子も参り可申候、五日迄ニ御考
 も可被仰下、(牧野忠雅) 牧之口氣手ぬるく可思召候へ共、小子直ニ
 申候間、先其假ニ致候、此後は牧江参候而、か様々々ニ
 被申候と申義、南部より直書ニ而小子江表向参候而も可
 然と奉存候、南部江は六日ニ牧江参候姿ニ而、武兵衛被召
 呼、同苗江直書と申遣候へ共、考候処、武兵衛江か様ニ
 牧野江問合之処、返答有之と、書面被渡可然と奉存候、
 其書取貴所様江勘考可被下候、夫故小子同苗江申候処、
 大意申上候、都合よろしき様奉希候事、誠ニ取込以口上

申上候、以上、

三月二日夜

別紙南部江御見セ可被下候事、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 斉彬公史料」第一卷第四三二号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・六種 横一〇七・七種

五五 真木和泉ノ治国八策

国体教化 封建 恭儉 農業 武備 人才 風俗

(表紙)
「八策」

(本)
「八策第一之卓識等為開卷冒頭、亦大当矣」

八策序

士之論治道、宜拠上世神聖之法、不宜降奈良之朝、取乎西土者、亦宜取三代已上、不宜降漢唐、如平安与鎌倉漢唐与宋明、或有其微成敗者則有焉、何足取之哉、今学士大夫自以謂為講治教之術者、輒曰君子行礼不求變俗、古之

于季世之法
法先王之意
二句似相反

与今、時勢之殊、人情之異、宜在斟酌損益而拠旧例古格法先王之意而已、而其說迂曲、如或可有聞者也、然、迂曲廢置皆欲求而合於世、而牽強付会者也已、

夫道之行天也、非人力也、上有英傑之主、而

下無賢明之臣、則不可行也、下有王佐之才、

而上無有為之君、則亦不可行也、苟有君果有為之

為、而求道如飢、則雖崇論說以上世之事以為今日欲議、聞之必且常

談平話矣、彼迂曲合於世牽強付会者、固不可

得陳之也、苟無意乎有為、而唯名之求、則雖

進以婉言美辭、陽取焉、置而不問、然則其欲

合於世者乖焉、要不亦行也、士之講学、固將

施之、而天之未也、天不可強也、士而亦不可究改其

学也、学而欲必施之、此強天也、孔子周遊于

天下、無諸侯而不見也、道不行矣、而未嘗變

其志也、孟子見齊梁之君、必請行仁義、言不

聽矣、而亦未嘗變其說也、天之未也、雖聖賢

莫如之何也、亦尺在乎已者焉耳矣、若夫造器、

欲何字ヤ
拠アリヤ

世之

結末不言
時可

国体

可謂

敗亡之字
潰有弊

一篇根拠
三代之尚
確然不動

移入神代
中來君家
引証自事
加幾等在
勢卷中往
世聞之是
所不及人

円則依規、方則依矩、廢規与矩、而造方円、雖成也不可用焉、治道不依先王之法、則不能登至平也、故士之論治道、務修先王之法、務称先王之言、如是而已、其施之則或有其時矣、

君臣上下、此敗之矣、教化禁令、此可亡之矣、惟其体者不可一日而廢也、体者何、天下之所尚也、即君臣上下之所由也、教化禁令之所出也、苟所尚不定、則君臣上下何以立、教化禁令何以行也、夏之尚忠、殷之尚質、周之尚文、以此為体、而其礼案刑政凡百之事、皆由之而為之節、而未嘗不称乎所尚也、武者我之所尚也、而一定乎神世、以至今日、在昔 諸尊之造国土、用瓊矛、大汝之經營四方、伏広矛、天祖之授 天孫、有宝劍、 太祖之入中州、

抛韶靈、矛与劍者器也、器而其授受之慎者、表所尚者也、神聖既以武定所尚、而其礼案刑

政凡百之事、皆由之出矣、故其君臣上下之義、

敵乎不可犯也、教化禁令之節、牢乎不可拔也、

夫武以兵尊焉、兵散則武之義亡矣、故天子統

而理之、有事則親師臨之、否則使太子或皇子、

未嘗假之臣下也、故其所尚恒定而不動、天下

混同、所以千万年為一日也、雖然、天步之或

艱難、時勢之或偷安、邪說妄行之作、其來亦

既久矣、其大者有儒于 応神天皇之朝、有仏

于 欽明天皇之時、而仏之害固不可云、而儒

亦非知三代聖王之道者、有適足乱国之旧者也、

用明天皇以後、仏氏漸隆、而大臣佞之、以檀

威福、雖至。弒逆、而人不異、天下紊乱、道庶

幾乎墮地焉、 天智天皇恭然一怒、戮乱賊以

反正、且欲攘旧弊而震皇威、乃廢天下国造県。

尽為郡県、有司治之、而位有文武、官亦有文

武、蓋倣李唐之制、是唯知撰旧弊而不知新弊更生也何則、酒其相天子而治天下者

大臣也、大臣皆文官矣、武官者特掌宿衛修器

応神用儒開成國家者不少入大書中如何乎天智佛李唐不可同日論

主

或

闕

六

械而已、非有權勢也、兵之不久試、天子無復親臨之事、振旅治兵、隨而不講、武事遂為無學無術之任、而上浸奢侈、衣冠容儀之修、如予劍反恥用之、雖儀有用之、号称儀仗、以利鈍置度外、於是兵權下移、勢浸委罷、至承平天慶之際、東西辺土、兵革稍動、而朝廷勾々、既無受外之任者、乃募下州之吏称武士者以討之、其後遂以為常、於是其所謂武士者、占土地養奴隸、窃封殖焉、源賴朝始開霸府于鎌倉、標天下兵馬之權、以私人為守護地頭、復為封建之勢、而自称武士以別乎縉紳、蓋其治武斷、雖非古之武也、名既武矣、所尚在此、故天下之勢復振、神聖以之定所尚、而其不可易焉者、可亦知也、蓋文武之岐也、文之貴而武之賤、其勢然也、況上自賤乎、天智之治、雖當時之勢不得已也、不免矯之而失中也、彼周尚文、然官爵不分文武、故三公各掌二鄉之兵、官之

乎

論已了
結末一段
甚晚不
如刪

卿即六鄉之大夫、師田役、自為一鄉之帥、雖漢始官有文武、然其昇丞相御史者、亦多將種自南北周隋稍岐之、至唐則進取殊殊、而服章車輿判然而別也、惜哉當時以天智之治者、獨見李唐文物之美、而不知彼亦曾諱三代聖王之意也、△今欲一新天下、非一々復先王之旧、則不可得古之隆也、而其尤急者在定所尚焉、故自天子至庶人、學問事業、皆服從于武、寧失乎剛毅木訥、不陷。巧言令色、入則修忠信名節之德、出則明戈矛刀劍之用、精一懋實、各安其分、以共天職、則皇威之震、國風之宜、可立而待也、如此而後可謂不諱先王建基之意也、蓋武之為道、質実間潔、義兼忠實、故我之礼樂刑政、其義正直、其數簡易、暗合乎夏殷之道者、往々而存焉、孔子曰、先進於礼樂野人也、雖尚文之俗、其盛時之風可知也、易曰、神武不殺、尚武蓋亦孔子之所從也、

教化

論政之本
體不論今
古

上古之教人也、上自為之、而下觀而倣之、不
 必于教人也、故其為也誠、其倣也亦自然矣、
 人文漸開、則不得不建學校設教科、而教之、於
 是乎有禮有樂、有三綱五典之目、有小学大学
 之設、自幼至壯、四時朝夕、從事于此、夫出
 入無時者、心者也、不入于此、必入于彼、聖人
 知其然、故作禮樂、及其幼而未知所向、而納
 于此、而熟于此、与性成矣、雖見異物、不移
 今也、廢之、不直廢之、又立任之、而所
 在造立伽藍、与国府併行、以為政教、異哉政
 教非二、教所以為政、而政所以為教也、今其
 政雖非古、而不外乎人倫、而為之、以
 寂滅為道、以忠孝仁義為煩惱、其意之相戾、
 猶水火之不相容也、而欲以此為政、猶欲行東
 而指西也、不亦難乎、古之人務排異端者、非
 自狹隘而不能容之也、彼道不息、我道不著也、

乃 已

故周家設亂民造言之刑、而禁之殊嚴、夫好使
 而惡不便、則人情之常矣、苟縱其情之所趨、
 雖不仁不義之事、將甘為之、甘為之則禽獸矣、
 惡其禽獸也、於是乎教化作焉、蓋先王以神道
 設教、神也者、誠之至者也、故曰觀天之神道、而
 四時不差、神即天地之功用、不期然而然者也、
 王者則之、而治天下、故其政也誠、而其倣也
 明、且人之不飢、以有食也、食亦由功用而生
 不寒以有衣也、衣亦由功用而成、其德不可不
 報、人之生也、父祖生之、其息不可不報、
 焉、所以祭祀之起也、祭神如在、盥不薦、有
 孚顚若、人之接神、而誠之不可不也、王者能
 有誠乎其所祀、下觀而倣之者、亦安得不誠乎、
 於是乎其教成焉、其教成而其政正焉、一祭而政
 教俱舉矣、先王既以此為政教、而猶為嫌、則
 設學校、布孝悌忠信之教、故億兆一心、所向
 既定、望王者如望天、仰其政令、如仰風雨、

故曰王者之民皞々如、夫我民質直、唯令之從、

以仏教之、則入于仏、以儒教之、則入于儒、無所自挾焉、今復先王之道、上自為之以臨下、

則下觀而傲之者、何異于上古之時也、然今有仏教、有邪説、人心既不如上古之純、故設教

条者、不得不審也、而三世輪回之説、疊人心已久矣、易曰、遊魂為變、伝曰、鬼有所歸、

乃不為厲、死生顯幽之際、人之所不安、若不安之、則雖有礼案刑政養之正之、無益于事也、

然則明報本反始之義、上自父祖昭穆之親、下及緇麻同爨之恩、使死者安之、生者亦無嫌、

故

此蓋教化之本也、語曰、本立道生、祭祀表紀教之本也、天子則山陵之外建七世之廟、重其

祭祀之礼、諸侯及王臣、准其爵位之等立廟制、命士以上家必有廟、已下則氏神祠之側立教祠、而左右為列、如昭穆立位、同姓各一祠、雜姓則教家而一祠、自虞至大祥、祭于其家、祥祭

△ 之

闋而後遷木主于祠、每十年必祭、至五十年為

大祭、其後亦每百年祭之、以及千万年、不毀其祠、神以奉之、而謚号擬神号、命士已上官

命之、已下則同族私命之、又自冠昏喪祭至他之小節、各制其礼、々々則至易至簡、使之易

知易行、々之必於祠之堂、又祠下建社倉、其邑之田十分之一用為社田、以其所獲儲之、以

時養貧困無告之民、又祠下置小学、補師一員、八歲至十五學于此、而其文則大學頒之、天下

一樣、不得擅增減、以及孝經曲礼小儀、終之以律令之文、然後毀天下寺觀、十存一以為鄉

校、選其土之秀俊為博士、而奇袤之眩惑民聽者、禁之加嚴、當使異物之可見也、果能行此

道、則善心自發、必將有沛然不可禦者矣、若夫不正教化之本、而逐其末、則雖人誦堯舜之

言、家積六經百家之書、絃頌之声鏘々溢耳、何有益于治乎哉、

莫

自屯化來
縱橫說破
封建之理

封建

宗

封建昉于神世、太祖定都于中州、大封功臣、其他蓋依旧焉、至成務天皇、觀山河之形便、分国鼎之封疆、益封子弟。室其等五、曰君、曰別、曰国造、曰稻置、曰県主、猶彼殷周之公侯伯子男也、孝德天皇之時、天智天皇居儲田為政、知国造弊風漸生不可亦振也、乃郡県乎天下、国置守介以治之、又郡置軍団、養兵士以守其国、而其後国司復貪冒、民不堪其害、軍団亦廢、於是豪傑始起、兼併郡邑、封殖山野、侯伯自居焉、至後鳥羽天皇之朝、源頼頼朝始開霸府、觀国司之不足亦治民、置守護地頭、以奪其權、然未如古之国造也、及足利氏之任將軍、大其子弟功臣之封、於是封建之形復成焉、夫有人必有家、十百之為邑、々不可自治、乃有長焉、邑亦十百之為国、々不可自治、乃有君焉、国亦十百之為天下、々

一覽了然

非

愛

々不可自治、乃有天子焉、天子繼天而為天下者也、而天子不可独治天下、乃建君置長、次第而治之、天子既家乎天下、則君長者亦不得家之也、家焉、所以封建之起也、此自然之道也。天子之自私也、亦非私乎君長也、郡県也者、天子一人之躬、受天下億兆之奉、其公卿大夫輔佐之臣、朝夕進退、詐偽貪穢、唯身之愛、而憂国忠君者亦鮮矣、況遐陬僻壤任守令者、安有能。養其民者耶、遭飢饉也、餓孳充野、不知恤之、有寇賊也、白日橫行、不為拒之、輒脫身歸京、不嘗恥焉、士人之無節義、如此則国之氣脈、因以衰敗焉、而其所謂郡県者、昉乎秦王呂政、固非三王五帝四代之所定也、天智天皇之用之、雖時勢不得止也、不可謂能圻之者也、夫神州屹立于大海中、雖云天險、四方八隅、無非賊衝也、辺要不得不置城堡充兵士、而辺海距京、恒数百里、卒然有事、機非

國司之所決也、事亦非團兵之所任也、必當封

建侯伯、一方之事委之、而使之大小相維、緩

急相救、自擊自守、然後天下固也、彼則不知、

獨我神州封建為宜焉、太祖之依自然之勢、

而不改之者、亦有見于此也、然彼李唐有藩鎮、

能禦夷狄之禍、趙宋廢藩鎮北夷猖狂、遂掃其

地而奪之、由此觀之、則彼亦其得失可知矣、

然而今之諸侯、大則連數國、小則不滿一郡、

似無制也、古者分國鼎之疆、則為封國造鼎主

耳、今稱國者、其遺疆矣、郡亦多稱鼎、然則

大不過一國、小以一郡之地、古制然也、又按

彼周制曰、天下九州、々方千里、而天子圻內

方千里、專一州之地、公則方五百里、侯四百

里、伯三百里、子二百里、男百里、一州之地、

有四公六侯、然則天子食九之一、猶井地而公

食一也、今神州地有三百萬町、天子食三十

三萬町、則合九一之制、即三百三十萬石矣、

九分而一、則為三十萬石、以此為公之封、侯

乃二十萬、伯十萬、子・男五萬已上、此蓋中

正矣、而周則天子方千里、公方五百里、為天

子四分之一、所以不免末大不掉之患也、殷有

諸侯三千、然則公之封不得為五百里、蓋三百

里二里之間耳、乃所以天子常強、而能制御諸

侯也、今我之制、倣殷亦為宜焉、而其爵号當

用君別國造稱置鼎主之稱、命位亦為今之三位

已上、復賜冠之制、而伯已上有才德者、舉以為

六官之長、其他兼衛府之任、更番宿衛、又察

天下之地形、四方置將軍府、以皇子為大將軍、

鎮其地方、其兵用公國之制、而以時更番于京

師、伍六鄉之士、其租中分之、而一分充府之

用、其二三分之、而一輪京師、一留為儲峙、

夫較輕重者權衡也、不明權衡以較之、則其重

者反輕、輕者反重、較天下之輕重亦如此、故

能察天下之輕重以制國、察國之輕重以制邑、

若我至此也廿七字移于可知矣之下文理似得叙不然彼帖然而不妥帖

皆無偏重偏輕之失、則天下常安矣、苟失其輕重、則內既亂敗焉、能御外哉、故能校古今大小之損益、又參彼三代興廢之所由、在乎得大中也耳、

恭儉

天下治安而悠久、人之所欲也、所以致之者何、君臣恭儉也、天下禍亂而短祚、人之所惡也、

所以致之者何、上下驕奢也、夫驕奢与恭儉相反而相近者也、不僅恭儉、則入驕奢、其間不容髮矣、乃^{苟驕奢}失^其所欲、而得^其所惡、不可不慎也、

一篇大植說
儉而不說恭
事天下之
宜先論
恭且遙拜
下段等之類
移于此御田
養蚕等
桑篇如何

昔者 天祖恭已能事天、亦能仁民、乃獲五穀之種、殖之御田、又養蚕以織帛、先薦之天神而後自嘗自服、以謂兆民可莫飢寒、乃授 天孫以其種、亦使能畜用、而莫浪用也、太祖之建都、務依僻左、其意蓋避繁華、而惡驕奢也、其後世々遷都者、意亦在于此焉、伊勢神宮太廟也、其經營宜極壯麗、而茅屋采椽、莫所美

各國有京師之饒句似未盡可再考

增

家族居國一兩年間有此許

飾、可謂儉矣、然其祭祀之慎者、有齋宮、有祭酒、神官亦衆、祭亦無虛月、天子之遙拜必下殿、又不敢背座于此焉、可謂恭矣、古之取民、蓋薄於十一、故民富而饒、上之用財也節、故國常足、其世々遷都者、以今觀之、宜如不堪、而未聞其以之罷弊也、且觀其墟甚狹隘、特一小侯之治也、繇此觀之、當時國造之都、不過今之馱郵耳、桓武天皇始遷于平安、用周宮國之規、廣大之、然唯一都、未足傷乎天下也、今也有江戶有大阪、皆倍于京師、而諸侯三百、各國有京師之饒、如伏見兵庫新潟長崎、自為都會之地者、亦幾許也、而皆競繁華街壯麗、務戶口、於是商販浮食逐末者日多、遊惰亡賴為奸者歲集、上既以之為榮、從政者亦以為宜如此、而列侯皆家于江戶、雖其子弟、不許居國、乃奉國之租入、輸之大坂、以換金幣、輸之江戶、而復買穀、其費不貲矣、此一

國而為二國之計者也、而從之役更江戶者、自士

大夫至民庶、不知其幾許也、故其郊野人少田

蕪、生穀浸減、租入不足、而今年之費、予用

來年之取収、而其農民者亦奢、一年所獲、不

償一年所費、不待凶年、而既菜色矣、仏氏之

盛也、寺觀之大、僧尼之衆、器械衣服之美、

皆稱其奢、而其區域之妨地、与奴隸之耘穀、

亦不貲、今以五十万寺一寺五口率之、則二百

五十万口矣、此其不耕而食梁米、不織而衣錦

繡者而已、古曰、彫文刻鏤、傷農事者也、錦

繡纂組、害女紅者也、今都邑之大、寺觀之多、

遊民之衆、固非天下之所堪也、乃上下交受其

害、不足異焉、伝曰、量入為出、天下雖広、

生物有限、先王知其有限、不敢浪用、故。薄於

十一、而財常有余、民亦安其分、而有儲蓄、

不知凶年饑歲為何物、而養生喪。而無憾、此無

他、上恭儉自率、而下化之也、嗟夫、恭儉為

侯

天下之大資乎、孔子曰、君子之德風也、小人

之德草也、草上之風必偃、故天子能恭己、拳

賢能任之、又能節儉、而厚乎財之所出、諸。皆

就國、三年述職、其城市戶數有制、寺觀則毀

之、以僧為兵、其区域墾之、使僧之為兵者耕

稼之、都会之地、遊民之所聚、則敵其制、使

不擅之、厚本抑末、四民多寡、較其輕重、上

下有分際、尊卑有禮制、行之匪懈、積以歲月、

則挽回乎古之盛、豈難乎哉、

農桑

人不可一日而無食也、不可一日而無衣也、農

桑之政、於是乎急矣、太古之世、蓋獸肉菓實

為食、羽毛木葉為衣、而人民漸庶、此固非所

給也、天祖深憂之、迺遣。于保食神、獲五穀

之種与蚕与牛馬、五穀則殖之長狹二田、蚕則

養之齋機殿、百方竭力、以得嘉穀美帛、乃大

喜曰、蒼生可以免飢寒也、授之。天孫、々々頒

租

死

二石下脱
五斗乎

之天下、而其業益盛、太祖已來、勸農課桑之事、最先諸政、而穿溝築堤之事、稍々而興、復免蠲除之令、往往而下、其所以優地利厚民力者可見也、然而上世之租稅賦役、其法不可知、蓋薄於十一也、至大宝法制大備、而田三百六十步以為段、々々之所獲稱五、二十束、其租二束二把、一束春得五升、則獲米二石、々々而納一斗一升、此二十九分之一矣、此口分之租、而剩田五三倍之、又有庸調、庸即力役之征、役則免之、調即布縷之征、雖以布定之、納郷土所生之物耳、今以徭役折法校之、則庸調亦各当租、然則正丁一人受二段之田、而為出米三斗三升、王政陵夷、班田事熄、天下特剩田而已、謂之地子、其租即五三倍于口分者、力役亦繁於往時、而庸調廢、及豪傑並起、各国力争、租稅徭役、国異其制、亡亦法制、豊臣氏起、而一天下、於是大檢天下之田、段為三百步、

論鋒中
非急之者
刻之可

茶カラシ西菜
蓮カ之類
如何似遺
之菜字
当否可考
夷舶貿易亦
似遺之

此等論中
不違稱師
却沮文氣

而租稅大抵四公六民、而用貢法、大宝之田、三百六十步、々々之所獲、定以為一人一日之食、而充三百六十日云、今縮為三百步、此亦奪一人六十日之食也、或曰、田則同矣、度有古今之異也已、今天下之田蓋有三百萬町、水陸田所獲、以米率之為二石、則六千万石、人口亦有三千万人、正丁一口食二石、老幼半之、其又有余牛馬之食、此則一年所獲、僅給于一年所食矣、而奢侈之所耘、非一、薦蔗蘆藍之妨地者又多、又有舟舶之不牢、而喪海運者、又有聚于都会、而亡火災者、而民力憊乎徭役、地力傷乎草萊、所獲益寡、所耘益多、今也此年豐稔矣、而無見儲民民苦衣食者、理之当然、亦何異乎、孔子曰、一夫不耕、国受其餒、一婦不織、国受其寒、今也遊民之衆、不耕不織者殆相半、則天下之飢寒可農夫之獨勞漸々者可憫也、而此猶可也、特其田之就荒蕪者、憂也可甚懼也、如此而不正、則其三百万町者、且

變乎草萊者幾少矣、夫衣食者、民命之所繫、天祖

天孫之苦心焦思而所獲、雖土固宜于穀、敏歷聖之憂恤而所開墾肥沃也、然今使變乎草萊、五

穀不登者、豈所以臣子之奉祖先之道乎、易曰、聖人之大宝曰位、何以守位、曰仁、何以聚人、曰

財、々所以人之生活者、衣食是也、無財雖天子不能聚人也、天下之政、豈有急於此者耶、今欲

從事于此、則天子置藉田、率大臣与国造之述職而在京者耕之、以為祭祀之粢盛、皇后置蚕室、

亦率大臣国造之夫人就之、以為天下之先、而使土地着、自京師至国都、遊民之逐末者、皆驅之

就田、其田則日墾、山則樹之、川則濬之、遂溝洫澮、尽其利、然後大檢天下之田、正經界、

均町段、因土味分九等、甲稅則十一、八段以為一戶之分、羨九十余夫、随有班与之、不得壳

買、特其廬之所在与場圃、為永業、雖買不禁、又其場圃或陸田、戸二畝殖木棉、大抵当二十

十

斤、此為棉帛五匹、其一匹納之官、為布縷之征、力役必役人、不役則貢棉或布、而凡民之七十已上者、許衣絹帛、士已上養蚕而衣之、

不蚕不許衣之、又里置一社、々置倉、以其里之田之十一分為社田、上農夫耕之、獲稻十分

之一以為耕資、其九分峙之倉、供于行礼儀与賑窮困、行之天下、則儲峙常有十一分之一、

雖礼儀与窮困有所費、積至十年、則必有三年之食矣、而礼儀之行、窮民之養、豈不亦多乎、

如此而後可謂酬天祖天孫之恩顧也矣、
武備

武既為所尚焉、兵制不可不具也、昔者藏兵于神社、雖天子不敢專之、有事則告而後用焉、

視天下兵神器非人之所輒用也、而其制軍、今不得詳之、天孫之治下土、大久米命督其兵、

太祖之東征、久米之孫道臣復督之、而其兵遂号為久米部、及饒速日歸順、有物部、迺使速

文獻足徵

無

為

日督之、而兼掌刑罰、猶彼晉繇為士而師兵也、
 久米物部蓋皆地着、無事就田、有事受兵、而
 各屬其師、亦猶彼六鄉之士也、國造亦有兵、
 々即農之正丁者、故村落所在。不有兵、而其兵
 雖衆不冗食、至天下為郡県、兵制亦大變、郡
 置軍団、以其郡正丁三分之一為兵、隊分騎步、
 各習其技、大小毅掌之、交番于京師、而分隸
 于六衛府者、謂之衛士、守三辺者、謂之防人、
 有事則太政官下符于國、使兵赴其方、將軍督
 之、事止直歸其団、而其將軍亦臨事而受其任之
 者、竣事止解其職、故無擁衆跳梁之弊、頗良
 制、蓋亦倣李唐之制也、世屬昇平、金鼓不試、
 団結浸廢、於是有募兵、而一庇募者、不解兵、
 遂号称弓馬之家、遂即属源平両氏者、及源頼朝
 為霸、特寵其隸人、為守護地頭、而行役使各
 以手兵当一面、或百人、或千人、不能齊一也、
 降至足利氏之叔世、戰爭殊甚、漸知立節制、

何得之一
 句不俊拔
 可再思
 自然隊伍
 自師卦說
 出来有力

乃有越後、有甲斐、織田氏之長槍、伊達氏之
 輕騎、或鳥銃弓矢相交、或銃卒槍士代進、金
 鼓旗旌、進退坐作之法稍具、然皆其主將之所
 自得、非所謂紀律者也、及慶元偃武、務飾太
 平、漸至禁操練、而世之所謂兵家者流、往々
 窃論說、要皆剽窃甲越之名、而牽強付會者、固
 不足論也、頃者洋夷屢來請貿易、而辭氣侮謾、
 失礼甚矣、於是足兵造艦之令下、天下駭然、
 侯伯遽習戰陣、然而甲越之糟粕、太平之陣法、
 士則身体豐滿、卒則城市游猾、莫一適用也。且
 器械之繕、旌旗之美、國計之屈、固可知也以此輩之未及戰而
 勝敗已判、何得不速講適用之術也耶、易師象
 曰、地中有水師、君子以容民畜衆、地無不有
 水、士無不有兵無水則涸、象乎兵衛士、故曰容民畜衆、
 而其卦爻五陰、爻一陽、陰也者、順而聽令者、
 陽也者、剛而正功者、其陽位乎二者、亦臣之
 奉君命之象也、六五君之位也、除之而余有四陰

一陽
五、所以五人為伍、而有長一人也、此制軍之所

由以起矣、周官制軍、五々為兩、々司馬中士、

四兩為卒、々長上士、五卒為旅、々帥下大夫、

五旅為師、々帥中大夫、五師為軍、々將命卿、

而軍為一鄉、軍帥即鄉大夫、師為州、師帥即

州長、旅為党、旅帥即党正、卒為族、卒長即

吾表△号以請再考
凡策以可行為策不可行不可謂策雖第一等之上策亦何之益矣卷中不可行之上策不少

族師、兩為閭、兩司馬即閭胥、伍長即比長也、

祭祀喪紀、師田行役、相保相受、相及相共、

所謂因內政寄軍令者、乃所以三代之兵多而不

害農、國強而不費財也、今拋周制行之、假令

一萬石之田有千町、其農戶每村四十戶、則二

十五村千戶、村置士二戶卒八戶、則有士五十

卒二百、五士而受一大砲、二卒而受一小銃、

至突戰、士各持槍、卒各持刀、士帥二人稱之

旗將、建旗各一、總之者君也、謂之一隊、建

旌、故亦謂一旌、而自旗將至掌金鼓輜重者、

皆城中之大夫士任之、而村有里師里長、二士

至

兼之、卒為之屬、而兼捕盜、其器械村社之側

置一倉、藏于此、有事則亦告而用焉、此亦因

內政寄軍令者也、雖百萬石亦用此法、然而二

萬石為二隊、々將用卿、而君總之、至十萬石

已上、卿各帥二隊、而君總之、造軍艦亦用此

法、船制五等、第一等載五隊、謂之洋城、第

二等載四隊、謂之破潮、第三等載三隊、謂之

迎潮、第四等載二隊、謂之破濤、第五等載一

隊、謂之避濤、平日用之運輸、宜使士卒習貫

之、能暗針路暗礁、暮夜風雨、不敢眩惑、巨

濤狂瀾、如座于衽席上也、果能行此道、則遐

陬僻壤有兵衛、辺海孤島有軍艦、乃東海再觀

細戈千足之光矣、何憂洋寇乎、何憂海氛乎、

人才

人才之於國、猶山之有木、川之有水也、木鬱

茂、故能起雲雷、而雨沢遠及、剪之為薪樵、

伐之為棟梁、水汪濊焉、故能注澮洫、而灌溉

焉



不可養成
句甚有
病可再
考

有余、網之獲龜鼈、梁之獲魚蝦、雖然、木特
剪伐不已、則山童矣、水特隄防壅之、則川或
決矣、亦以其法養之耳、國有人才焉、陰陽和、
上下寧、財用足、武備修、小國能大、亡國能
興、故國莫急於人才也、而人才不可養而成之
也、蓋養與用為一、不二之也、故周家有門閥、
有次舍、使士大夫之子弟學于此、而掌之者宮
正宮伯、其所學即其所從政、未曾為二也、乃
習貫無勞、成就有漸、詩曰、濟々多士、文王
以寧、此之謂也、昔者無書契之可見而學者、
特有禮樂而已、而其禮祭祀喪紀、其樂琴笛歌
舞、猶彼大養玄酒朱紘疏越也、士蓋學于此、
用于此而已、然 太祖之朝、賢才滿廷、崇
神 垂仁之際、人才復頗多、成務天皇得武
內、為棟梁之臣、大定制度、又察山河之形勢、
分國界之疆域、以大封國造、雖其詳不可得知
也、觀其所分之疆域、則其業之偉者可見也、

起

而武內之子得姓者八人、子孫為大臣者亦多、
太祖之功臣、連綿于今、而種子之裔特盛、即
稱藤原氏者、源平橘氏又稍出、皆分派于天潢
而繼別為宗者也、於是門閥之爭浸越、然而人
才亦多出於其門、未足以為弊也、及王政陵遲、
外家顯權、非其子弟、不得顯官、有如昔公、
以才德擢、遽陞大臣、乃所謂門閥家者謹諱不
已、百方搆之、遂陷于罪、而後英才宿德、不
得衣緋、驚下頑鈍、輒曳長裾、於是門閥之弊
益盛、而朝廷之權始衰以馴致君臣共弱、源賴朝多開朝府家得賢才者、
皆朝廷之所驅也、而霸府之用才、亦田門閥、
夫 天位之歷歷亡播動者、固卓越于万国、而
臣下之世々積德累功、各守其名位、而自重者、
三千年于茲、豈亦殊邦之所能耶、雖有人才沈
淪之害、其重名節厲廉恥者、亦存于此焉、而
其名族世家、固与王室共休戚者、忠義之心、
既不可動焉、風習之久、雖一命之士、其家之

上下、各有分際、主愛乎其僕、々死乎其主、利既如此、安得莫弊之不生也、耶、蓋門閥不可破也、破之必生不測之害矣、故今審學制、

使世家名族就而學之、使其能想祖德、而知國

恩、又開一路、以通天下英才之所進、而使世

家新進相競而碎厲也、京師建大學、文武一途、

諸業分局、々有古訓、有醫學、自天文書數曲

禮樂舞、至西洋異言、莫不有之、又建三寮、

自天子元子至凡民俊秀學于此、諸侯之子弟皆

入焉、亦使之兼門闈衛府之宿衛、而春二月秋

九月冬十一月特宿學焉、又內朝治朝之間建學、

以擬周之門闈、天子學焉、而補大學十三員掌

之、爵四位、學士五員助之、爵五位、學生十

員為伴讀、爵六七位、此專采諸國秀傑之士補

之、皆兼諫諍之職、代列于治朝、參預大政、

而獻替規諫、不敢避忌諱、此所以旁羅天下之

人才、而摟聚朝廷也、天下人才既充朝廷、則

彼名族世家亦且欲自研精、而不取恥于門地也、聞闈之弊自破矣而朝廷取才、夫然信路既多矣、猶彼山之伐木川之引水、取而不竭也、今之養士、蓋莫若於此也、

風俗

風俗者、人君好惡之迹也、嘗有寬大敦篤之君、

其國風俗厚且美、嘗有躁急暴戾之君、其國風

俗薄且惡、風動乎上、俗成乎下、々之化上、

不從其所令、必從其所好矣、而風俗易乎薄惡、

難乎厚美、一成薄惡、易之甚難、故君子慎其

所好惡也、夫人君有生殺之權、其一時所令、

民未嘗不從之、然其心則未也、其令之善、其

政之順、可服其心矣、然至風俗則未也、其德

之純、其仁之深、而所行先乎所令、而節之以

禮、和之以樂、施之也漸、積以歲月、然後民

始移善、而不知其為善、謂之風俗之厚且美也、

風俗已厚且美矣、流風余音、延于後世、久而

不熄、故吳季札聽樂于魯、知各國之風、札距

三寮分上
中下乎何
限三
限三時
宿學向
拋乎

引証得
甚好

堯舜、千有餘年、猶有餘風者、豈其德之純、其仁之深故耶、可謂久而不熄也、天祖仁覆之如天、德載之如地、至矣矣矣而其垂訓智仁勇、表之以玉鏡劍、而歷世遵奉、不敢失墜、至太祖復明其三德、乃臣民知勸忠義厲廉恥、遂為國之風俗、歷數十世而不動、然而有俗儒、有佞氏、其說大行、風俗於是始渝矣、自其始渝日、二千年于茲、而忠義廉恥未全墜于地者、雖天祖純德深仁之所致也、流風之久而不熄者、豈不亦偉乎哉、聖德太子之佞佞、而贈之書隋、稱日出所天子、北条時宗之無學、而退胡元之好、且斬其三使者、非一時議定而能然也、皆出于其風俗之自然者也、古聖哲王之貴乎風俗者、良有由哉、雖然、既為俗儒佞氏所渝、而非上古純粹者也、嗟夫亦已矣乎、易曰、反復其道、七日來復、天行也、欲復其旧、今其時矣、所謂順天行者也、迺除俗儒、斥佞氏、

然後道之以德、齊之以禮、仁愛忠厚撫之、忠義廉恥待之、漸期浹洽、不遽見效、則復天祖、太祖之旧不難也、雖然、亦在人君之所好而不在所令也、

丙辰冬十月 山梔窩主人保

〔朱〕
一、文王姜里易篆成箕子為奴洪範成司馬遷蚤室史記出南儒亦果出此冊子博蒐羅和漢之古典以混用之打為長策大篇宜矣與瓊々釣名競功之徒所為大議名策不可同日論矣但使之在君權之地位決不可行者往々有之然古人策論動輒如此不必深咎焉亦以見其卓識也

冊子原寸 縱二七種 橫一九種 二五枚

五六 島津齊彬公ヨリ伊達遠江守へ

登城ノ件

〔包紙ウツ書〕
一、伊達遠江守様 松薩摩守

〔朱〕

愈御清福奉賀候、然は明日同苗登城候様ニ御奉書到来忝

奉存候、御内々早々御吹聴申上候、重疊御世話忝奉存候

存外ニ早く仰天、御一笑可被下候、頓首、

十二月二日

藍山公

麟洲拜

(本文書ハ「鹿兒島県史料 斉彬公史料」第一卷第四二〇号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一六種 包紙切片 縦 一六種

横 五八・二種 横 一七・二種

〇五七 斉興公ノ文武奨励士風振興諭達

五八 斉彬公ヨリ久光公へ

島津下総申出ノ件ニ付

(封筒ウツ書)

用事

薩摩守

ノ

(封紙ウツ書)

一 周防殿

薩摩守

用事

愈御安康珍重存候、然は明日下総事、御相談之事ニ而、

其御方江可参と存候、御同意ニ候共、又御不同意ニ候と

も先否御返事無之、いつれ近日御逢申候間、其節御相談

申候上之方宜敷と存候間、厚く御考之上ニて御返答被成

候趣、御答有之候様存申候、此段内々申入置候、且此品

此節江戸より到来ニ候間致進入候、以上、

八月廿六日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 斉彬公史料」第三卷第六九〇号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・五種 横五七種 封筒原寸 縦一八・一種 横四・六種

〇五九 斉彬公文武奨励ノ諭書及家老ノ副書 三通

六〇 松平肥前守ヨリ幕府へノ願書

十八ヶ年間参観猶予ノ件

近年亜米利加之船、御近港江乗入、理不尽自佞之業粧有

之候処、当今一般武衰懦弱之士風ニ被流候折柄、且は諸民難波を被為 思召、御国辱とも御厭無之穩和之御取扱被為在候御事、御尤至極之御儀、乍然夷狄之為ニ落散ニ相成候儀故、夷狄追々相募、今年国書持參、江戸登城相願候処、速ニ御聞届被為在、殊ニ御目見被仰付候儀、無是非御事、既ニ彼等か懇願十分ニ行届、此上如何様之願申上候とも、最早御手切之御談判ニは不相成様成行候義、兼々期仕度、彼等か心願ニ御座候、乍恐 上ニも御深腦之御配慮被為在候御事、恐入候儀ニ候、乍去御政務向等ニ差掛候儀ニ而は御諸職ニ而、御談判も有之候而可然候得共、今般之儀実以不容易外国と之評論、御一大事之御安危之御場合候間、御連枝方ハ勿論、固持諸衆を被為召、御評定も有之候而可然儀と奉存候、不肖ニは候得共、私儀も高岳之積恩を荷ひ候事莫太之儀候間、か様之御場合ニ不奉報候而は、神慮之程も恐れ多き御事奉存候、既ニ彼等御目見被成置候得は、此上願意有間敷との思召も被為在候処、又々種々之願差出候得は、猶此上如何様

之儀願出候も難計、譬は当今如何様穩和之御取扱ニ相成候共、御手切之御談判ニ相成候共、何れニ茂彼等か心中之程難計、乍然推考致し候処、夷狄之内存外望は武衰之御場合を見受、種々之甘弁を以和親を取結、御国を撫奪可致遠謀存も不知、兎角武士は心之決着第一ニ而、一時之為患終々安き可祈哉、又一旦の安をして終り之患を可改哉、夫物は余り恐怖之心より自然聊之儀も恐を生し、動し安き物ニ御座候、若御手切之御談判ニも及候ハ、定而彼は軍艦差向可申、左候得は決而御旗本之輩出張迄之事も有之間敷、諸侯之手切ニ而事足り可申と奉存候、私家之儀は恐多も
神君御目鏡を以諸家多端之中ニ而、御撰ひニ預り、国聞ニ成、長崎表御警衛被仰付候条、当家重疊之冥加過分之至と奉恐入、忠勤を相励、数泊星霜、暑温寒風之厭ひなく罷在居候処、今般江戸登城ニ及候事、身ニ取候而は、敵勢に裏切レと被致候同様之存意にて、呉々も残念之至ニ奉存候、併不熟之私、御

累代知職之御歴々之御一群ニ而、御集議御参考之上御評決被為在候而、御事とも不輕過言之儀ニ候得共、当今差向御国恩可奉謝寸志迄申上候儀ニ御座候、右ニ付而は、近年家来共武備警衛向ニ一際念入、莫太之入費多ニ相成、二ツニは自国防戰之術委敷習熟、為此武器兵糧之手当向等も具ニ指揮、此非常之節ニ至り御助力をも為仕度奉存候ニ付、何卒拾八ヶ年程も国許江滞府被仰付候様、此段奉願候、以上、

巳十二月

松平肥前守

水府家中江達

水戸之儀は、土地方不宜、勝手向不宜、不如意はいづれも承知之通有之候処、我等家督以来用途多く、殊ニ地震大風等ニ而入費別而不少、金穀益相減、然る処、外寇之患は次第ニ迫り、万一戰爭に及び、数日滞船ニも相成候ハ、古より日々千金を費スト申処ニ而、甚苦心へいたし、取締方何分堅く用ひ、金穀間ニ合候様心掛可申、扱皆々江

平日祿遣し置も、か様之時の為ニ候間、平常之儀は如何様ニも省略致し、非常之節人馬兵具上下一体ニ而国恩ニ報し度事ニ候間、人々心懸へく候、依之申聞候事、

巳八月十一日

判

水戸江戸

惣家中江

文書原寸 縦一七糎 横二七糎

六一 帖佐与御蔵入米ニ付新納駿河ノ令達 二通

六一ノ一

高式千六百石

右は此節水軍兵士被召立候付、給地没収高等ニ而、帖佐与御蔵入相成居候様より、右之通水軍方江被差分置候、左候而右兵士江被成下候御切米之儀は、外々同様物奉行方より相渡、右高所務米ヲ以、御代官方より返米引結可致候、此旨帖佐与御代官并物奉行江申渡、可承向江も可申渡候、

安政五年午

六月

駿河

文書原寸 縦一四・三種 横四六種

六一ノ二

高式千六百石

右は給地没収高等ニ而、帖佐与御蔵入相成居候株より
水軍方江差分置候様申渡置候へ共、不及其儀、本々之
通帖佐与御蔵入被仰付候条、御代官并物奉行江申渡、
可承向江茂可申渡候、

同午

二月

駿河

文書原寸 縦一四・三種 横三三種

六二 島津斉彬公ヨリ伊達遠江守へ

武備充実ノ件并智鏡院問題

(封紙ウツ書)
一宇和島賢公閣下

斉彬拜

□(朱)

□(米)

改年御慶被仰下忝奉存候、愈御清安奉賀候、扱建白之儀

外ニ存寄も無之候得共、儲君之義嚴敷致建白候、此間又

々御尋も有之候假、何事も此上致方無御座候間、御変革御

当然ニ候間、後年 御国体強大ニ相成候様、御吟味之上御

所置專一と存候段申上候、此上商道之利益ヲ甘シ候而は

益武備如何と恐入候事と奉存候、此上は商法之利を軍備

ニ振向け候様有之度事と奉存候、此節之御所置次第ニ而

は十分 御国威相益可申時節かと奉存候、肥前之訳不存

候へ共、財用等之訳と相見得申候、去秋より肥前と弊国と

商法取結ひ申候、極内々申上候、肥前江は御内々奉願候、

直助も最早罷出申候哉如何同度奉存候、種々取込ミ要用

貴答早々申上候、恐惶謹言、

薩摩守

二月廿九日

遠江守様

猶々御自愛專一奉存候、扱智鏡院より別紙之通申越

候、余り手強ニ申候而もとても不被行事故、程能方

可然存候、貴慮如何思召候や、小子より申遣候而は

智鏡院よりもれ候と存候時不宣、御同意ニ候ハ、宜敷御勘考御所置奉希候、堀田も

上京之よし、京より何か敵令出候ニ無相違と被存候大樹公余程御心配之御様子ニ夢を見申候、何も後便万々可申上候、以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 斉彬公史料」第三卷第七一六号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六種 横一四九・七種

六三 在国島津斉彬公ヨリ出府途中豎山武兵衛へ

右添書

合一通

六三ノ一

(包紙ウツ書)
一用事

武兵衛江

(朱)

(端裏書)
「豎山」

書面相達心得申候、愈無事珍重ニ存候、然は申遣候条

々心得申候、此節は実ニ御下向之事外ニ存寄無之、只々御病後如何と御案んしは申上候得共、つほね江は右様之事不申遣候処、案外至極之事ニ而恐入候事ニ御座候、全くつほね高輪之御都合不存ゆへ、内々のうち御留メ御都合よろしく候ハ、御城之事計考候と被存候、致方なく候間、是非々々と先日申入候通ゆへ、最早相済候と被存申候、又此節之文見候得は、国江相談之上御願と相定候得は、最早相済候と存申候間、早く表向取計可然旨も申遣し、猶又局江も文遣し申候、さて又此節は実ニ早く御下向第一と被存候は、委細才輔より承候哉、

京都殊之外むつかしく、戦争難量候間、少しも早く御下向之方安心と存申候、右ニ付通坂之節は借金一条も先日申来候得共、此節は二三万も借り出候かたニ可取計、先日之考とは京都之事ニ而致相違候、左候而借金致出来候段江戸江可申上候、呉々も又々つほね江申遣候間、御聞済無相違と存申候間、安心可致候、扱黒木

之事、扱々困り入候得共、先家老中江申聞候而可取計候、しかし安藤・近権外は退役程之事ニ無之との御沙汰は不申聞、多年相勤御昇進御用も相勵候間、御有免ニ而玉里一篇之勤可被仰付との趣申参候段可申聞と存候、あれ程之事ニ而も退役ニ不及事哉と世上ニ申候も如何ニ候間、其方着之上も其心得第一ニ存申候、

一アメリカ之事、京地様子、猶又承り合セ可申遣候、何分不容易御時節かと存候、弥事むつかしく相成候へは戦争難量存候間、手当第一ニ存候、表向打払被仰出候而より之手当ニ而は間後れニ相成候間、心組可致置と考、駿河・下総江勘考候様申置候、(島津斉彬公史料ニナシ)且又再応御願、日本一大事ニ候間、諸大名一同出府候而評議ニも可相成、左様之事共早々聞合セ候様早川江可申遣候、京之様子も承り可申遣候、実ニ不容易御時節、京ニ而必勝之見込ミも無之申立候諸大名并ニ義論之申事御用ひ相成候而は、以後猶更△御国威ニも可相抱は必定、誠ニ可歎事とそんし申候、委細才輔より承候事と存し書付不遣

候、右様之都合ニ而は琉人参府も如何ニ候哉、関東様子追て申遣候様早川其外江可申遣候、扱々夕指宿より帰り申候、入湯余程致相応候、且秀之事心得申候、黒木立之事も相分り候上と存候、何分玉里一辺ニ而も同人引入可申、左候へは同様ゆへ城代一篇可然事ながら、先々何とも不申聞、家老吟味可申付と存申候、其内着次第万々可申談候、先は返事▽早々△申遣候、以上、

四月九日

(本文書ハ「鹿児島県史料 斉彬公史料」第三卷第七二五号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一六・三種 包紙切片 縦 一六・三種

横 二一八・五種 横 九・三種

六三ノ二

(包紙ウツ書) 一用事返答 武兵衛江

□ □

(封紙ウツ書) 一又添書

○ ○ ○

添て申入候、此封もの認メ候跡江奥より局之文相廻り申候間、又々委しく返事遣し候俟、最早御聞濟ニ可相成候、内々なから御願書不出うちとそんし取計候段も能相分り申候、高輪御都合不存ゆへ之事ニ候間、以後之処も委しく申遣候間、是非御聞濟之事とそんし申候、猶追而可申聞候、委細休之丞より申遣候、以上、

四月十日

昨夕罷歸り候、四ツニ出、大鐘前ニ歸り、夫より跡之文認メ大取込ニ候也、

(本文書ハ「鹿兒島県史料」第三卷第七二九号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・六糎 包紙切片 縦一六・六糎
横 五八糎 横二四・二糎

六四 齊彬公ヨリ久光公へ

内々登城ノ件

(封紙ウツ書)
「周防様

用事

薩州

ノ

」

一筆申入候、愈御平安珍重存候、然は外夷之事ニ付而京都より申来候事有之、急ニ御談申度儀も有之候間、何となく今日は登城可被成候、尤もまた家老中江も不申聞訳故、只定例御出之積ニ而御出可被成、左候へ、九ツ過ニは御逢可申候、誠ニ不容易儀到来いたし候、委細は御面談之上可申述候、恐々、

四月十二日

(本文書ハ「鹿兒島県史料」第三卷第七三〇号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・七糎 横六一・五糎

六五 久光公ヨリ齊彬公へノ答書

島津豊後進退ノ件

(久光) (擊山)
島津豊後儀ニ付武兵衛差上候書面之趣熟考仕候処及再度

(永江) 休之丞を以申上候得共、不被為在 御許容候由、此上何

共可申上様無御座候得共、最初極内被 聞召通趣有之、

御裁許掛江聞合被 仰付、猶又御家老中は勿論、私江も

存慮以書面申上候様被 仰付、今般武兵衛出府仕候ニ付、

右之趣 御相談被 仰上候御事ニ御座候得は、いつれ難
被捨置御事と奉存候、同人儀

々、勘考仕候得共外ニ存付候儀も無御座候、
右奉応

御昇進御用骨折相動候御取訳を以、御恩赦ニ而諸掛り
御免、玉里一篇相動候様との 思召ニ被為在候由、成程
少しは被遊 御用ひ候御事とは奉存候得共、邂逅右通

尊命、愚存之趣以書面申上候、以上、
四月廿日
島津周防(久光)

御相談被 仰上候御事ニ御座候得は、いつれ可被為在
御許容御事と乍恐奉存候、同人儀同役中御用談整兼候儀

文書原寸 縦六・七糎 横八三糎
六六 斉彬公ヨリ久光公へ
幕府勅許ヲ經スシテ条約締結ノ件

も有之、且世上人望を失ひ候向ニ御座候得は、玉里一篇相
動候而は却而御用筋混雜之基ニも相成、乍恐第一 御不

〔包紙ウツ書〕
一周防殿 薩摩守
申入

徳ニも相掛り、誠以不輕御事と奉存候、此節之骨折は御
加増等ニ而相濟候儀ニは有御座間敷哉、御恩赦之 思召

〔朱〕
〔封紙ウツ書〕
一周防殿 薩摩守

ニ被為在候ハ、只諸掛り御免被 仰付候ハ、同人ニも
存付、御役御断申上候儀は必定ニ御座候、右之趣今一度休

御報

之丞へ篤と勘考仕被遊 御許容候様御取成可申上旨被
仰遣候而は何様可有御座哉、乍併何分ニも被為在 御賢

過日は芳翰忝存候、其後愈御平安珍重存候、扱御書面ニ

慮候御事と奉存候、若御当地江被為入候ハ、私よりも奉
願度存慮も御座候得共、書面ニ而は此儀難相整奉存候段

通被遣、篤と致披見候、至極宜敷御座候間、此節便堅山

迄為持遣し、永江江及相談候様申付候、外巻通是又御尤

ニ存候、委細御面談之上追々御相談可申候、此間より御

腫物之よし如何ニ候哉、御加養專一ニ存候、扱又江戸之

様子早川より内々申遣候、不容易事ニ而万一奉書ニ而御

取極メ之段被仰上候ハ、

京都之御都合以外の外之事かと存候、左候得は外寇より内

乱之方一大事と被存候、扱々不思議之時節到来と存候、

早川より之書面内々相廻候、猶又御勘考專一ニ存候、御

覽濟御返却可給候、庭之菊咲候間御慰ニ致進入候、要用

御報旁早々、以上、

四月廿七日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 斉彬公史料」第三卷第七三三号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・七種

横八七・三種

包紙原寸 縦三〇・二種

横三七・五種

〇六七 万里小路博房卿ヨリ小松帯刀へ

哲丸君ニ付黒田清綱建言

六八 斉彬公ヨリ久光公へ

幕府へノ上書案ニ付

(包紙ウツ書②)

一周防殿

用事

薩州

封

(包紙ウツ書①)

一周防殿

用事

薩摩守

午五月廿六日

(封紙ウツ書)

一周防殿

用事

薩摩守

鬱々敷天氣ニ候処、弥御平安珍重存候、然は此度別紙御

尋ニ付、上書案致出来候間掛御目候、御考承度候、外ニ

早川より申来候江戸様子書、是又掛御目申候、明日中御

返却可給候、急飛脚廿八日差立之筈ニ候、以上、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 斉彬公史料」第三卷第七三九号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・五種

横三七・六種

包紙原寸

①縦三二・五種 横四六・二種
②縦一九・六種 横二五・四種

六九 齊彬公ヨリ久光公へ

將軍儲式決定失望ノ件

(包紙ウツ書)

一周防殿

用事

薩摩守

安政五年七月三日

御書は是迄ニ而候、

(封紙ウツ書)
一周防殿

薩州

愈御清安珍重ニ候、昨日町使着、別紙申来候間掛御目候、折角橋公と存候へ共、致方無之、此上何卒平穩ニ相成候様致度存候、先は早々、以上、

七月三日

文書原寸

縦一六・八糎

包紙原寸

縦二八・六糎

横三四・三糎

横四〇・九糎

〇七〇 山田壮右衛門へ齊彬公ノ御遺言

七一 齊彬公ヨリ幕府へノ願書

跡目相続ノ件

(包紙ウツ書)

「先公御書取」

松平薩摩守

午四拾九歳

甥

島津又次郎

午拾八歳

私儀去年御暇被下、国元江罷越候処、此程より痢病相煩て医師薬致腹用、段々保養仕候得共相勝不申、御医師迄茂相招療治受候様仕度、先達而相願置申候処、漸々草臥相増太切罷成、本復仕体無御座候、自然急変於御座候は、嫡子哲丸江家督無相違被下置候様、相願申答御座候得共、大国を茂被下置、琉球国迄茂領地仕儀御座候処、哲丸儀当午式歳罷成、未幼稚、其上琉球国之儀、異国江茂致通融、且は近年外国御所置振不容易御時節ニ而、彼は国務心遣之儀茂有之、殊更右通幼稚之事候得は、若不慮之儀

茂難計、重臣共を初、一統安氣不仕候、依之御暇被下候
砌、一往申上置候私弟周防嫡子島津又次郎事、私娘江婿
養子被 仰付、跡職無相違被下置候様奉願候、左候得は
哲丸儀又次郎養子被 仰付被下度、此段奉願候、以上、

安政五年

七月十九日

病氣付印判相用申候、
御名印

太田備後守殿 (資始)

間部下総守殿 (詮勝)

松平和泉守殿 (栗生)

久世大和守殿 (広周)

内藤紀伊守殿 (信親)

脇坂中務大輔殿 (安老)

文書原寸

縦一六・八糎 横六四・七糎

包紙原寸

縦二六・二糎 横一九・一糎

七三 豎山武兵衛ヨリ永江休之丞へ 別紙共二通

茂久公本日着府ニ付薩邸大奥向手続ノ件

七三ノ一

写

又次郎様今日 (島津忠義)

御光着ニ付、大奥

御寄合之御式向拙者神名川より踏越致參着、小野島江面
会得と申談、別紙之通御手続ニ而何茂御都合能被為濟、
乍恐安堵仕候、別紙相添御自分迄此段申越候条、
宰相様達

御聴候儀は御勘考次第御都合能御取計可給候、以上、

十二月廿五日

豎山武兵衛

永江休之丞殿

文書原寸 縦一六糎 横五八糎

七三ノ二

写

大奥御手続

大奥江被為

○七二 島津周防公ヨリ新納駿河へ

入候節、御鎖口江表使右之方江罷出、御年寄其外順々罷出ル、

一 御書院御入口辺迄、(齊真女子隨姫) 随真院様御始

一 御姫様方被遊御出迎候付、一寸と被遊

御辞儀候而

御書院御客居之方御柱之涯江

御着座、御主居之方ニは随真院様御始

御姫様被遊

御着座候ニ付、御座中程江被遊

御進候而 御挨拶之事、

一 御熨斗

御茶畢而御年寄其外惣女中・御広敷御用人御目見、

一 御姫様方より被進物披露御年寄可申上候、

一 右畢而御吸物等上ル、随真院様御始より晴雲院様と御(齊真女子隨姫)

取替シ可被遊事、

一 御書院より被遊

御引入候節、

随真院様御姫御廊下迄御目送り可被遊、

一 御書院より表江被為入候節、御中奥被遊御覽、夫より

御仏間被遊

御拜、再大奥江被為入候節御間ニ物御膳等上ル、以上、

文書原寸 縦一六種 横一二・五種

七四 仙波市左衛門等ヨリ永江休之丞へ

茂久公襲封、哲丸養子、齊興公輔佐ノ件

一 (包紙ウツ書 総括包紙ニ包紙①②ヲ包ム) 又次郎様始テ江戸へ御出府ノ書類

包紙原寸 縦二九・五種 横四三種

七四ノ一

一 (包紙ウツ書①) 御家督御相続等被 仰出之趣、(信憑) 内藤紀伊守様より御

口達ニ而御達相成候故、御達振御書取御留守居相願

候処、此御書面大目付様より御渡相成候由申出候

包紙原寸 ①縦二九種 横二一種

(複製書)
「写」

松平薩摩守奉願置候通、嫡子哲丸幼稚付、島津又次郎儀

養子被 仰付、遺領無相違被下之、諸事薩摩守代々之通
可相心得候、且又哲丸儀又次郎養子ニ被仰付之、

文書原寸 縦一六・五糎 横三八糎

〔端裏書〕
一写

島津又次郎江

又次郎事依為年若、領分并琉球国仕置等之儀、諸事先格
相違無之様、大隅守当分之内心を付取計候様可仕由 上
意候間、可被為存其趣旨、以奉書大隅守江相違候事、

文書原寸 縦一四糎 横三〇・五糎

〔別紙〕

一此御裏書 御相統後之御達故、松平と可有之哉と

御家老方江引合置候処、去方聞合相成、今日便迄

は不相分由候付、御渡形ニ而相享候間、追便可可

申越御含置可給候事、

別紙原寸 縦一四・三糎 横九・五糎

七四ノ二

〔包紙ツラ書〕
一宰相様御介助被遊候儀、

御達御書付写

〔端裏書〕
一写

又次郎様御事、昨廿八日四時御一類様御一人御同道御登
城候様、前日御老中様御連名之

御奉書御到来ニ付、兼而

宰相様御沙汰之通御不快之御届ニ而、奥平大膳大夫様
御名代御登

城之処

御家督御相統

若殿様御養子御別紙之通被

仰出、諸事御先格之通、御式向等迄を被為濟、且

宰相様御介助被遊候様、御別紙之通被 仰渡、幾久重疊

恐悅御同意奉存候、おのつから委細之御次第は御家老衆

より被申上候付、大頭此段申越候条、

宰相様達

御聴候儀は御勘考次第宜御取計可給候、以上、

十二月廿九日

仙波市左衛門

永江休之丞殿

文書原寸 縦一四・五種

横九一・五種

包紙原寸

②縦二九種

横二一種

町田 主馬

堅山 武兵衛

將軍 宣下ニ付關東江參向之 勅使等并

御撰家方御帰京ニ付、御行逢相成暫時は心配仕候得共、

近衛様は勿論

二条様御方よりは至而御叮嚀之御事ニ而、無此上仕合之事ニ御座候、右通

七五 島津豊後ヨリ久光公へノ報告

茂久公襲封一件

〔包紙ウツ書〕
一 島津周防様

島津豊後

┌

御名代可被差出候旨、御老中様御連名之御奉書前日御到来、為

一筆啓上仕候、寒氣甚敷御座候得共、無御障益御安全被

為成御座、恐悅御儀奉存候、然は、

又次郎様長途御機嫌能去ル廿五日、

御出府、猶御安康被遊御座、重疊目出度御儀奉存候、此

節之御道中万端御都合宜難有事ニ御座候、乍然上御道中

ニ而は、今般、

縁頼御大老様并御老中様方御列席、御願之通

哲丸様御幼稚ニ付

又次郎様御儀御婿養子被 仰付、御遺領無御相違被 仰

出諸事

〔島津齊彬〕
順聖院様御代之通御心得被遊候様、且又

哲丸様御儀

又次郎様御養子被 仰付候旨、御用番内藤紀伊守様より

上意之趣御演達有之、引統於御同席

又次郎様依為御年若御領分并琉球国御仕置等之儀、御先格御相違無之様

宰相様御当分之内

御心を被為付御取計被遊候様

上意之旨以御奉書被仰達候段、御書取被成御渡候付、御請御礼被仰上、御退 城より御大老様并御老中様方江御廻勤迄茂被為濟候付、被仰渡之趣於 御居間私より申上御承知之上大奥江被為

入 御仏間江

御拜、左候而

御方々様

御対顔諸事御先格之通被為濟、御慰斗目・御長袴御召替

二而

御座之間江

御出座、讃岐殿并御城代御家老大目付奥向之面々江茂

御目見被 仰付

御袖判

仰出等茂御先格之通被 仰出、左候而今廿九日四時御小

書院江

御出座月次御礼罷出候面々江

御目見被 仰付、万端無残所御都合能被為濟、誠に難有仕合奉存候、此上は少茂御懸念無御座候付、御安堵被成下候様奉願候、左候而 御家督御礼之儀は、御奏者番様御始御招、御習礼且御近親様御同席様御招等之儀茂有之候付、来正月廿八日之御連ニ而御間合茂御座候付仕合之事ニ御座候、将亦右御礼濟之上二月初旬

御元服御官位被

仰出御模様御座候ニ付、右之御式相濟候得は

御相統ニ付而之御廉々、都而被為濟筭御座候、且又御着

御当日は

随真院様御始

御姫様方無御残皆様大奥江被為入、御待請ニ而御賑々敷

御対顔等茂被為

在、其後之御都合右次第ニ而、返ヌ／＼茂御懸念被遊不
被下様奉願候、乍末筆其御地出立仕候節は、結構之御品
々被下置之難有仕合奉存候、尚追々委細御左右を茂可奉
申上候得共、先々是迄之成行且右御礼を茂奉申上度如是
御座候、恐惶謹言、

十二月廿九日

島津豊後
久宝

島津周防様
参人々御中



追而申上候、其御地出立仕候時分は、京都表且当地之
儀色々物騒之世評茂御座候得共、当分ニ至候而は外方
茂別而平穩之事ニ御座候、当分間部下総守様御上京中
ニ而、彼地之儀共万事御折合宜御都合之由ニ御座候、
此段茂為御安心奉申上候、以上、

文書原寸 縦 一六糎 包紙原寸 縦二八・三糎
横四三八糎 横四〇・七糎

七六 久留米藩幽囚人名其他

- 木村三郎
- 池尻茂左衛門
- 早川与一郎
- 樋口伴四郎
- 山田辰三郎
- 真木主馬
- 大鳥居次郎
- 柴田文平
- 佐田素一郎
- 山本 実
- 内藤新吾
- 浅田節三郎
- 大鳥居栄吉
- 角 照三郎
- 樋口章太郎
- 姉川英藏

黒岩種吉

前田九郎

西川 湊

下川元三郎

新山舎人

宮崎槌太郎

吉武助左衛門

木原貞助

囿田三津次

樋口謙吉

古賀和吉

狩野左京進

右式拾八人幽囚

不破左門

本庄仲太

久徳与十郎

松崎誠藏

吉井辰之丞

梯 讓平

右奸物

尾藩

田宮如雲

若井歙吉

成瀬隼人正

右正論

文書原寸 縦一六・二種 横八七種

七七 井伊大老ヨリ尾張老公隱居ノ件ニ付尾当

主ヘノ密書

(表紙)
「彦根侯与尾公書」

尾老公御隱居被 仰付候思召之御趣意を大老より

書付を以当尾公江申上候密書、

先年阿部伊勢守御老中在勤中異船渡来ニ付 公方様御取

扱筋之儀ニ付、中納言様月次御礼御登城之節、御席江御

老中御呼寄、思召之趣被仰談候趣御強ク候ニ付、其後伊

勢守より若年寄遠藤但馬守を以四谷御隠居様江、尾張様(風統)御登城之度、御老中江被仰談方余り御強ク被為在候ニ付、以来は右様之儀無御座候様被遊度、御対顔之節程能御申上御座候様ニと内々申出候由、左候而も分而御聞入不被為在候哉、近年堀田備中守よりも松平讃岐守を以、右様之趣四谷御隠居様江向申上候得共、是以格別御聞入不被遊、当春備中守上京之砌、御三家様ニも有間敷御家中之者一兩人も京地江被遣、内密ニ彼地風聞御聞取被置、当春御参府後水戸前中納言様江度々御内密之御文通有之哉ニ相聞其上六月廿四日水戸様江被為入、段々御内談之上、水戸御父子様御同道不時ニ御登城は不相成と 神君様より被仰出候趣有之、殊ニ松平越前守をも御誘引、騒動ケ間敷御登城之上 公方様御所勞之御中江 御対顔をも御願相成候処 御対顔不被為在候得共、御役人共江段々御尋之趣、即答御受難出来被仰置候趣、及 言上置と評議致候処、先月中旬魯亜兩國之船申立候趣は、英仏之異人共清國ニ十分打勝、其勢ニ乘し軍船押掛、忽争端を可開趣申出

候間、実意之事と相心得、不容易無抛場合、不取敢 朝廷江不申上、仮条約為致調印候段、万一 朝廷より不相立、当惑罷在候処、前件之次第以外之事と 公方様相立、伺条約相濟候儀不都合之趣被 仰出候ハ、何共申訳難ニおいても被思召候、全体叡慮之趣有之候間、此以後之仕置ニ付、御考意も有之候ハ、御腹臆なく可被仰上趣、兼而被仰出之儀有之候ニ付、追々ニ御登城御存慮之趣、御助成筋ニ被仰出可然哉之処、其儀無之、甚御不本意之被遊方、徒党ケ間敷御同道ニ而御登城被遊候御儀は、御内輪とハ乍申被捨置候而は、国主方へも難相立、 朝廷江御勤品にも相拘、此度御時節御幼年之紀州様江御養君被仰出候御儀ニ付而も、於京都風聞不宜、旁以深く被為遊御心痛 叡慮之儀不被為叶、無御抛表向御勸氣之次第被仰出、於私も誠ニ欺ケ敷奉存候得は、今暫御氣被為早まら候段残念至極ニ奉存候、近頃下民共申触候毒害と申儀も毛頭無御座、御医師岡樺仙院此度御暇被仰付、悴御召抱相成候

儀は 公方様六月上旬より御不例ニ被為在、御病体相同
御疵之由申上、段々御薬差上候処、追々御水気相増、全御
脚氣ニ候処、御痛体差伺、速今般奥御医師ニ蘭方医御召
抱ニ相成候様申談候処、六ヶ年程以前蘭方医は以来奥御
医師御用ひ不相成趣御触有之候間、御談之趣奉畏候得共、
一度御触有之候事ニ候ハ、何ヶ年相立候共御触難戻趣
相答、承引不致候間、段々分ヶ柄申聞候得共、更ニ聞入
不申、蘭方医より何か私落手旁以無処御暇と取計申候、
御右筆組頭志賀金八郎切腹之儀は、堀田備中守・久世大
和守・本郷丹後守・石河土佐守、此度御養君之儀差当御血
脈深キ紀州様ニ候得共、御幼年之御事当時ニ引比候ハ、
一橋様と御役人共二ツニ立分り、取々之論一橋様ニ過半
取極之中江私大老被仰付、種々相尋、御血脈深キ紀州様江
被仰出方取極候得は、右備中守初昨今之私不案内不行届
之趣申聞、国主之内ニも一人打払を初同様之申方ニ付、御
家水戸前中納言様・松平越前守并国主兩人、備中守・丹
後守・土佐守等江夫々御訂品被仰付候次第、金八郎江申談

候処、異船打払を初、御養君之御儀共、兎角御役人共江同
腹不致、同役を以蔽敷申談候間、種々勘考之上、危き御世
ニケ様非常之被仰出ニ而は、尾水様は御内輪之儀如何様
共取納方御座候得共、国主兩家は難納、左候ハ、一統騒
動は眼前ニ相頭不容易、此後何程申立候共、何れ櫻仙院同
様可相成、今我一命を捨、国主兩人名前相省 御代々様永
久被為続候様存意より切腹いたし候、何卒存意之通相叶
候様、同役江内密ニ而書置有之由風聞ニ御座候、一命を
捨候段氣之毒、相果候後ニ兩度迄拝領物有之候様ニ取計
申候、

冊子原寸 縦二四・五糎 横一七糎 五枚

七八 英仏米蘭トノ条約書

〔表紙〕
「約書」

日本安政五年戊午 日本政府と大貌利太泥亞・仏蘭西・亞米
西洋千八百五十八年 利加合衆國・荷蘭、四ヶ國と取結ひし条約に添たる交易

規則第七則に定め置し通り、其輸入輸出の運上目録を改むべき旨、右四ヶ国の名代人夫々の政府より一様の命令を受け、且又日本慶応元年乙丑十月四ヶ国の名代人大坂に趣きし折、日本政府より輸入輸出の諸品都而価五分の運上を基本とし、將日本政府は外国との交易を盛にし、和親の交際益篤からん事を欲するの証を更に願さんか為

日本外国事務老中

水野和泉守殿

大貌利太泥亜の名代人

シルヘンリーパークス

仏蘭西の名代人

モツシュル、レオン

ロセス

亜米利加合衆国の名代人

エ・ル・シ・ポルトメ

ンエスクワイル

荷蘭の名代人

モツシュルドデガラー

ファンポルスブルック

第一条

各政府の名代として、此度約書を議定せり、全権は此約

書に添たる運上目録を採用し、各政府の臣民皆堅く此を遵奉すべき事とせり、其運上目録は日本と右四ヶ国と取結たる条約に添たる元の運上目録に代るのミならず、又日本政府と大貌利太泥亜・仏蘭西・亜米利加合衆国政府と、是迄度々取結たる右運上目録に關係せる別約にも代れるものとす、右新運上目録取行事、神奈川に於ては、日本慶応二年丙寅五月十九日、より長崎・箱館に於ては同六月廿一日第八よりとす、

第二条

此度の約書に添たる運上目録は、調印の日より日本と右四ヶ国と取結たる条約の内に開せられたは、日本來壬申年西洋一千八百七十二年第七月に至り改むへしといへとも、茶・生糸運上の分は、此度の約書調印より二ヶ年の後、双方の内何れの方よりなり共、六月前に告知して、前三ヶ年中平均相場の五分に基き、此を改むる事を求むへし、又材木の運上は、此度の約書調印より六ヶ月後に告知して、時相場に従ひ運上を納むることを改めて、品物に従ひ運上高を定むる事

を得へし、

第三条

元条約に添たる交易規則の第六則に従ひ、是迄取立来れる免状料は此度より相廢せり、尤荷物陸揚船積に付ての免状は、是迄通りたるへしといへとも、以後は其謝銀を出す事なかるへし、

第四条

神奈川ニ於て而日本慶応二年丙寅五月十九日
西洋千八百六十六年七月一日 長崎・箱館ニ於て、
日本慶応二年丙寅八月廿二日
西洋千八百六十六年第十月一日 より日本政府にて輸入するもの
求に応し運上を納る事なく、外国より輸入の品を蔵に入
置用意をなすへし、日本政府にて其品を預り置く間は、
盜難并風雨の損害なき様引請へし、尤火難は政府にては
引受すといへとも、外国商人とも右荷物火難の受合十分
出来へき様、堅固の土蔵を取建へし、就而は荷物を輸入
する人、または荷主これを蔵より引取んとする時は、運
上目録通りの運上を払ふへし、其品物を再び輸出せんと
欲する時は、輸入運上を納るにおよはず、荷物を引取る

節は、何れにも蔵敷を払ふへし、右蔵敷高并貸蔵取扱向
規則は、双方相談の上議定すへし、

第五条

日本の産物の運送の陸路水路修復のため諸商売に付て取
立る通例の運上の外は別に運送運上を納る事なく、日本
の内何れの地よりも外国交易の為開きたる各港江運送す
ること勝手たるへし、

第六条

日本と外国との条約中、外国貨幣は日本貨幣と同種同量
の割合を以て通用すへしと取極たる箇条に従ひ、是迄日
本運上所にて墨是哥ドルラルを以て運上を納むると記す
一分銀の量目に比較し、ドルラル百枚を壹分銀三百十一
ヶの割合を以請取来れり、然る処日本政府ニ於て、右仕
来を改め、総而外国の貨幣、日本貨幣と引替る事に障な
き様にし、又日本通用の貨幣を不足なき様にし、交易を
便利にせん事を欲するにより、日本金銀吹立所を盛大に
せんことを既に決せり、然る上は日本人又ハ外国人より

差出すべき総而外国金銀貨幣并地金は日本貨幣に吹替、其諸雜費を差引、其質の真位を以て、其為定めたる場所於て引替んとす、此処置を行ふ為日本と条約を取結ひし各国は、其条約に書載たる貨幣通用に關係せる箇条を改むる事緊要なれば、右箇条を改むる様、日本政府より申談し承諾の上日本来丁卯年十一月中 西洋千八百六十八年第一月一日より其処置を取行へし、

吹替の雜費として取立へき高の割合、向後双方の全權協議の上定むへし、

第七條

運上所諸取扱向荷物の陸揚船積および船人足小遣等雇方に付、開港場におゐて是迄訴出たる不都合を除かん為めに、各開港場の奉行速に外国のコンシユルと談判および双方協議の上、右の不都合決して是なき様、規則を立易の道并各人の所務を成るべきだけ容易し、且安全ならしむる様、双方爰に議定セリ、

右規則の内には、各港に於て外国人荷物陸揚船積の為メ

用ゆる波戸場内に荷物雨露に損せざる様、小屋掛を作る事を書入へし、

第八條

日本人身分に拘らず、日本開港場又は海外に於て旅客または荷物を送るべき各種の帆船・蒸氣船共買入るゝ事勝手たるへし、尤軍艦は日本政府の免許なければ買入るゝこと得ず、

日本人買入たる諸外国船は、蒸氣船は一噸に付壹分銀三箇、帆船は一噸に付壹分銀一箇の運上を定め通り相納る時は、日本の船として船目録に書載すべし、尤其船の噸数を定むる為メ、日本長官の需に應し、其筋のコンシユルより本国の船目録の写を相示し、其真を証すへし、

第九條

日本と右四ヶ国と取結ひたる条約、且日本政府の使節日本文久二年壬戌五月九日 西曆千八百六十二年六月六日大貌利太泥亞政府へ送れる覚書および同閏八月十三日 閏十月六日仏蘭西政府へ送れる覚書に載せたる別約に従ひ、日本人と外国人と交易又は交通する事の妨

を全ク除くべき趣を以て、日本政府より既に触書を達したり、就而は日本の諸商人政府役人の立合なく、相對に日本の開港場および此約書中第十条に載たる仕方は、海外へ出る許しを得れ、各外国に於ても、外國商人と交易する事勝手たるべく、尤日本商人通例商売ニ付て取立る運上より、余へ日本政府へ収むることなし、且諸大名并其使用する人々、現在取締の規則を守り、定め通の運上を納る時は、日本役人の立合なく、諸外国又は日本の諸開港場に趣き、其場所にて交易する事、右同様勝手次第たるへし、

第十条

日本人身分に拘らず、日本開港場又は各外国の港々より、日本の開港場又は各外国の港々に趣くべき、日本人所持の船、又は条約濟外國船にて荷物を積入るゝ事勝手たるへし、且既日本慶応二年丙寅四月九日
西洋千八百六十六年五月廿三日日本政府より触書を以て布告せし如く、その筋より政府の印章を得れば修行、又は商売するため、各外国に趣くこと、并日本と親

睦なる各外国の船中に於而、諸般の職事を勤ること故障なし、

外國人雇置く日本人海外へ出る時は、開港場の奉行へ願出、政府の印章を得る事妨なし、

第十一条

日本政府は外國交易の爲開たる各港ニ最寄船々の出入安全の爲メ、燈明台浮木瀬印木等を備ふへし、

第十二条

此約書取行以前、双方政府許允の沙汰を待に及さる故、

日本慶応二年丙寅五月十九日
西洋千八百六十六年七月一日より取行へし、

右約書を政府許允の上は、双方全權其段互に通達すへし
右通達の書面は双方

君主保証の代りとなす、

此証拠として前文全權此約書に名を記調印せり、

日本慶応二年丙寅五月十九日
西洋千八百六十六年第月日江戸に於而双方全權各其國語を以

てこれを記せり、

冊子原寸 縦二八纏 横二〇・五纏 一二枚

七九 大山格之助ヨリ山川港菊池源吾へ

諸藩ノ形勢ト決拳延期ノ件

- 一 人心和、不和之事、
- 一 君臣合体、義論一致之訳、
- 一 謀主之人柄姓名之事、
- 一 武備蔽、不蔽之事、
- 一 築城形勢之事、
- 一 人数手配之次第、
- 一 每隊人数多少之事、
- 一 浮浪士増減之事、
- 一 諸藩応援之事、
- 一 末家一門随従之事、
- 一 七卿動静之事、
- 一 京師百卿方江意通之有無、
- 一 義拳と割拠之訳、
- 一 積金、積穀多寡之事、
- 一 浪士給金何程之事、

- 一 外夷襲来ニ守備を設候哉、征討軍配ニ策を用候哉之事
- 一 京撰辺間牒之姓名、隠家之事、
- 一 年貢取方厚薄之事、

一出金・出米之事、

一 浪士等一日飯米何程之事、

一 小銃・大砲何程之事、

一 京撰二人を差出候ニは、陸地を押し候哉、海路を涉り候哉、

一 船用意何方ニ何艘有之候哉、

一 浪士之魁と相成主宰之人柄姓名之事、

(文書類相応ノ文書ガナク、同文書ガ混入)

(「鹿児島県史料忠義公史料」第一卷第六一号文書ヨリ)

旧臘晦夜御乗付以来御安否不伺候得共、定テ御達者、

船中御究屈奉遙察候、(渡海船) 偕嗣君御事モ無是非御仕合、天

燃地(極カ)尽キ三國ノ称是限リニテ、只吞声哭ク計リニ御座

候、(舟カ) 船中御一人御愁歎如何計リ候半、(入カ) 偕今夕方久木山

帰着、(江戸) 草庵へ立寄、(仲左衛門) 彼表時態予メ承聞、堀等出立後又

々議論相変シ、越(越前)モ漸ク持張り、今更正論変シ難ク、

此方ノ議論ニ押付ラレ難默止、今度之手策モ出候筋ニ
相聞得、殊更(左内)橋本不立入候得共、外ニ引合之人數無之、

併橋本事ハ三度被呼出、当分ハ屋敷へ親類預リニテ候
由、誰面会モ不出来由、中根事ハ益嫌疑相カ、リ、既
ニ久木山出立前ニハ危ク成リ立候由御座候、此度堀発

足前治論モ此方ヨリノ議論ニ無理ニ応シ、迎モ不被行
事(スルテ)を捨撥ニ興復之筋ニ今更被窺候事ニ候、

一京畿今ニ探索敵密、殊ニ貴名(隆盛)広大ニ成立、京近辺之事

何方ヘカ相潜居、尤多人數召列レ候テ、勃興之処大ニ

懸念致候由、兎角西郷天下ニ居ル内ハ世上穩ナラザル
トノ説專ニ被行候由、併忍向僕ノ口上ニ依テ安堵可致

ナラン、誠ニ浅間敷次第ニ御座候、

一水府モ打捨ハ不致由、極内ハ老公ヨリ密ニ

主上へ御直ニ御往復被為在候儀モ、少々久木山相探リ
付、併子細ハ不分明ニ候(虚説ナリト云フ)

一肥藩(熊本)へ堀立寄候処、彼方当時長岡等嫌疑甚敷、旅客等

立入毛頭不調由、偕津田宅(山三郎)ニ於テ、社中四五輩会谈屢

及事談候処、彼方ヨリ申立候ニハ、我々共議論ハ御藩
ニハ少々相違御見限りモ有之善候得共、迎モ此節出勢

ノ所モ容易ニ六ヶ敷、殊ニ主人ハ御国ト引替、全ク近
衛家杯之様御親睦モ無之、本ヨリ同盟中京辺之時情全

ク不相通、急速ニ突出ハ猶不容易場合ニテ、肥藩ニヲ
イテハ、変ヲ相待ヨリ外ニ異論ハ無之トノ様子ニ御座
候由、勿論長岡へ面会モ不出来シテ、筑後府中ニオヒ

テ久木山出逢ヒ、篤ト形行申通シ具候様伝言承リ候事、

右次第御座候間、迎モ方今勃興之処六ヶ敷、未タ天時

不至故欤、何レ今一機会ヲ相待申外無御座候、何分御
安慮可被成、偕亦堀生入京之処モ、今通ニテハ迎モ參

兼候様子ニ御座候、別紙有新書状写差上申候間御笑可

被下、是ニテ大体之時情モ相分リ無致方儀ニ御座候、

猶追々申上度早々如此御座候、謹言、

正月四夜

大やま 大山綱良

菊池大君 西郷当時ノ変名

山川港へ

口書ニ

一於肥藩佐賀之情実聞合候処、当時ハ何モ打捨商一篇

ニ被振向貯金之由、中々応候処六ヶ敷、併不遠変ニ

陥リ候間、其節之用意(申事願カ)ト御座候由、堀ヨリ此段モ申

来候、

文書原寸 縦一六糎 横六一・五糎

八〇 永江休之丞ヨリ重富郷鹿島郷十郎山本五郎

右衛門へ

茂久公襲封一件書類久光公ノ一覽ニ供スル件

別紙六通

宰相様被遊

御覽候処、周防殿ニモ御覽被為成ト之御事候付差廻候

間、宜御取計可給、此段及御問合候、以上、

但堅山武兵衛より之書状へ、御覽之上御差帰シ可

給候也、

正月十九日

永江休之丞

鹿島郷十郎殿

山本五郎右衛門殿

文書原寸 縦一四・三糎 横四八・三糎

八一 久光公ヨリ島津豊後へ

茂久公襲封一件答書

御札致拜見候、余寒去兼候得共、弥御堅固被成御勤務、

珍重存候、然は今般

太守様御出府付而は、御道中彼是万端御配慮御都合能御

取計相成候故、長途御機嫌能、旧臘廿五日、

御出府、同廿八日御一類中様御同道御登

城候様、若御病氣等候ハ、御名代可被差出旨、御奉書

御到来

御名代奥平大膳大夫様御登 城之処、於御白書院御縁類、

御大老様并御老中様方御列席、御願之通御婿養子被

仰付、御遺領無相違被

仰出、諸事

人々御中

(島津齊彬)
順聖院様御代之通御心得被遊候様、且又依為御年若、御領分并琉球国御仕置等之儀、御先格御相違無之様、宰相様

猶以御端書之趣茂致承知、被入御念儀存候、
文書原寸 縦一九・三釐 横一四三・五釐

御心を被為付、御取計被遊候様、以御奉書被仰達候段、

八二 江戸島津豊後ヨリ久光公ノ侍臣へ

御書取被成御渡候付、御廻勤等諸事御先格之通被為濟、

茂久公襲封御礼濟ノ件

左候而

一筆啓上仕候、未余寒強御座候得共、愈御安全被為成御

御方々様

座、恐悦御儀奉存候、於御当地、

御対顔等茂被為在、

上々様益御機嫌能被遊御座、重疊日出度御儀奉存候、然

御袖判仰出等迄茂諸事無残所首尾能被為濟候段、恐悦至

極奉存候、右付而は、細々被示聞候趣、御懇篤之至、入

は 太守様御出府より

御念儀忝致安堵、誠難有奉存候、於此未彼は御心配御大

御家御相続迄之御成行は、先便申上越候通ニ而、其後去

儀之御事と存候、先々乍御報御歎旁為可申入、如斯御座

ル六日 御城坊主御出入被仰付置候者共之内、忝捨人御

候、恐惶謹言、

内々被召呼、御目見、且御料理并拝領物被仰付、一統

正月廿五日

島津周防(久光)
御実名判

島津豊後様

難有狩り、何篇御都合宜、同十三日御先手衆并御坊組頭より、兩御丸御用御頼迄御招相成、御先手衆御三人之内、耆人ハ御病氣ニ而、兩人御入来、御坊主は又候忝捨

人罷出、同十五日中通以下御坊主共四拾余人被召呼、同

十九日細川越中守様・上杉弾正大弼様御招ニ而、狩野・

勝川殿ニ茂御出、御坊主三人御取持ニ被召呼、(併之)同廿一

日藤堂和泉守様・有馬中務大輔様御招ニ而、為御取持釈

月佐渡守様・勝川殿ニ茂御出、御坊主四人被召呼、同廿

六日、御奏者番青山大膳亮様・松平市正様御招ニ而、御

習礼被遊、右御間日ニ茂、市正様ニは御内々御招ニ而、

御習礼等被遊、御客様毎ニ、私并筑後ニも罷出、御会釈

等申上、夫々御饗応被為在、いづれも様能御登付ニ而、

至極之御都合ニ御座候、然処此内より 御上気ニ而、

御口之辺江少々御吹出物被遊、精々御加養被遊、素より

御当分之御事ニ而、格別之御事ニは不被為

入候得共、何分御礼御当日迄之間、御快気如何可被為

在哉と、暫時は別而御案し申上候得共、最早寸切と御全

快被遊、勿論初而

御乗出之儀ニ而、心配仕居候処、昨廿八日天气合茂宜、

暁七ツ時御供揃ニ而、未明

御式台より

御出、前以御打合之上、有馬様御跡より直ニ

御登 城、於御白書院、御奏者堀石見守様御披露ニ而、

御家督之御礼被仰上、御刀持出酒井大学頭様・御肝煎太

田備中守様ニ而、御都合能被為濟、左候而讚岐殿初御家

来九人、

公方様江御目見之儀茂首尾能相濟、諸事御先格之通、無

残所被為濟、難有事共ニ御座候、尤於宮中御親類様并御

同席様方御扣席江御見舞、加賀様御嫡松平筑前守様・細

川越中守様御取分ケ御叮嚀、有馬様ニは初発より御付添

程ニ而、其外皆々様ニ茂御厚御世話被成進、殿中ニ而御

役方并御大名様方江、夫々御向ニ応し、御相当之御会釈

被為 在上々御都合ニ而、乍恐頓と御安心申上候、勿論

御行列廻茂此節より中小姓老人、奥御小姓式人、奥御茶

道老人、御召替御馬老疋、御供鑓老本、御供馬老疋、御

供挾箱拾老被相重候ニ付、

御駕籠廻茂御賑々敷罷成、下馬先は勿論、外方ニ而余程

宜御評判申上、御供方迄茂一統難有狩、先々

御威光之御事ニ御座候、將又

御元服・御官位来月初旬被 仰出御模様ニ御座候、就而

は右通 御家督之御礼茂、何篇御都合能被為濟候付、

御元服等之儀は何之御如才茂不被為

在御事ニ而、最早何等之御懸念更ニ不被為

在候付、乍憚御安心被遊可被下候、先は右御成行、且御

祝詞を茂為可奉申上、如斯御座候、恐惶謹言、

正月廿九日

島津周防様

参人々御中

文書原寸 縦一六・三釐 横三三九釐

島津豊後

久宝



八三 島津豊後ヨリ久光公へノ報告

茂久公將軍ニ謁見、賜名叙任ノ件

一筆啓上仕候、愈御安全被為成御座、奉恐悅候、於御当地、

上々様益御機嫌能被遊御座、重疊目出度御儀奉存候、然

は昨七日

太守様御元服被

仰付候間、御登

城可被遊旨、前日御老中様御連名之御奉書御到来、則

御請被仰上、六ツ時御供揃ニ而、

御登 城被遊候処、御黒書院江

公方様出御、於

御前御一字御拝領、從四位下少將被

仰出、御懇之被為蒙

上意、御盃・御着御頂戴、御道具御拝領、

御名修理大夫様御実名 茂久公と御改、諸事御先格之通、

万端首尾能被為濟、左候而

御退 城より、御大老様并御老中様方江

御廻勤被遊、御献上物等之儀茂、都而無御滞被為濟、恐

悦御同慶奉存候、右御祝詞旁為可申上、如是御座候、恐惶謹言、

二月八日

島津豊後
久宝



島津周防様
参人々御中

文書原寸 縦一六・五種 横一四七種

八四 江戸堀仲左衛門ヨリ大久保一藏へ(?)

水越薩有志義挙ノ件

来度義ニ御座候、水越之間罷備相挙年余之勝理不可疑候
得共、何分水も用心深ク、一昨日も必死之議論申込候得
共、北国江遣し候人数罷帰候上議論一定返事可致ト申事
御座候、いちゞ氏来書ニ致返書、概略之処相記候間態と
相略候付、御一覽可被下候、先は御聞取候分如此御座候、
恐々頓首、

未三月二日

(伊知地真鑑)
堀仲左衛門

文書原寸 縦一七種 横二八種 (前欠)

八五 茂久公(?)ヨリ近衛家へノ進物及参殿

ノ件

三通

八五ノ一

一御太刀一腰

一紗綾三卷

一御馬代金一枚

近衛右府様

一御太刀一腰

一御馬代金一枚

近衛中納言中将様

右江御使表方

御口上、弥御勇健被成御座、珍重奉存候、私事家督初
而国許江之御暇被下置、今日伏見江着仕候而、御案内
以使者申上候而、御太刀目錄之通進上仕候、

雅君様

信君様江

右江御使右同

御口上、右同断ニ付御安否御見廻、以使者申上候、

一 白綸子五本

一 御肴一折

近衛右府様

右江御使輿向

御口上、弥御勇健被成御座、珍重奉存候、表達而以使者申上候得共、今日參上仕候付、尚又御内々より以使者、目錄之通進上仕候、

文書原寸 縦一四・二櫃 横六四・一櫃

八五ノ二

一 雅君御方 一条様江御内、御引越

一 静君御方 広幡殿御裏

一 専修寺御門跡

一 一乘院御門跡

一 信君御方 御内ニ被為成候、

一 法華寺五十君御方

右

文書原寸 縦一七・五櫃 横四〇櫃

八五ノ三

一 御參上之節、御玄闕廉下迄取次方老人御出迎申、御休

息所江御案内申候事、

一 諸太夫御用人御挨拶ニ罷出候事、

一 御休息之上御用人御案内申、於小書院御对面之事、

一 右相濟、更ニ御居間江御案内申、

君様方御同座御对面之事、

一 右相濟、於御休息所御料理出ル、諸太夫御挨拶罷出候

事、

一 更ニ御居間江御用人御案内申、御相伴ニ而御吸物御酒

出之候事、

一 御退出之節、諸太夫御玄闕杉戸之辺迄、御用人取次方

等下座筵迄御送申候事、

一 御退出之節及入夜候ハ、裏御門御通行之事、

但御乘輿御場所裏御門内御門台之事、

文書原寸 縦一八・八櫃 横六三・四櫃

○八六 太守ヨリ久光公待遇ノ件

○八七 菊池源吾ヨリ大久保税所へ

八八 島津豊後等ヨリ藩内へノ令達

齊興公士風振起ノ諭旨

(備後書)
「齊興公仰出」

此度

御前江豊後被

召出、近年諸士之風俗不宜、無法之及爭論候儀、武士道有間敷事ニ而、全く武士之気性衰候訳と、歎ケ敷 思召候、其上番頭等申諭方不行届、親共申付方等閑故之事情間、急度風俗立直候様可申付、以来無法之儀共有之候ハ

、
思召被為 在候段、別紙之趣御直ニ承知仕、誠ニ以御尤之御儀奉恐入事共ニ候条、一統謹而可奉承知候、御国恩を以蒙生育候得は、専ら忠勤を心掛、武士を嗜御恩を可

奉報事候処、其儀も不弁追々被 仰出之趣を相背、無礼法外を働、其身は素より支配頭・父兄等迄蒙 御勸気候儀ハ、不忠不孝之至候条、御趣意之趣厚奉汲受、向後学問武芸を励、朋友之交互ニ礼儀を尽し、士道興隆御用立候様可心掛候、年若之者江は兼々無油断父兄等より可致教戒候、

五月

(島津久玉)
豊後

(曾入久春)
多門

(島津久静)
石見

(末川久平)
近江

(福山久敏)
伊織

文書原寸 縦一四・六糎 横一〇八・九糎

八九 菊池源吾ヨリ大、税、吉、有へ

暑氣甚敷御座候得共、御揃御安康可被成御座、珍重奉存候、随而豚生無異罷在申候間、乍憚御安康可被成下候、陳は御銘々様より御品々御恵投被成下、別而難有奉厚謝

候、扱時勢如何ニ御座候哉、唯案劣此事ニ御座候、反行之者一左右如何ニ御座候哉、此一策実ニ難有有志之実情も相通し、至極之上計と奉存候、異儀ニ拘居候而ハ大要を失ひ候儀、案中之事ニ御座候間、必御異論不被成処、起而奉願候、御存之通五六ヶ年有志之膝下ニ罷在候処、此けとふ人之交如何ニ茂難儀至極氣持も悪敷、唯残生可恨儀ニ御座候、何卒天定候期仰居候、水余程責付られ候様子、必潜龍之伸あらんかと却而樂居候事ニ御座候、いらざるくり事ニ御座候得共、折角忠節之相立候処、御願申上候、此旨荒々御礼迄如此御座候、恐々謹言、

菊池源吾

六月七日

大久保正助様

税所喜三左衛門様

吉井仁左衛門様

有村俊斎様

追而御連名御仁免可被下候、将又当地ニ而ハ如何様

之儀も難計御座候間、御書面之儀ハ三日程拜誦仕、早速焼方仕候間、必御懸念被成下間敷候、其外同社中江宜敷御伝可被下候、

文書原寸 縦一八糎 横一〇七・五糎

九十 田中直之進等義挙ノ趣意書草案

先年於横浜と「^先亜米利加」^先応接已来、於公辺も不得止之御情実而も候哉、交易和議之御持定相成候処、追月夷人狂暴之振舞相募、恐多も

主上不被為安

震襟、関東江屢被 仰下候趣御座候由ニ候得共、関東之有司方一円御取用無之、剩

前大樹公御大病差迫り、且御薨去以来為 本朝被抽御忠節候各諸侯方、御幽囚或御隠居之御処置有之、於京師

も

主上 御手足之 公卿方御幽囚同前奉殺

御羽翼候手段為臣子之分、誠ニ不屈之始末ニ御座候、

当大樹公と申而は御幼年之御事、右等之処置全

大樹公 御存慮ニ無之、有司両三人之意中より出候儀ニ

万々相違無御座候、異狄之患目前ニ迫り候砌、ケ様之始

末ニ御座候而は、行先如何罷成者ニ御座候哉、

第一

主上之 御苦心奉遙察、血涙歎息之至ニ御座候、

〔^(朱)剩当年ニ到征夷被仰下候、夷館等之御取建御饗応杯美

善ヲ尽シ、邪教寺迄建立御免候由、此假之勢ニ候ハ、不両

三年して夷狄之正朔を奉公候様罷成義無疑事と奉存候〕

此場ニ迫り候而は、苟生本朝候は、匹夫匹婦之賤ニ至り、

不安寝食儀と奉存候、然処此節水戸前中納言様江御内々

京師より被 仰下候趣有之、極密越前・仙台・因州・長

州杯江御引合相成、為 本朝乱 幕政、奉惱 叡慮候有司

一兩人御討伐之御策相定、私共江も内々水戸〔^(朱)家より〕

被仰下趣御座候付、水戸先手ニ加り、

為朝廷奉尺微忠筋ニ決心仕、今日出立仕候、前体私共義六

百年以来奉蒙 御恩沢、 御国家之御為尺寸忠、奉報

御厚恩度素懐は勿論、此度新ニ

上様 御家督被 遊、乍恐於 御馬前討死仕申そ、当然

之義と奉存候得共、前条之儀ニ就而は

〔^(島津齊彬)順聖院様 御趣意奉汲受候趣ニ有之、且 ^(藤融親王)青蓮院様、楊

〔^(尾張侯)尾張侯・^(水戸侯)水戸侯・^(福井侯)福井侯・^(土佐侯)土佐侯杯より兼々承知

仕候事件ニ有之、

本邦興亡之大機關、

朝廷之御為御義拳之事候間、此期ニ臨ミ悠々一罷在候而

御家御忠節之薄厚ニも相拘義ニ而〕在得と大小ヲ考、輕

重ヲ量り、右之通決心仕候間、不惡様御披露可被成下候、

不及奉申上訳而千万奉恐入次第御座候得共、於

御家も大義ニ御基キ、

〔^(朱)朝廷之御為メ一即〕御義応之程、偏ニ奉哀願候、不堪区

々之至〔^(朱)奉〕陳情実御届申上候、以上、

益山東石

田中直之進

何月何日

高崎猪太郎

有村勇助

〔朱〕有村次左衛門

山口三斎

堀仲左衛門

文書原寸 縦一六・三種 横一四七・五種

○九一 周防公ヨリ新納駿河へ

島津豊後退役ノ件

○九二 襲封ニ付茂久公ヨリ家老へノ諭書
家老ヨリ一門及役々へノ伝達

二通

九三 江戸有村雄助ヨリ堀仲左衛門へ

日下部伊三次復帰ノ件

一筆奉呈書候、先々御壮栄、海陸御無事、御早着之筈、
大慶奉存候、当地翌日も無異、御安意可被下候、御立後格
別相替儀は無御座候、別紙田中氏書面通之儀ニ御座候間、

別段不申上候、御地之形勢は勿論、御中途之都合如何と

案し居候のミニ御座候間、早目御左右奉願候、日下部氏

之儀ニ付而は、田中氏申談、無事緩取行可申、申迄も無

御座候得共、御見聞通之儀ニ而、追々之御都合ハ謁ニ而

奉願候、はゞさま・日下部氏御家内より、返すく宜敷申

上越呉候様承り申候間、左様思召可被下候、尚追而可申

上候、恐惶謹言、

未

十二月廿九日

有村雄助

兼武

堀仲左衛門様

文書原寸 縦一六・二種 横五七・二種

○九四 太守ヨリ久光公待遇ノ件

○九五 久光公関係ノ御書付類目録

九六 茂久公参観御発駕吉日撰定



(包紙アップ書)
「御発駕吉日」

御発駕吉日

三月四日 巳刻

右之通吉日吉時相撰申上候、以上、

二月十七日

御曆者

水間喜右衛門

文書原寸(折紙)

縦一六・五種

包紙原寸

縦 二八種

横四六・五種

横四一・八種

九七 金子孫二郎(西存) ヨリ有村雄助ニ託シ

タル薩藩同志ヘノ書翰

一昨年非常之

叡慮ヲ以、幕府并水藩江

勅諭御下相成候ニ付、^(幕)両募君ハ勿論、闔国之有志頗尽力

仕候得共、嫌疑甚鋪、昨年ニ至候而は、幕府より嚴重被

蒙御咎候程之時勢ニ而、今以

勅諭伝達ニモ不相成、

勅意奉行被致候義モ不行届、上下一統奉忍入、悲痛仕候ニ付、各冤罪洗雪仕、

勅意奉行被致候様周旋仕度志願ニ付而、屏居之身不願万死去月十八日国元出発仕候処、 尊藩ニは 先公之御遺

志御継述、専勤

王之御精忠被尽候 思召被為在候段伝承仕、兼々奉欣慕候間、

京撰之間ニ潜匿仕、御同志之御方ヨリ達

御内聴、幾重ニモ御尽力奉希上候所存ニ而微行仕、尤道中至而艱難之時節ニ付、御家中有村氏同伴ニ相頼、

尊藩之名目ニ而通行仕候処、四日市駅ニ而不慮之次第ニ及、一身之恥辱無此上候得共、元来志願ヲ遂候義本懐之

筋ニ付、事之成否突留候迄は、如何様之恥をも黒囚終り

他郷之鬼ト相成候共、此先

尊慮ニ御すかり申上候而、本意相遂申度、勿論本藩之事のミにハ無之、

將軍家御幼年之時節ニ乘し、

幕府之權臣我意ヲ專にし、正義之

宮公卿方を始、御貴戚之御方を罪し、忠義之士を殺し、

恐多モ

天朝を奉蔑如、外夷を親ミ、交易之条約を定、

国体を恥しめ候義ニ而、実ニ天下之大事ニ御座候間、天

下之冤罪を被為解、水藩ニ而之

勅諭奉行仕候様御周旋被成置、奉安

叡慮、国体を御維持被為在候様、

御英断之御事業奉至願候、至難之世態、老軀之志願空鋪

就死地も難測候処、

志願之趣は諸君御酌取被下、宜鋪

太守公江モ被仰立、猶御周旋御尽力之程奉願候、頓首、

三月十二日

西存

星月夜

御同志様中

君の為世の為つくす真心は

二荒の神もみそなはずらん

まそ鏡清きこゝろは玉の緒の

絶てし後そ世にしらるへき

文書原寸 縦一六・三釐 横七七・八釐

九八 真木和泉ノ英断録

二通

英断録

勅既下矣、頒之各国議既定矣、刻日挙事、兵皆載洋製艦

々、凡六艘、二艘為一軍々、凡三隊、軍將各侯為掌之、

乃宣言大関于某島、甲日昧爽拝大社、

詔既下矣、乃徵精練士卒各四千五百、分為三隊、謂之中

軍・上軍・下軍、中軍則公帥之、上軍・下軍則扱義勇帥

之、為留主旅于某々地方国都、乃宣言大関于某島、艦皆

用洋製、一隊各二艘、建幟為記、不得相混、乃甲日昧爽、

拝廟、盟而後発 詔書示之、 詔書曰、東霸式国、応夷

乎内、不可不糾其罪也、汝宜以汝兵輔 朕、因厲之以大義、行酒一獻、乃上船、解纜揚帆柁卜而定各所進、舳艫相接而進、乙日薄暮到華海、十軍入自安江、斫闕而進、直拔華城、入以保之、先是、遣使諭諸侯番兵勿動、又榜于通衢數所、曰、某奉

勅取華城、明日將為 行在、市人宜体此意、各勤其業、而待他日之命、而東人之為留主、為番兵為市吏、防者殺之、遁者縱之、乃遣使告近國諸侯、曰、某奉 勅迎 車駕、宜躬來拜命、若猶予、則亦將以兵問罪也、十軍下陸於木江西岸、捷徑向山崎、直進拔二条城、而待留主番兵如華城、軍則取路於木江東岸、或用艇並進、使謂淀曰、某某等奉 勅云々、防即防、不然、宜躬詣京待命、直進拔伏水、屠番兵、分兵三百守之、先是分中軍兵千人守湖西、又分其兵四百直進、取彦城燒之、乃詣 闕、護 車駕入華城、中宮・親王・公卿皆從焉、車駕既御華城、乃遣使 勅幕府、曰、近年已來、洋夷猖獗、朕甚疾之、下勅斥之、然直弼已下、時乎爾之幼弱、窃弄威福、擅背

朕命、反昵夷虜、雖直弼既伏誅、而余孽尚在、朕欲糾其罪、而後攘夷狄、爾宜体 朕意、勒尔臣民、以待 朕東巡、若或聽佞人之言而動、則禍及尔之宗社、朕言不詐、尔安焉乃徵諸侯邸留主伝 勅、使之羽檄告其國、而徵其主、特水与仙、率東國諸侯屯下総、加則率北國諸侯屯白井、諸侯既集、乃以薩為華城留主、大國阿侯副之、以西火為京城留主、小國三四侯副之、以長為先鋒、阿因次之、竺楊宇次之、土為牙兵、備為殿、別遣薩肥之兵二隊載之洋製四艘、自東海至品海、扼浦賀口、勒而不動、以待東巡、部署定矣、車駕發華城、拜八幡廟、入勢、拜神宮、入尾、擁宝剑、駐蹕于函嶺、徵某及其有司糾罪、乃封某于北越之地、有司則以罪之輕重賜死、或流竄、遂幸大城、置安東府、移河忍于海口、以敵兵備、遂幸仙城、大議蝦夷地方々略、左折出于出羽、依形勝置寧北府、還入華城、乃數更始詔于天下、其詔曰、朕以所々之躬、忝膺丕業、夙夜戰兢、惟恐紊先緒、而尋常之事、雖依旧貫而可也、而至係國体、則不可不用馮河之拳矣、近年已

来、西洋戎虜、猖獗殊甚、征夷府怖彼熾焰、氣息惟仰、

待遇惟慎、而不悟内破国体、而懷人心、反狀 朕心脅、

害 朕股肱、殺 朕赤心、何其顛倒錯乱之甚也、彼驕梁

職之由焉、 朕聞、自悔而後人悔之、欲人之不侮、則不

如自修也、 朕既糾征夷府之罪、因大与天下更始、某元

年月日、味爽已前、大辟至答罪、皆赦除、欲用其維新之

力、以禦戎虜之侮也、從今已後、上下一心、宜以崇尊国

体、攘斥夷狄為念、(衍之)天下宜体 朕意、親王公卿、国造県

主、至農工商壳、各慎其德、勤其職、勿或懈弛也、 朕

又聞、好問則裕、自用則小、為視而有目、為聽而有耳、 朕

見賢而不用、聞善而不取、安在乎耳与目耶、 朕之所視

用之以不次、汝等亦奉之、 朕所不聞、惟汝等奏之、勿

或所諱、以輔 朕不逮、 朕特期与尔等相率躋仁寿之域

矣、乃改制度布武備、侯私鑄、而有記不得縱輕重、因禁

楮幣、乃正姓氏称呼形体衣服、頒曆教律度量衡之樣、租

稅賦役之法、軍賦兵備器械之制、修冠昏葬祭之礼、座立

拜趨之儀、乃諭僧為兵、寺觀為小学、佛像仏器之用金銅者、皆鑄為銃砲、僧之老而

不願還俗者、佛像用木者、經營之不堪世用者、聚而移之隱岐島使世人不復沾染于其法、至久而安我道燒而棄之、若其徒狡黠、勸化小民或引戎虜

而犯国憲、則遣兵討斃之、大砲 乃定巡狩述職之、因巡狩南海西

海、置撫南府、鎮西府、乃施三韓滿清流琉球南島控制之制、

以使西洋戎虜不得盤踞於南島、乃遷都于養德之地、於是

大作礼棗、以興太平無疆之道、

庚申七月作

(朱) 一萩 久坂玄瑞

德山黒川厚藏二十九

薩 鮫島吉之丞

同 肝突七之丞

攘斥夷狄之難

黠檢兵卒之難

駕馭諸侯之難

收攬英雄之難

撫綏奸民之難

与長州書

築城堡造兵艦 鑄銃砲

選俗僧黠漁民 收糧子

拓蝦夷

配辺海

与摺紳書

論諸侯詔

諭僧徒詔

文書原寸 縦二四・四種 横一六・八種 七枚・五枚 同文二冊アリ

九九 五島領主ヨリ築城費一万兩借用方薩藩へ

申入ノ件

右三通綴二冊

一千兩宛年賦返済ニ対スル骨粉肥料ノ提供条件

九九ノ一

万延元年申十一月手扣書

五島左衛門尉様先年城築方被仰渡、早速より御取付ニ相成候処、全体豊饒之因柄ニは候得共、御藏方乏敷由ニ而、初発より大坂表御借用を以御打立ニ相成候得共、費用不相足、纒石畳等御取仕立相成候而已ニ而、今形ニ而は城郭御成就之丈ニ而無之、于今不絶堀切石築方等有之由ニ候得共、埒明文ニ而無之、甚御残慨之御事之由、依之此御方様江金老万兩御拝借御願被成度、若願通相叶候事候

得は、直ニ城郭成就被成度と之事ニ候得共、何分御拝借

ニ付而は、年限等を以現金御返弁方込茂難被調、五島一

円ニ出産する骨槽類を以年府^(賦カ)ニ而老ケ年分金千兩ツ、御

返上方被成度、左候而は上方諸国御國中ニ而茂商人共ニ

は一手ニ相願候者数多有之由候得共、先年より商人相手

ニ而後年ニ相成、煩到来多々為有之由ニ而、適城郭成就

之訳等ニ借入候を、後年ニ至煩等到来之取結ニ而は、甚

以御残念之所より、此

御方様江奉願、年々屹と後年之煩無之様被成置度、若御

拝借被仰付向ニ候得は、直ニ彼御家老兩人茂御当地江差

越、逐年無異儀御取結申置度と之事之由候得共、内分右

通骨槽ニ而年府拝借被仰付候向不相決候而は、表立卒尔

之御願は難被成所より、無抛承趣有之、就而は段々尽手、

彼方情実旁之儀共聞合方仕候処、右通相違無之、勿論年

々千兩ツ、骨槽ニ而御差返相成賦ニは候得共、五島一円

之出産丈は、都而直段被取極置被差向度、左候而千兩差

引残分は、此

御方様ニ而御運送被成下、残代錢丈は年々現金、或は五島江無之品類ニ而茂御渡被下候様被成度御念願之筋ニ御座候、就而は当時諸商人取引直成并御当地御売払之直成を以、御差引御利潤相成候荒増之算面書、別紙式通之通ニ御座候、骨槽外ニ茂大豆・小麦・麦安・天草類之品茂一切被差向度、左候得は一切商人共江不相拘、年々御安堵之吟味有之筋抔承事ニ御座候、然処御当地之儀第一鯨骨槽無之候而不相叶土地柄ニ而、若哉此手段此

御方様ニ而不相濟候ハ、不被得止事、大坂等江御取結相成候ハ、頓と鯨骨御國中江買下候儀無多事、殊ニ直増等相成候而は、

御領内中一統之憂と相成申候半、五島に土産する品一切御取引相成事候得は、第一

御為方ニおひて一廉之御利潤罷成可申、当時莫大之御費用被為有之候事ニ付而は、少ニ而茂御補ニ相成候儀は御取扱有之度御時節ニ而、右御取結は此

御方様より御取企可有之程之所ニ、却而彼より御願筋ニ

付而は、別而御仕合之訳柄ニ而、早速御取結相成度御事と奉存候、右御首尾方ニ付而は、前件通彼家老御当地江出府ニ而、永年堅固之御引結被成置候ハ、少茂御懸念之廉は有之間敷、尤大金之事ニ而一緒ニ御渡方難被成候ハ、五千兩ツ、兩年ニ相掛御渡相成候共、又は三千兩位ツ、三ヶ年ニ相掛御渡被成候而茂、御取極之上は差支有御座間敷、年々狛不狛は可有之候得共、大概中位之処ニ而、別紙位は年々有之向御座候、老ヶ年中之概算を以茂、千兩は返上株ニ而御引拔、残百拾九貫目丈は御差返相成候而茂、御利潤は百式拾九貫目程有之賦ニ而御座候得は、三ヶ年ニ相掛御渡相成事共ニ候ハ、三百八拾七貫目丈は全御利潤之内より被相渡賦ニ御座候、左候而拾ヶ年府相濟候上は、尚亦同様之御取結、以来永代之御相談被成度、彼方ニ而茂弥御仕合之御訳筋と奉存候、左候得は、乍憚五島一円纒老万兩ニ而御買取相成候訳ニ相当り、殊更不容易

御時節柄之事ニ茂御座候得は、万一茂有事之日、一小国

なから茂自然被結置候場ニ茂相成、旁以於此

御方様、御益筋と奉存候付、御許容有御座度御事と奉存候、若御狐疑之訳茂被為有之候ハ、内々彼地江被差越、彼国老初役々江茂逢取、彼情実篤と探索仕候儀は、何様共出来申候儀ニ而、其通被仰付候共、又彼地居住之西村武兵衛と申者を御当地江取寄候儀は、直ニ出来候事ニ御座候間、其者江得と御聞届被成候上、於無相違は、御許容之御返事相成候而茂差支有御座間敷、左候ハ、おのつから彼家老出府仕、御請等は可申上事ニ御座候、何分御取結相成候上は、往々別段御利益之御訳柄茂可有御座候得共、右等之儀且互ニ骨粕其外運送方ニ付而之儀共は、弥御取究之上、別段可申上候、以上、

申十一月

九九ノ二

文久元年酉四月手扣書

一五島左衛門尉様金老万向御拜借御願之儀無相違、先度申上候通ニ而、于今時節を被相待、御心願之事之由御

座候得は、卒尔ニ御願難被成処より、西村武兵衛と申者を以御内々被相窺、若願違之向ニ茂候ハ、彼家老・勘定奉行兩人早速御当地江罷越、表立之御願被成度と之事ニ候、左候而返上方之儀は、先度申上候通、年々千両ツ、御返上ニ而、一切五島出產丈之骨槽被差向度右罷越候者共より、永久之御引結申上度と之事、

一骨槽之儀は年々之猟不猟ニ而多少有之事ニ而、万一年々之千両ツ、御返上分不猟ニ而不引足節は、大豆・小麦・麦安・天草ニ而、右丈は相違無之御返納可相成、左候而右大豆等之儀茂、五島一円出產之内ニ而、猟不猟ニ不係兼而被差向置度、併是等之儀は此御方様御勝手ニ被成度事、

但不猟迎茂年々千兩位ツ、之返上方不相調丈之儀は骨槽ニおひて決而有之間敷と之事、

一飽之儀は一切長崎江公義より御買入品ニ而、他江売買は不被成賦ニ候得共、なからめは不苦事候故、当分抜買等ニ相成処も、都而御国迄ニ而、過分ニ相及事候故

屹と抜壳等彼ニ而御手被付、御付届之名目を以、長崎余分は可被差向、是茂万一不猟ニ而骨粕ニ而、年分之千兩不引足節は、御差引方之御見当ニ被成置候而茂可然御賦ニ候事、

一御返納方ニ付、老万兩拝借ニ而年々千兩ツ、御返弁之算當ニ而、諸骨粕直段被究置、一切被差向候骨糟を以御引拔、余分丈は矢張同様之直段ニ而年々御買入被成下、右之代錢は現金ニ而茂品物ニ而茂御渡被下候様と之事ニ候、依而彼地蠟燭・鬢付類、紙・油・煙草類毛頭無之土地之由候付、是亦直段被究置、右現金之場ニ御渡相成候ハ、此

御方様ニ而茂至極御勝手ニ相付可申候、又彼方ニ而茂上方下シ方之賦ニ比候得は、勝手向ニ相成賦ニ候、双方共追々御便利之賦ニ御座候事、

一年々之御返納方ニ付而は、少茂御念遣之儀は無之候半是迄諸商人共、鯨網等ニ付利得之見越を以、先納等之誤、或は商人共前入付ニ付、万一不猟ニ付無抛延方相

成候事杯とは訳茂相替、全御拝借御下ケ金之返上方之儀ニ而、殊ニ御物と御物と被引結置候儀ニ而、永久ニ至候而茂聊異儀之廉有御座間敷、尤願通御拝借於被仰付は、以来大坂等江銀主等御頼入ニ不及、永代之御趣法相立、尚亦追年右老万兩返納方相濟比ニは、往々同断之振合通、又々老万兩御下金御願被成度賦ニ而、是より御報 恩之思召ニ相違無之と之事、

一黒岩藤次郎名前ニ而、骨糟一手願之儀は兼而鯨骨迄ニ而、是迄為有之事之由ニ而、此節前入付之約定相成候儀も、矢張右鯨骨迄之事ニ而相違有之間敷、尤右取扱向之儀は、全諸商人取扱之由、鯨骨之儀は他国ニは全不向品柄ニ而、御国迄之買下ニ而、是迄黒岩老人一手之由、御国者ニ而茂鯨骨計は買入候而茂、御国ニ而壳弘等余人は出来不申由、扱又先度申上候節、為御見合骨糟年分丈之概算員数書之儀、随分中位之并シ之処ニ而取得候処を以申上候儀ニ而、夫は五島中ニ出産有之間敷と申儀は玉浦辺迄ニ而、殊ニ昨年は不思議と不猟

ニ而、昨年計之見当ニ而申上候儀ニ而可有之、小島之事ニは御座候得共、流茂三十四五里ト申場所、上五島・下五島と浦々茂過分ニ有之、鯨網茂当分四ヶ浦江四組程も有之由、鯨之大小ニ而違は有之事候得共、先小成鯨之賦ニ而、尙猷丈之骨粕拾貫目入俵ニして貳拾五俵位は有之由、其外鯨・鯉・鰯網之儀は、浦々過分ニ有之、空ニは極而幾網共難被申、都而彼御物より免許之網代之由、千両ツ、之返上方ニは決而不獵と申年ニ而茂懸念は有御座間敷、又ケ様成大願相含居候内、纒計五百兩位之前入付等之約定相成候儀は、御狐疑茂可有御座候得共、仮令大願有之候共、薩摩中之人なれば、纒ツ、ニ而茂一手等願出ル者江は、随分内約ニ相成居候而茂、万一願之通相濟時ニ而茂、薩摩中之者なれば、仔細は無之事ニ而苦かる間敷由、先度西村御当地より五島江罷帰候節、蔵方ニ茂申出置候由ニ而、素より黒岩は鯨骨のミは願ニ相成居候事ニ而、前入付之約定茂、此節茂不相變向約定ニ相成候半と之事、右は西村武兵

衛此節出府ニ付、尚亦事情相糺候処、右之通相違無之、返す／＼茂御返上方御念遣は決而被為有之間敷、勿論此御内願筋ニ付而は、内実は左衛門尉様・御隠居様御初、御心願之事ニ而、家老・勘定奉行中一同内願之事之由、役人は相替候共、主意は不相變、今度御内分ニ而茂、随分御拝借被仰付向ニ茂奉承知候ハ、直ニ五島江罷帰、其由申上候得は、当分左衛門尉様・御隠居様御国許之由ニ而、早速家老・勘定奉行兩人被差遣、表立御願ニ相成候儀は相違無御座、商人相對之約定向トは頭で雲泥之事ニ而、其処は御勘弁を以御吟味被成下度、併此節黒岩一手等之儀ニ付而は、^(付懸)一決而御狐疑之訳茂可被為有之事ニ而、此節は御上江申出相成候丈之儀を御書付被下候ハ、早々五島江罷帰、右黒岩等之次第は勿論、五島中一切之出産丈等、屹と吟味を被尽、表立五島役々より書付を以内願之趣意、且諸品員數屹と申上ニ相成候様仕度承り申候、就而は此節は、早々右西村差返、彼役々より尚亦

書状参り候上、御決議有之方御宜敷可有御座奉存候付、

其通取計可仕哉、此儀を御当地ニ而「鯨骨糟買円方仕、

売上候者江御吟味被仰付候而は、逆茂能様ニは申上間

敷、右等之者は始終自分利分迄を相考居候のミニ而、

御物一手ニ相成候得は、甘キ処無之様成立故を以、適

御国家之為申上候共、壅塞之憂を致候儀、畢竟国家ニ

心なき奸商江吟味被仰付候と、直ニ種々之狐疑を相構

候儀は必然之事と奉存候付、能々御勘考有御座度御事

と奉存候、此外何茂先度申上候通之儀ニ御座候、以上、

酉四月

横張原寸 縦一四・二種 横四二・七種 七枚

九九ノ三

(表紙)
「上」

一御領内之儀は專諸骨粕相用候土地ニ而、就中鯨骨粕無

之候而不相叶土地柄ニ而、以前より前入付等ニ而御取

入之約定等、肥前諸所江茂御手被付候得共、存分ニ参

兼候儀等茂有之、然処

(島津青彬)
順聖院様御代、鯛網方迄茂被召建、追々御入価茂不被

為厭、御手茂被為付候時分より乍憚五島諸骨粕御手被

付候ハ、決而

御国家之御使用相成候半と存詰罷在、折角手を付候得

共、未良計を得不申罷在候折柄、無端

御逝去ニ茂相成、打絶罷在候処、其涯五島居住之西村

武兵衛と申者、御当地江参居、不凶一面会仕候付、何

用ニ参居候者哉承合候処、骨粕一条之ため大願ニ参居

候様子被相窺候付、幸心を用罷在候事付、篤と承合候

処、

御逝去ニ付而は逆茂大願相達候儀相叶間敷、頓と望を

失ひ候内情巨細ニ承、其趣は五島様当時御不繰合付、

此

御方様より御金老万兩御拜借御願被成度、左候而現金

ニ而、涯々御返上方茂難被調処より、五島一円出産丈之

骨粕被差向、年々金千兩ツ、年府ニ而御返上、右之骨粕

御差引千両之余分有之候へ、右余分丈八年々金子ニ
而茂御返被成下候様、御内願被成度御内評ニ候得共、
相叶候向不相決候而は、卒尔ニ御願難被成処より、右
西村被差遣候筋被窺、願違候向ニ茂候へ、表立五島
家老用人之間兩人程茂被差越、別而御願被成度と之段
承り、誠ニ此

御方より御手を可被付事を彼より御願ニ付而は、何様
共存分之御所置茂被為出来候御訳柄ニ而、実ニ

御国家之御為筋と存、猶亦旁之事情共篤と説整を遂置
申候得共、何分

御時節柄之御事故、是迄差扣、右西村方江は時節見合
居候へ、依時宜は事起り候儀茂難計旨を以、相しら

ひ置申候、然処追々

(島津奇形)
順聖院様御遺志茂被為 繼候御取扱振ニ茂罷成候様ニ

奉伺上候付、去冬御内用方江形行を以極内申出置申候、
左候而猶亦五島表役々より、現実之手印、且骨粕其外
一切之産物、年々之見当賦書等請取候上、御吟味ニ茂

可相成様ニ茂奉窺、当夏初西村又々参り候付、右之趣
相含差返候処、此節御拝借御願之訳筋を委細口上書ニ
認、且産物一切年々之賦書彼役々より私名宛之書状相
添押返、右之西村被差遣申候、依而早速右書付等相揃、
御内用方江差出置候付而は、当分御吟味中ニ可有御
座哉と奉存候、おのつから御伺ニ相成答奉存候事、

一御返上方ニ付而は、鯨骨粕を初、干鰯等迄、是より五
島一円之出産高都而公品ト相成、被差向候ニ付、是迄
商人相对之仕向トは訳茂相変、役人は相替候共、其趣
法は永年相替候儀は無之様御引結相成居候得は、少茂
御懸念之廉有御座間敷候、左候而年々千両ツ、被差返
候、返上方相濟候比ニは、又々同断之御仕向ニ御願被
成、以来大坂等江銀主等不被相頼、専此

御方様永代之

御恩願を被蒙度御心願之御様子ニ付而は、弥
御国_ノ之御為方ニ而、永年之御約定被居置度御事と奉存
候事、

一 鯨骨粕之儀は第一之用品ニ而御座候処、是迄黒岩藤次郎と申者老人ニ而、五島辺より買円方仕、売上候品ニ而、既ニ去冬五島江差越、一手之願等申候由、当時骨粕方掛御役々ニ茂、近年鯨骨存分ニ無之事ニは、別而心配之事とは被相伺候得は、此節御願筋之儀ニ付、内吟味之趣内分承候得は、右黒岩藤次郎江吟味申出させ候筋と相見得、迎茂年々千両宛之骨粕は無御座候付、御取止之方ニ茂申出候由、專商人之心ニ而は

御国家永久之事を存候儀は素より無御座、專自分利得を存候者ニ而、御願通相成候而は、自分利潤舞揚候処より右様壅塞之憂を致候儀無之共難申、畢竟奸商共之申分を御取用様候而は、終ニ

御国家之為茂却而不詮立様成立、残多事と奉存候、尤是迄諸所鯨骨粕取円方、右黒岩老人之御免と相見得、外商人共、万一買下候欵、又売買いたし候と、直ニ夫々之糺方等ニも相成、別而迷惑仕候由、是以広キ御国之事ニ候得は、老人之手ニ相限様候ニ而は、実ニ

奸商利争之ため、多之百姓ハ甚難儀仕候儀ニ而、乍恐御緊察被為有之度御事と奉存候事、

一 去年中は五島ニ而茂鯨至極不漁之由、就而は右老ヶ年之不漁高を以、千兩位之骨粕無之、迎御取組不相成様ニ而は、漁方有之時節到来之時ニは、別而御残多事ニ相成候半、不漁打続候得は、

御領国中百姓共弥難渋仕候儀ニ而、当分通不漁ニ付而は、弥以御取組被成置候ハ、漁丈之御国便ニは相成賦御座候、尤骨粕一切ニ而茂、年分千両之御返上方ニ不足合節は、大豆・小麦・麦安・心太草・若芽等茂一切可被差向と之事ニ候間、相混年々千両ツ、之御返上分不足合ト申程之儀は迎茂有御座間數奉存候、尤鮑・煮海鼠之儀は、長崎江御用凡三千斤程之由、其余なからめ・ことぶし両品は、外売買少茂差支無之由、依而是より追々出産相増候様御取扱相成、是亦一切被差向と之事ニ而、此二品ニ而茂年々過分之斤高ニ相及可申奉存候、左候而万一茂不漁不作之年柄到来候而、千両之

御返分不足合儀有之候共、一円之御取組ニ付而は、其年之出産丈御受取ニ而茂御差引方ニ付而は、何茂御差支有御座間敷事と奉存候事、

一此願筋若不相叶時は、於彼茂大坂等江銀主等被相頼、骨粕等一切其方江被差向候事と茂相成、御国内江は買下候儀自然難成時宜共罷成候欵、且追々直段等相増候様成立候儀ハ、当時勢ニ而は相違有之間敷、右様成立候上は、則

御国中之憂相成候儀は必然ニ而、乍憚此一事を存詰罷在候事ニ而、何分篤と御評議被仰付度御事と奉存候事、
一五島一円出産丈之骨粕等御受取ニ付而は

御国内御用分外は却而肥後其外上方表等相向方江御売払相成候得は、御返上分御差引、年々余程之御利益筋相成可申奉存候事、

一五島諸骨粕等出産賦書之儀は、御内用方江差出置申候事、

一御内用方江是迄申出候形行は別冊之通申出置申候事、

西六月

横帳原寸 縦一四・二種 横四二・七種 七枚

一〇〇 菊池源吾ヨリ税所へ

(冠紙ウケ書)

一三島方御勤

税所喜三左衛門様 菊池源吾

海上安全平静

大島龍郷より

芳翰難有拜誦仕候、弥以御壮栄、御上坂迄被為在候由、嘸哉御太儀千万、御秘人様ニも御快方奉賀候、随而小生無異儀罷在候間、乍憚御安意可被下候、陳ハ天下之形勢追々正場之模様、恐悦之至ニ御座候、只々一左右待兼候処、快事共御同慶奉存候、両三好

神罰之次第、さも可有訳ながら、神洲地ニ落不申、難有儀ニ御座候、琉球登汐掛ニて荒々如此御座候、尚来陽早船より可奉得貴意候、頓首、

十一月七日

稅所喜三左衛門様

追啓上、当分ハ獵方ニ而昼夜差はまり居候処、消悶鬱を凌候事ニて大元氣罷在候間、少しも御案被下間敷候、

文書原寸 縦一六・二糶 横三九・七糶

101 菊池源吾ヨリ堀大久保へ

尚々、正助様より御送物毎々難有御厚礼申上候、遠方江着島ニて書状而已相達候、

御両公之御細翰難有拜見仕候、只々早船之一左右相待居候処、天下之形勢も相分、追々正義ニ向候模様御同慶奉存候、不相替御同志中様方御壮榮奉欣賀候、随而小弟無異消光仕候間、乍憚御放慮可被下候、陳ハ水老公御逝去、実ニ為天下悲痛此事ニ御座候、治世之運數極ニ至り、最早乱ニ入候儀無相違、譬一橋・越公之御方々御出世ニ相

成候而も事遅、如何ニ御聡明之御方々迎も、用ニ立候人々ハ非命之死を遂、持起すへき人才も乏敷、況や御養君迎ハ御幼年、諸司ハ旧習ニて英断之人も無之、乱ニ入候外無他事と愚察仕候、いつれ外夷之内一番ニ手を出し候者イキス^(マ)欵と相考申候、若や一発相響候ハ、各国引込、一致して防戦可仕勢ニ無御座、可憐世態罷成申候、堀兄ニは疾御出府ニて、彼は御周旋之御事欵と奉察、御嫌疑不相掛様ニとは而已相祈居候処、案外御出府も不相調由、無致方御事ニ御座候、当分之処、諸藩より尽力之方迎も有御座間敷哉、皆々手を引いて静居候様子と被相伺候、水藩之儀弥大破ニ及、有志紛々必敵を被打可申、残恨此事ニ御座候、願くハ高橋^(多一郎)隠然として罷在候ハ、少しハ策も出候半、亡名之姿ニ相成候而ハ、是以致し様も無之、必一番破立候儀と奉遙察候、将又彦根之動靜如何ニ候哉、間牒之注進も為有之儀と奉存候、固より之弱国、激変之様子も有御座間敷哉、頓と清国之覆轍を踏候次第、皇国千万載之遺恨ニ御座候、此旨御礼答迄、汐掛船より

荒々如此御座候、尚追々御洩し被下度、奉合掌候、頓首、

十一月七日

菊池源吾

堀仲左衛門様

大久保正助様

追啓、外様方江宜敷御伝可被下候、

文書原寸 縦一六・三糎 横六三・三糎

101 藩内士分以上出軍人数調

鹿兒島城下八五十歳以下十八歳以上諸郷八五

十歳以下二十歳迄

(表紙)

「五拾歳以下拾八歳以上人数調并馬賦」

小番新番

一惣家部千三拾六

申

五拾歳以下拾八歳以上

千拾三人

但医師并島方居住除

内

一他国旅并島渡海百拾壹人

一御国旅百六人

一長病人七人

一極貧者七拾人

一中宿者式人

差引
現人数七百拾七人

内

一四拾五歳以下式拾歳以上

五百四拾四人

一三拾八歳以下式拾五歳以上

三百四拾式人

一番組

一惣家部五百三拾七

申

五拾歳以下拾八歳以上

五百貳拾七人

但醫師并島方居住除

内

一他国旅并島渡海五拾叁人

一中宿者四人

一御国旅五拾五人

一長病人五人

一極貧者拾人

差引

現人数四百貳人

内

一四拾五歳以下貳拾歳以上

三百四人

一三拾八歳以下貳拾五歳以上

百六拾四人

二番組

一惣家部五百拾九

申
五拾歳以下拾八歳以上

五百三拾九人

但醫師并島方居住除

内

一他国旅并島渡海五拾人

一中宿者拾八人

一御国旅五拾七人

一長病人八人

三番組

一惣家部六百四拾六

申

五拾歳以下拾八歳以上

六百四拾九人

但醫師并島方居住除

内

一他国旅并島渡海五拾五人

一中宿者拾貳人

一 御国旅六拾八人

一 長病人拾人

一 極貧者六拾人

差引
現人数四百四拾四人

内
一 四拾五歳以下式拾歳以上

三百三拾五人

一 三拾八歳以下式拾五歳以上

式百拾老人

四番組

一 惣家部四百式拾四

申
五拾歳以下拾八歳以上

四百式拾老人

但医師并島方居住除

内
一 他国旅并島渡海三拾七人

一 中宿者五人

一 御国旅三拾老人

一 長病人九人

五番組

一 惣家部四百九拾式

申
五拾歳以下拾八歳以上

五百拾三人

但医師并島方居住除

内
一 他国旅并島渡海三拾八人

一 中宿者拾八人

一 御国旅三拾人

一 長病人七人

一 極貧者四拾人

差引
現人数三百八拾人

内
一 四拾歳以下式拾歳以上

式百六拾六人

一 三拾八歳以下式拾五歳以上

百式人

一 極貧者六拾式人

差引

現人数三百四拾五人

内

一 四拾五歳以下式拾歳以上

三百拾三人

一 三拾八歳以下式拾五歳以上

百六拾老人

六組

一 惣家部三千九拾四

五拾歳以下拾八歳以上

三千百三拾九人

但医師并島方居住除

内
一 他国旅并島渡海式百六拾人

一中宿者六拾式人

一 御国旅式百八拾式人

一 長病人四拾七人

一 極貧者式百三拾四人

差引

現人数式千式百五拾四人

内

一 四拾五歳以下式拾歳以上

千七百七拾四人

一 三拾八歳以下式拾五歳以上

九百五拾五人

小番・新番・御小姓与

一 惣家部四千百三拾

五拾歳以下拾八歳以上

四千百六拾式人

但医師并島方居住除

内

一他国旅并島渡海三百七拾壹人

一 中宿者六拾四人

一 御国旅三百八拾八人

一 長病人五拾四人

一 極貧者三百四人

差引

現人数貳千九百七拾壹人

内

一 四拾五歳以下貳拾歳以上

貳千三百拾八人

一 三拾八歳以下貳拾五歳以上

千貳百九拾七人

一 御一門方并家名方五拾歳以下貳拾歳以上、二男三男末

子迄

四人

内

壹人 病身

拾八歳以上無

一一所持以下寄合并以上右同

三拾壹人

内

壹人 病身

壹人 山伏

八人 拾八歳以上

合三拾五人

内

貳人 病身

壹人 山伏

八人 拾八歳以上

東目繰出御備組

高岡

申メ貳拾歳より五拾歳迄

一人數四百五拾四人

外ニ病者拾貳人

倉岡

一人數九拾三人

穆佐

一人數九拾八人

外二病者四人

綾

一人數百六拾七人

外二病者拾貳人

野尻

一人數貳百壹人

外二病者拾貳人

須木

一人數百八拾貳人

外二病者七人

小林

一人數三百拾三人

外二病者貳人

飯野

一人數百七拾六人

外二病者拾貳人

加久藤

一人數百貳拾貳人

外二病者六人

馬関田

一人數五拾七人

外二病者五人

諸県郡

吉田

一人數七拾六人

外二病者貳人

吉松

一人數百四拾人

外二病者拾三人

踊

外二病者拾五人

松山

一人数百三人

外二病者三人

内之浦

一人数百貳拾貳人

外二病者三人

大崎

一人数三百三拾七人

外二病者拾五人

牛根

一人数百五拾人

佐多

一人数百人

田代

一人数八拾壹人

始良

一人数九拾四人

百引

一人数百三拾八人

外二病者四人

高隈

一人数三拾貳人

恒吉

一人数九拾八人

外二病者壹人

小根占

一人数四百拾七人

大根占

一人数百四人

外二病者三人

大始良

一人数九拾五人

外二病者五人

鹿屋

一人數百三拾八人

外二病者四人

財部

一人數三百四拾四人

外二病者拾七人

国分

一人數八百九拾人

外二病者拾五人

福山

一人數貳百貳拾貳人

外二病者三人

曾於郡

一人數三百七拾九人

外二病者拾六人

敷根

一人數百五拾六人

外二病者四人

清水

一人數三百六拾貳人

外二病者五人

溝辺

一人數百貳拾人

外二病者九人

日当山

一人數百五拾八人

外二病者貳人

湯之尾

一人數九拾六人

外二病者貳人

馬越

一人數九拾七人

外二病者三人

本城

一人數百貳拾四人

外ニ病者四人

桜島

一人數五百貳人

外ニ病者八人

合郷數五拾ヶ郷

貳拾歳より五拾歳迄

人數老万百貳拾八人

病者三百九拾四人

(朱) 種子島

一人數

市成

一人數

垂水

一人數

花岡

一人數

新城

一人數

都城

一人數

合私領數六ヶ郷

貳拾歳より五拾歳迄

人數

西目繰出御備組

出水

申メ貳拾歳より五拾歳迄

一人數千百七拾貳人

外ニ病者拾七人

野田

一人數百五拾人

外ニ病者五人

高尾野

一人數三百三拾六人

外ニ病者三人

羽月

一人數百三拾九人

外二病者壹人

大口

一人數貳百七拾四人

外二病者拾壹人

高江

一人數貳百貳拾壹人

外二病者貳人

阿久根

一人數貳百五拾八人

外二病者拾四人

高城郡
高城

一人數七百拾六人

外二病者三拾貳人

水引

一人數貳百四拾八人

山野

一人數八拾貳人

隈之城

一人數四百拾貳人

外二病者拾三人

東郷

一人數三百九拾六人

外二病者貳拾六人

薩摩郡
山田

一人數百三人

外二病者壹人

串木野

一人數三百八人

外二病者壹人

市来

一人數五百五拾九人

外ニ病者四拾人

中郷

一人數六拾六人

百次

一人數八拾三人

伊集院

一人數三百九拾三人

外ニ病者拾壹人

郡山

一人數三百三拾四人

外ニ病者拾貳人

樋脇

一人數三百五人

外ニ病者貳拾八人

伊作

一人數五百六拾九人

外ニ病者拾貳人

田布施

一人數三百拾貳人

外ニ病者壹人

川辺

一人數三百七拾壹人

外ニ病者拾五人

加世田

一人數千百五拾三人

外ニ病者四拾九人

阿多

一人數貳百六拾八人

外ニ病者三人

川辺郡

山田

一人數貳百七拾五人

外ニ病者七人

谷山

一人數五百三拾六人

外二病者拾壹人

坊泊

一人數百拾九人

外二病者三人

顛娃

一人數三百七拾四人

外二病者貳拾三人

指宿

一人數百八拾壹人

外二病者七人

久志秋目

一人數百六拾六人

外二病者五人

山川

一人數六拾五人

蒲生

一人數六百拾九人

外二病者拾壹人

鹿兒島郡

吉田

一人數貳百三拾六人

外二病者貳人

山崎

一人數百貳拾壹人

外二病者五人

帖佐

一人數三百七拾三人

外二病者七人

始羅郡

山田

一人數貳百拾四人

外二病者七人

大村

一人數貳百六人

外二病者七人

鶴田

一人數百七拾四人

外二病者五人

曾木

一人數百五人

外二病者九人

上甌島

一人數五百拾人

外二病者拾人

下甌島

一人數三百五拾壹人

外二病者壹人

長島

一人數四百八拾七人

外二病者拾五人

合郷數四拾四ヶ郷

人數壹万四千三百三拾四人

病者四百貳拾六人

〔※〕平佐

一人數

入来

一人數

永吉

一人數

吉利

一人數

日置

一人數

喜入

一人數

今和泉

一人数

知覽

一人数

鹿籠

一人数

宮之城

一人数

重留

一人数

加治木

一人数

黒木

一人数

蘭牟田

一人数

佐志

一人数

合私領数拾五ヶ郷

貳拾歳より五拾歳迄

人数

一乗馬三百拾五疋

内

三拾六疋 御一門方

貳拾七疋 家名方

七拾貳疋 一所持以下
寄合并以上

三拾五疋 大目付以上

四拾五疋 大番頭
御小姓与番頭

八拾疋 小番新番

拾四疋 御小姓与

但 私領立乗馬除

一小番以下御小姓与以上貳百石以上

一高千五百石以下千石以上

小番 壹人

一同千石以下五百石以上

小番 五人

一同五百石以下貳百五拾石以上

小番 三拾九人

新番 貳人

御小姓与 三人

合五拾人

(付紙) 一 小番・新番・御小姓与 貳百五拾石以上

五拾人高頭ニ付馬賦

乘馬五拾疋之賦

但 本行小番・新番・御小姓与

現馬數九拾四疋之内、

右之五拾疋疋差引過、

四拾三疋

乘馬之儀は貳百五拾石ニ疋疋、五百石ニは

貳疋之賦候得共、五百石より又疋疋ニ而、

千石ニ疋疋、千五百石ニは三疋と、万石ニ

而も右之通賦上候御法ニ御座候、

横半帳原寸 縦一四・八糎 横二一・五糎 三〇枚

一三 真木和泉ノ山樞窩文稿

安民策其他

(表紙) 「山樞窩文稿」

安民策

人君之職、安民焉耳矣、安民在均之、均之者、先較国之大小与民之多寡、而後居農、々々而居士、々々而後居工与商、士農工商皆称其數、無過不及、乃制之産、使各能均、而仰足以事父母、俯足以畜妻子、然後国可治也、古之民四焉、曰士農工商、今之民有勢合而為一者、有形分而為十有四者、士之不土着、采地之所収、既減三分之二、而特米与大豆、固不可以之立計、乃輸之商、換貨幣以買諸物、農之貧也、土漸薄、税依旧、又為豪富所兼併、非佃作之可畜妻子、故去為商賈、世之奢侈也、器械不精好、

則不得備、故工亦去為商賈、於是乎都會之地人口始衆、而富商之利始饒、富商之饒、貨幣使之然、貨幣之貴、天下之勢始移、天子諸侯無之可賤、僕隸輿僮有之可貴、生可死、々可生、於是天下榮々唯貨幣之求、乃其士之猶士着者、農之勤耕耨者、工之有本業者、亦皆陰効商賈求貨幣、斯四者勢合為一者也、有祝、有医、有卜筮、有画工、有角抵、有倡優、有仏氏、々々之分為修驗、為六部、為普化僧、斯十者合前四者形分而為十有四者也、孟子曰、無恒産因無恒心、苟無恒心、放僻邪侈無不為已、前四者雖有恒産、心既無恒、後十者概皆無恒産、放僻自処、而莫非蠱惑乎平民者也、民既如此、則無怪其放僻邪侈也、今也天下有人民三千万口、墾田三百万町焉、人口宜以二五算之而居焉、四五之二十、為農二千万、二三之六、為兵六百万、四五之二十、為工二百万、亦四五之二十、為商二百万、以一戸五口率之、則士百二十万户、農四百万戸、工商各四十万户、其農戸受田五段、則二百万町、士之有采地而食其租者二十四万户、土着者九十六万户、其

土着者、戸受田一町、則為九十六万町、而剩田猶有四方町、而山沢海島之民、受田不滿五段而可也、然則農戸受田、稍多矣、士農既均、然後正百工之業、器械有規制品式、而不得造奢侈奇袤之物、商特通有亡、不得待時而高下其價、又設以米粟器物賣買之法、不必用貨幣、而貨幣唯助禿買、上下獻賜、人間贈遺不用之、乃其勢合為一者分為四、各就其産、而形分為十者皆歸於其所出、使各就其業、而遊惰廢事、狡猾感人者、誅而不赦、於是大定上之所取下之所納、特士自耕自食、農納租十一、役力年十日、又貢郷土之所出、工納其物、商納貨泉、皆十而二、而行儉禁奢、四民各安其分、養生喪死而無憾、然後設庠序學校、數孝悌忠信之教、相率躋仁壽之域矣、孔子曰、既庶矣富之、既富矣教之、今我民之庶、千古所希也、然貧矣、宜富之、々々在制其産而均之、故光四之、而使各就其産、々成而其心有恒、則教之易耳、故以四乎民為安民之本也、

人性善矣、雖善不由學則不明、故聖王審學制、蓋序序聲宗、為虞夏殷之學、周皆取之、增以成均璧雍、凡五學焉、謂之大學、門閭、次舍、鄉、州、黨、族、閭、各有學焉、謂之小學、門閭、天子之小學、卿大夫之子弟亦學焉、師氏保氏掌之、次舍各八、士之子弟學焉、宮正宮伯掌之、鄉黨之學謂之家塾、鄉人學焉、為長師者兼掌之、皆就其有事處而學之、猶習慣于官守也、特其大學習大禮大儀、年長學成、而後得、就而習之、而其教則三德六德六行六芸、幼則教之曲禮、漸長則教之樂舞、亦皆日用實事也、德熟才成、三年校比、試其高下、而後官之、漢已後學制不一、大抵固有大學、博士掌之、郡縣有鄉學、文學掌之、而其郡縣之學、廢置不時、多由刺史太守之好惡、故學者之業道者往往私教授、無定制也、其取士則以貢舉、有策問詩賦之課試、因以命官、學制既有古今之不同、取士亦不能無古今之異也、何者、以封建之與郡縣異制也、我古無文字之學、固無學校之設也、神世大典、口誦而傳之、朝廷禮樂、出入而習之、而卿大夫之子常為卿大夫、士之子常

為士、又有官世職如周禮稱氏者、而父以傳子、子以傳孫、授受其業、不敢失墜、

孝德天皇大革天下之制、教化禁令、判然一變、京師建大學、國建國學、皆置博士掌之、而取士亦於此、而國學先廢、京師之學亦岐焉、有淳和英學勸學等之設、而遂廢不振、其後復為封建之勢、然學制則闕然無聞、及慶元偃武天下復尚文、霸府建昌平齋、侯伯亦皆建學、然其學所謂大學之制、而無有小學之設也、又其教特誦經史習詩文而已、無有禮樂刑政之預世用者也、故士之出學者、概皆遲鈍迂濶、不解人事、不可命之以官也、蓋座學制之不審耳、今學弊有三焉、封建之世而効郡縣之學、一也、所學非所行、二也、議論甚高、而無益於人事、三也、今也卿大夫之子常為卿大夫、士之子常為士、而世祿矣、非嚴學制而教之、則頑愚不振、特有大學之制、而無小學出入習慣之教焉、可論育才養德哉、學者之事、非詩則文、非章句則記誦、講習討論、空積歲月、麗辭奇句、互相誇張、博聞強記為史者或有之、機務斡旋可為相將者、無一人矣、學

者特講性理、論議瑣屑、務為高妙、瞑目跌座、自謂知性、遂使聖人之道与老仏混而為一、聖云賢云、亦若彼真人菩薩然、而其他日官守時務、無一相闕、皆置之度外、有此三弊焉、不釐革之、而欲人才之成、不可得也、今夫学校之設、小更其制以為大學、而門閹次舍鄉州族閭、士人之所居、及其所有事、必建小学、而其官長兼掌之、所教則德行道芸、弓馬鎗劍、不岐人事、年長学成、入大学習之、且經其校比、而由才之大小以授官、又每村建社学、寓教于習書、使細民学焉、若有大才之出于此、則以不次入大學、如古之所謂凡民俊秀齒于天子元子者、学制如此、則庶称封建之制也矣、自洒掃應對之儀、至吉凶軍賓賀之礼、今日所行、正之以夫秩、又參伍于彼三代、述万世之大典、久米之舞、國風之歌、朝廷所秘、及蕃國所献之案、分之以風雅之意、又刪定律令格式、学者皆講之、能達教治戒令之旨、則庶所学合所行也矣、初学之徒、始学五十音反約、仮字書体、及説尔雅説文等之字書、得漸解文書、以次及大典律令、而有大志於文学者、始講六經、史子以徵之、

論孟以質之、能知聖人經綸之意、名分之蔽、心術事業必於斯也、學習如此、得其次第、而不躐等、則庶有益于人事也矣、夫学校者、人才成否之所係、世運隆替之所關、天下之務、莫急焉、而学問之道、修己治人之事而已、修己治人、礼樂是也、故学問莫先於礼樂焉、我之礼雖未嘗筆之書、而朝廷至民間、所行久矣、今筆之為大典、案亦正之、学者皆習之、則何異彼三代所教乎哉、学制能適封建之制、而舍虛文取実効、育才養德、行而不倦、則聖德賢才比々而出矣、雖人之性善、而不由学則不明、然学亦不能挾之、則有反害性、聖王審之者、蓋在於斯焉、

毀仏策

治天下之具二、謂之政教、而廢一則一不立、故二而一也、政、理財用者也、教、修人心者也、財用不理、則民飢寒、人心不修、則国乱亡、二者立而後天下可治也、故害乎其一者屏之、况害乎二者乎、蓋自外蕃入中国者、大概利害相半、然能挾其利而取之、故利天下者不亦寡矣、独仏氏者、無利而有害、而政教共受其害、屏之豈可有一日之猶預耶、

其為道也、以寂滅為樂、以人世為火宅、以君父為假合、其害道固不俟論也、今天下之寺觀四十八万余、一寺所費以米百當作五十石率之、則二千四百万石、而其徒皆不耕不織、而食梁衣錦者、熊沢氏謂以三分一貢天竺者非誣也、仏氏之立、而欲人心不惑、財用充實、雖堯舜為君、稷禹為臣、而難能之矣、況今世人心之惑、財用之絀、養此無益之異端、而使吾民二三乎心志、飢寒乎衣食、仁人之心、固非所忍也、雖然、仏氏之行、千三百年于茲矣、人心既狃而安之、一旦妄屏之、則必不免不測之禍矣、特當術以移之、漸以處之也、蓋先王以神道設教、故人心一定、唯知奉天敬神、今復其道、正祭祀之義、修食享之禮、祀典之慎、威秩無文、一村必建一社、々側設小祠數字、左右為列、如廟之有昭穆、而安民庶祖先之主于此、置神田社會儲穀以蠲凶荒賑無告、而大其社之堂、行礼屬民、必於此又制喪祭之禮、節文簡易、貴賤有等、使人勿慊、又每社建小学、自八歲至十五、学於此、掌祭祀者兼掌之、其教則曲礼威儀、以至國之憲法、又定由其所業所祭之神、假

令文学祭思兼神、兵家祭武雷神、医家大汝、農保食、工手置、從事于海者住吉、從事于山者山祇、婦人木花、皆有報本而祀之、祀其他為淫祀、々々有罰、諺曰、孩兒之心、白髮不變、今其教民庶者、特仏氏而已、其輪回之說、浹洽人心者無怪也、然奉天敬神之意、亦或不磨滅、因其不磨滅者、而立之規制、而養童子于小学、則所向先定、不得亦惑之也、迺諭一向僧為兵、其寺觀毀之、其區域墾之、寡者增之以田、多者減之收官、率為田三十石以授之、他宗之僧、諭之使其能守其所謂五戒、若破之則還俗歸于本貫、欲為兵者許之、処之一如一向僧、而自今已後特許無告者為僧、而其為僧者、国請大府、々々請京師、々々議而後許之、伝之度牒、授之公驗、国送之本山、々々受而雍髮衣緇、百日齋戒、登壇受戒謂之凡僧、迺始得領寺乞丐自養、不得与俗交、又其本山者、一宗一寺、其他併之、親王之為僧者、以其爵祿還俗、列于四王之後、行之三十年、乃其幼而就學者、年既四十矣、心志方定、不惑邪說、僧之遺者漸死、新為僧益寡、而猶遺者蓋千之一、

於是大發号令、異俗者尽還俗之、仏像経卷則使侯伯各聚其城下銷滅之、寸金尺木、勿象之者、名字之遺者亦改革之、一字片語、勿係之者、然而或有其徒桀黠者、誑誤良民、招集一方、劫略要之、此頑囂之甚者、固非天地之所容、罪在不宥、宜大砲一發擊之、雖其人衆、不足顧也、昔者禁邪蘇教也、奉其教者、不論深淺厚薄一懲之、而其徒知不可逃、聚島原城而反、於是幕府令九国諸侯、一掃鑿之、而後天下無一邪徒、義以斷之、功出于思慮之外蓋天祐之也、夫仁人之為事、察義之所在、則拳而不惑焉舜之誅四凶、湯武之伐桀紂、周公之殺管蔡、孔子之懲正卯、皆世人之所惑而不果、而五聖之所斷而不疑也、今我於仏、其害不徒四凶・管蔡之比也、屏之何可効尋常世人之事也、亦当以五聖者之心斷之也、

天命論

帝王禪代之際聽之天、而天不言焉、何以聽之、天人不遠、察之人、則天可知矣、人之所与、即天之所与也、書曰、天聰明、自我民聰明、而人何以与之、劳者与之、堯之時

四岳重黎皆賢、独舜徵五典、納于百揆、賓于四門、納于大麓、可謂劳矣、而天下之民仰之如天、堯乃讓之位、舜之時、皋陶稷禹皆賢、独禹敷土、決九川、距四海、手足胼胝、九載在外、可謂劳矣、舜曰、天之曆數在汝躬、舜復讓之位、禹欲讓之益、而禹子啓賢、天下之民皆婦啓、曰、吾君之子也、立啓焉、遂伝子孫、而至六百年之久、民尚不遺禹之劳也、劳者人与之、人与之而後天与之、聽之天者無他、察之人而已、我天日之嗣、天祖授之天、天孫受之地、固与彼五帝三王之禪代者異也、然而天位授受于無窮、而牢乎不動、而天人恒婦之者、亦未嘗不因列聖之劳也、古者天祖慮生民之不食則飢、不衣則寒、乃播穀織帛、為之田疇、為之宮室、建君置長、令相生養、天下受其資、其劳亦甚矣、尊之為天祖、神世之際、天造草昧、皇化未治、神武天皇勅乱賊入中州、封建以維天下、祭祀以施治教、天下大治、其劳亦甚矣、尊之為太祖、用明崇峻之際、仏氏漸隆、教化始衰、天智天皇奮起、誅賊臣、振天威、察国造之不可修、而換之以郡

鼎之制、製律令、審權量、天下又大治、其勞亦甚矣、尊之為中宗、雖天日之嗣與彼五帝三王之禪代者異也、勞者恒隆盛、而得顯名、天命人心、蓋於斯可觀矣、若夫武將之為霸、踏鋒鏑艱難之地、積父祖累世之功、使民免塗炭之苦、解倒懸之危、而後始得之、其勞固非一世、而不得一日之逸也、天心所歸、其機蓋不亦太異也、嗚呼、勞之於人大矣、不勞而收功者、天下無其理也矣、

老子論

老聃者、孔子之所問禮、而周之知禮者也、(付箋)「作字當移所謂之下如何」非作世之所謂、道德五千言者也、夫禮者、天之所秩、世道由之立、人倫由之安、故聖人之治莫光焉、五千言曰、禮者、忠信之薄、而亂之首、此非禮者之言也、非知禮者之言也、大凡人之情、好之則學之、々々則知之、好而非之、豈人情乎哉、蓋老聃好礼、好而學、々々而知之者也、豈亦為此非人情之事乎哉、孔子之於芸、雖特字之而不挾人、而蕞弘太師之徒皆深其道者、非非其道者也、豈亦孔子之聖而為問禮於非禮者乎哉、五千言之非老子之所作、微之孔子之所為、

則昭々乎明矣、夫五千言者、說虛無者之所祖、而作於莊周列禦寇已前、蓋長沮桀溺之徒假名老子而作之也、決非老聃之所作也、孔子嘗稱老子、比之龍、蓋老子視周室衰弊、默而隱于下位、其知命而安之、有人之不可及者、故孔子比之龍之潛而在淵也、非稱其微妙玄通不可測也、而此語亦特家語載之、不足深信矣、大抵異端之言、齊東野人之語多矣、此亦其所佞歟、

書銷鐘鑄兵官符後

詔勅官符者、盛衰興亡之可觀于天下後世者也、而有盛世而胚胎乎亡者、有衰世而萌芽乎興者、以其他日之成敗徵之、十不失一也、去年十二月、大政官下符五畿七道、曰、宜銷梵鐘以鑄炮銃、蓋頻年洋虜猖狂、天皇恭怒、欲痛膺懲之、迺有此勅焉、嗚呼、偉哉、昔朝廷之盛、有天災地妖寇賊之警、則修護摩、行灌頂、轉誑般若經于官厅、供養仏如來于紫宸、是而已、無有一及人事者、唯恐事仏之不至也、後世王綱解紐、豪傑起而攘其權者、蓋兆于此焉、鎌倉之開府也、能務人事之宜務、

於是所謂 詔勅官符不及天下、々々特知有府之下文者而已、其後二百年

元弘帝滅鎌倉、天下復見 詔勅官符、而其言不務人事之所務、未出数十年、政復歸霸府、實五百年于茲、而併前後則殆七百年矣、昔者事仏之至、其造仏器之慎可知也、今断然銷之以鑄兵、而特以修人事為務、其所見之高遠卑近、固亡論耳、而七百年而有此官符、而有此言、徵之他日、則其成敗果如何哉、

誑孫子上

用兵者莫不宗孫子也、論兵者亦莫不宗孫子也、曰、兵莫尚焉、余謂孫子之言兵、霸者之兵已、何足貴之也、夫兵者政也、所以正不正也、已正而後正人、焉得以詐乎、王者之治天下以德、雖然、億兆之民遐陬之人、或有不沾化而阻命者、一民不沾化、輒誤數民、一人阻命、輒誤一方、於是乎拳兵征之、服而後止、然而兵不可不預設也、不可不素練也、故周官有司馬、謂之政官、掌六鄉六遂之兵、而有制軍之法、四時田獵、因以肆之、而閱其軍實、其法

皆因內政、相保相受、相及相共、積伍至軍、大小聯屬、猶肩之使臂、々之使指也、所謂分數形名之嚴且明可知矣、王道之行也、夫人而知義方、其為吏者皆賢能、而人之所素服、師之者則三公、々々皆王者之師伝、非聖則賢、其德固天下之所具胆也、其受命征討、士卒之所向、旌旗之所指、氣既旺之、人既屈之、所謂如決積水於千仞之溪者、誰能敵之、故曰無敵天下、孫子曰、無迎正々之旗堂々之陣、當時世道衰弊、或有如此者、孫子避之、況則王者之兵之正々堂々、孫子之詭詐因無所施也、或曰、然則宋襄公之与楚戰而敗者如何、曰、襄公求霸而不成者、非復齊桓普之比、其平生所為、無一足云、而臨戰遽君子自勉、何弗思之甚也、而其称君子者、非篤信之也、欲假之以服人也、可謂迂矣、楚人之強且暴、不戰則已矣、苟与之戰、則智以策之、詭以致之、拔其城、取其國、如具之所為而可也、此襄公之所求也、而以所不求從所求、其敗宜矣、襄公霸者之兵且不知、焉知王者之兵哉、世以襄公之故疑王者之兵謬也、

誑孫子下

王道衰而後霸者起，々々々而後兵家者之說起、而孫武子其巨擘也、王者非無兵也、用以助德、霸者假用以行兵、霸之衰也、唯務衆其人民広其土地、於是乎孫武子之說行矣、視我土之侵削、不得獨不用兵也、視我卒之敗績、不得獨不講兵也、大而公侯、小而卿大夫、苟有土地人民者皆然、遂至天下莫不用兵者、莫不講兵者也、夫起軍、其民咨嗟、其費広大、固不仁之事、况兇十萬之衆、以趨千里之遠、而不知敵之不可以擊、亦不知地形之不可以戰、而妄合兵、則卒不敗者身亡、國不滅者主辱、不仁之甚、不可以不察也、若速戰而取勝、誅其首惡、赦其誑誤、使彼是之民得安堵、則可亦謂仁矣、夫德者經也、兵者變也、処變者雖其跡涉詐術、其心期安民、則無害于義、湯武之用兵、其誓命曰、不從誓言、予則殛戮汝曰、爾所弗勛、其于尔躬有戮、其敵厲如此、固与平生誥命不同也、以処變之道不得不然也、德既不能服之、兵亦不能勝之者、仁者之所不為、然則孫子之說亦能講之、而用之揆乱、則有

益于民亦大矣、而如其明分數形名審度量數稱、雖王者之兵、蓋亦不出於此焉、惟其用之顧心術如何耳、

山梔窩記

(付巻)
一允當能使讀者惻、然予歲旦作暗合、罹害由來長舌人、英雄

成事在精神、今朝愛見寒梅樹、默笑階前亦報春」

余見逐之明年、作亭於大鳥居氏之圃之北隅、々々有水、曰下川、々有島、方二尋許、草木暢茂、大則予樟、小則竹箭、而檀桃菊萩、実者、華者、皆蕃焉、又有山梔、当亭之軒、因取以命亭、樹甚多矣、而獨取一小山梔者何也、山梔訓無口、古歌多取鉗口而不言世事、余之得罪、多言之故耳、今作亭而山梔適當軒、似有非偶然者也、豈得取他以命亭哉、伝曰、大上立德、其次立功、其次立言、余今見逐而在于此、家人且不得面、況其他乎、不得立德与功固矣、而尽日間暇、步無地、寢無睡、誑古之書、想古之人、而言古之道、於此為時矣、孔子不遇時、退修詩書、孟子不得君、亦退与万章之徒著書、蓋默于一時而言于万世者也、然則誑古之書、想古之人、而言古之道、惟在心

与筆、雖無口而可也、為山樞窩之記、

涼台記

謫居之北、隔水而隆然地崇、鬱然樹茂、有如山之聳者焉、
延寿王院南隅之弁地也、予甚疾暑、每夏日百方求所以避
之者、而意注于此久矣、已未之夏、欲墾闢之、囑之子弟、
々々皆負鋏執鎌而來、曰如何、予以杖指示、方三間許、
迺芟荆榛、刷樹根、去石底土、四至列礫、小竹為樊、忽
焉一小台成、余乃安榻二三、与子弟踞之、仰無枝葉之洩
日、俯有水声之生風、景色意趣、皆過于所旧慮、乃命之
曰涼台、予為僂人、投之熱土者、欲假地力而殺之也、然
予之来于此、身体益壯、蓋天未棄也、而地亦与此清涼、
意窃自負、因為之記、

記事

北竺侯好西洋学、牙兵用彼陣法、戊午冬十月、請長崎来
泊阿蘭夷視之、夷乃以蒸氣船入博多、館于此、其明、夷
賽宰府祠、侯借馬、夷用其鞍而騎、蓋五騎矣、到祠之三
橋、見童子鬻熬麦、買而餌池魚、々無一啗之、賽焉不拜、

徒縱觀耳、憩市樓、有饜焉、還可一里、一夷墮馬、而病
甚、上船而斃、其明、肆陣於筥崎祠前、侯窃泣焉、方肆、
風遽起、海濤怒号、砂石迸飛、兵皆俛且隕而立、僅得一
肆而已、初侯之招夷、人心大不服、然侯意益銳、遂有期
焉、先期數日、海口頓為陰洲、自志賀島之西至能古島之
北、相距二里、一脈聯統、状如長隄、經三十許日而自亡、
人甚異之、吏告之、侯不以為意、然而期則有故、如此者
三、今之招者、蓋第四期也、可謂奇矣、

今天皇甚疾洋虜之侵侮、併疾洋学、屢遣使伊勢神宮攘之、
又頒幣于諸社、此其

精、誠所感、而神明見其効者耶、而

聖意之所勞、特天下億兆之故耳、然則為士大夫者焉得不
奮敵愾之志哉、況可喜其所 疾者乎哉、嗟夫、池魚且不
啗彼餌也、人而可無恥乎、

〔付箋〕 此一首 戎狄破波玄海灘 細戈不奮暮風寒 菅公威德長城

窟 魂魄猶存太宰官」

自勵文

癸丑六月、亞米利加入浦賀、請和親交易、幕府諭以國禁、令趣長崎、不聽、遂呈其國書于此、先是 皇宮災、七月、彗星出于西方、此月、魯西亞入長崎、請和親交易、九月、魯西亞闖入于浪華、十二月、魯西亞復入長崎、甲寅正月、亞米利加復入浦賀請報、幕府乃許其請、長崎之外、以下田宮館為來泊処、築館、八月、英吉利入長崎請交易、乃許之准亞米利加、許魯西亞者亦如之、十一月、五畿東海南海西海地大震海溢、浪華以東最甚、死者不知其幾許也、乙卯十月、關東地大震海溢、江戶最甚、死者亦不知其幾許也、丁巳十月、亞米利加入下田、請弘交易開數港置其官吏于江戶、幕府引其使見之大城、於是 天朝譴幕府、列侯亦言之、自天祖開國、

太祖創業、万斯年于此、文德洽乎天下、武威輝乎海外、上之

神功之征三韓、下之豐公之討朱明、又若彼任那勃海肅慎蝦夷・琉球、或奉歲貢、或獻版圖、莫不懷德服威也、雖

或有女直胡元入寇皆授首、而得還無幾許也、偉哉此所以稱細乎千足國也、今也西洋諸國猖獗殊甚、東西通出、來往接武、有恐哄觀兵者、有諛辭陷利者、蓋以為必得其所欲而後已也、幕府不悟之、且許其請、而彼之請事件愈多、許一又一、自小及大、每出於思慮之外、由此觀之、欲滿清乎我、又印度乎我、遂哈囉乎我者、昭々如懸鏡而視矣、夫天變地妖之於國、欲其君相之悟而自警耳、故其變小則災亦小、變大則災亦大、彗星之災、光芒數尋、殺氣凜々、觀之胆寒、地震海溢之災、山川鳴動、鳥殞獸仆、殆如天地折缺、而後止者也、豈有其變之大至天下輒覆人物滅亡者欤、使彼戎虜縱所欲、則必當奴隸乎我君臣、禽獸乎我人民、壞神明之祠廟、斃祖先之墳墓矣、天下既如此、救之固非尊卑賢不肖之所宜論也、智者致其謀、勇者致其力、富者致其財、同心戮力、斃而後已矣、若夫人之失火而救之者、雖路人闔門之奧器械之貴、触手而出之、救急之道然也、今戎慮之於我為國之大仇、其變固非女直胡元之比也、然而居則憤 幕府之不振、惡廟謀之悞怯、

乃問其策、則曰我無位、雖有策如之何、々弗思之甚也、吾人自是安政間人民之一人矣、自天地鬼神後世異邦親之、則無尊卑賢不肖之異、焉得以無位避其責哉、然則如之何而可也、曰、智者為其謀、勇者養其力、富者持其財、各從其所有、自奮自勵、期以必死、以投機會耳矣、

自慰文

屈伸者、天地之常也、伸者必屈、々者必伸、然而屈不極則不能伸、々不極不能屈、大冬之寒、雖襲絮裘、不能溫也、其極也、漸溫漸暖、以至大夏之暑、當此時、雖輕羅疎布之薄、不能冷也、其極也、漸涼漸冷、復至其寒、易曰、消息盈虛、天行也、謂物極則反也、桀紂之惡既甚矣、尚未失為君也、迨囚殷湯周文誅奄逢比于、天下始始夫以視之、其惡極也、當此時、雖非湯武、必革其命矣、況殷周有聖主賢臣乎、蓋桀紂之意以為不如此、則不足威服乎天下也、此適足為湯武驅之耳、彼墨虜之暴、壞我成法、退我賢良、傷我藩籬之心、鉗我有志之口、遂煽膺風於廟堂之上、誕肆侮慢、無所不至、彼亦以為不如此則不

足庄倒乎我也欤、此亦適足激怒乎天下也、今較其惡、則似未極也、然而以夷侵華、以暴凌仁、所謂眇能視跛能履者、既浮于桀紂、以此觀之、則其自殞越以取傾覆、必在于近矣、秦之酷、漢高資以起、莽之篡、光武資以奮、彼惡足我資以興也、若夫鬼神之靈、於斯為盛、神后之海潮、弘安之颶風、豈謂今日無之耶、焉知非欲竣、彼惡之極而後蹈之乎、又焉知非欲与彼而取之乎、

角抵說

有角抵夫焉、長不及余寸許、不足以為偉丈夫矣、其升場而相角也、輕迅儻狡、若飛若躍、若虎若龍、若鷹鴞然、余問之曰、汝中人耳、何以得之、曰、我始為此、無人不晒者、乃入上国、以肆業九年矣、夙肆夜思、食不求飽、衣不求煖、禁飲絕色、凡人之所為一則我百之、十則我千之、今而無吾党足懼者也、嗚呼、角抵夫之多力、其躬之力也、非求乎躬之外者也、勉而至焉者也、夫仁義也者性也、聖人率性者也、人之學聖復其性耳、亦何求乎性之外者也耶、而學馬不成者、不勉也耳、

候事計ニ御座候、

二言 菊池源吾ヨリ税所、大久保へ

尚々野生ニは不埒之次第にて正月二日男子を設け申候、御笑可被下候、

春暖罷成候処、弥以御安康御起居之段奉欣賀候、随而小弟無異罷在申候間、乍憚御安慮可被下候、陳ハ天下之形勢益衰弱ニ成立候由、実ニ歎息之至ニ御座候、

京師之御様子難有次第、感涙袖をひたし候儀ニ御座候、昨日ハ(并伊直宛)斬姦之一回忌ニ而、早天より焼酎吞方にて、終

日醉居申候、扱野生一条ニ付而は、始終御配慮被成下、何共難有御厚礼申上候、逆も当年中ニは被召婦候義も

六ヶ數明め居申候、一崩崩立候ハ、如何可有御座候哉、無此上御手を被為懸候儀、身ニ余り候事御座候、

少しも御手之延不申処、色々考候儀無御座候間、左様御納得可被下候、当分ハ余程有志之方々出来候由、大

慶之事ニ御座候、私ニは頓と島人ニ成切り、心を苦め

一喜三左衛門様江申上候、順恵丸船頭方より大ッ(豆)老俵寄

替相頼候処、受合候而相究候間、証文ハ貴兄江宛差遣

候付、愚弟江申付、右之代金早々相渡候様御願申上候、

愚弟方江も委敷申遣候間、尚又御達可被下候、豚肉少

々差遣候間、御寄合御開可被下候、

一正助様御方より煙草過分御送被下、別而難有、頓と引

切居候処、誠ニ珍珠仕、御厚礼申上候、

一武(有村)二様、金之進様、田辺行と申人江細々御頼被下候儀、

別而難有御厚礼申上候、恐々謹言、

菊池源吾

三月四日

税所喜三左衛門様

大久保 正助様

文書原寸 縦一七・七種 横七九・二種

一〇三 南貞助書翰 宛名不明

江戸薩邸自焼ノ秘策

(包紙ウラ書)

南貞助

直披

秘計

一 私を始追々詰人数日を替不目立様罷下候而、定府之面々只今通ニ而岩元等頭取ニ而罷在、夫等ニハ皆共御宛行被仰付置、応機変渋谷御屋敷江相込、依時宜此御場所は一統灰塵たらしむ事一策也、

但大奥女中共ニ茂込場同断、

一 御国家を奉忘却、差寄たる死を遂候事如何之至候付、尽し候丈ケハ蹈止り、機変に應し一統焼払、其勢ニ引取、於国元命を待とも可然欤一策也、

右之二策は機変ニ従ひ行候積御座候、乍併第一之策は事前ニ不相成内可然相考申候、若其儀可然との事ニ御座候ハ、私ニは御内用ニ而被差下趣を以取扱仕度、

無左候得は、人々動揺も難計御座候、其已下諸役場之処は如何様共所置之取扱出来可申御座候、此義極御内々申上候、何分御答無之内動不申積御座候、然共只今之世態何時か変事難計御座候間、其節は臨機応変見切可申候、此段秘事策略備貴覽候間、宜御披見、其后は火事願上候、以上、

三月十八日

文書原寸 縦一六種 横七〇・七種 包紙原寸 縦一七・二種 横二二種

〇二六 久光公藩政輔佐ノ件

〇二七 久光公宗家へ復帰ノ件

〇二八 大島木場伝内ヨリ堀仲左衛門

大島ニ於ケル苛政 菊池源吾ノ消息 太守茂久公参覲延期ノ件

一筆致啓上候、酷暑之御弥以御壮栄被成御勤、大喜之至

奉存候、随而私海上平安、三月二日着島、大元氣相動候間、御放念可被下候、其後御地何等之風情御座候哉、島方之不風雅、御賢察外ニ而、中／＼執兼候事のミ、御憐察可被下候、菊池ハ追々相見得、大元氣御座候、是のミ愉快ニ而、取会之時ハ大方ハ肥州などの事ニ御座候、先日も泊り居られ候処、小児病氣申来り、取物も不取敢帰旅、随分難症ながら先取止候半との一左右有之候、憂愁中之物忘草とも可相成ニ、とふそ平快候へかしと祈居申候、出立時分ハ御見舞被下、御礼申上候、其後一会の御約束も粗申上置候得共、混雜中色々差合ニ而、其後相調不申候、腫物も于今平愈不致、矢張禁食中ニ御座候、誠にしぶとき症ニ御座候、其御承候銅山之事、早速船中ニ而も相良ト咄合候処、登殿被招呼申上候趣有之候処、至極御同意ニ而、此涯太粧ニ取起候事ハ遠慮可致仕合有之由ニ而、着島後銅山見分も、拙者廻島留主被相企、些外ニ被致候気味有之候間、拙者ニも其考ニ而、儀論旁太体いたし置時宜御座候間、左様御心得置可被下候、乍然源吾生

計之為ニも可相成、銅山江引込候手段有之、同人江打合候処、随分掛合可相施との事ゆへ仕合之事ト存申候、島方之儀ハ代官権甚しく見聞役たと申言ハ、容易ニ立ものニ無之候、大島之苛政誠ニ以愁眉之至、唯砂糖増行／＼といふ事のミにて、当年ハ都合克、九百万余の出来相及候処、又其上ニ作り出さむの心構ニ而、つまる所へとふなるものかとそんし居事ニ候、此弊ハ中山三島方ト有之間ハ、いよ／＼ふかく可相成ト、源吾ト咄合事ニ而候、内実之事、源吾より細々承り、歎息いたし居候事ニ候、来春ハ上様御参府之御模様御座候由、右ハ源吾より市来江申越趣有之候間、おのつから御聞取可被成、とふそや此節迄ハ一寸延し御計策有之度ものと、乍不及奉祈事ニ候、幕の威権見落不申候ハ、納得之筈候間、長崎・琉球等の守衛御在国ニ而御勤被成候様、幕より申付相成候様の手段ハ無之ものニや、余策ハ菊地より申上候通ニ而候、江戸表都合向ハ、貴慮御随分そんし申事ニ而候、先ハ右かた／＼申上度、如此御座候、尚期后音候、恐惶謹言、

五月廿二日

木場伝内

堀仲左衛門様

人々御中

文書原寸 縦一七・八糎 横一〇六・八糎

二〇 高輪東禅寺襲撃彼我死傷者姓名書

五月廿八日夜四ツ半時比、高輪東禅寺異人旅宿へ浪人狼

藉名前

有馬平弥

岡元富次郎

森 幸之助

榊 鉞次郎

森 平蔵

大川金次郎

矢沢 団蔵

有川主馬之介

渡辺 剛蔵

手負於品川宿自殺

山崎鉄之助

手負同所自殺

小堀 定吉

ノ 拾四人

中村 貞助

右之内貞助・鉄之助兩人自殺、鉞次郎・金次郎生捕、

外三人打留名前不知、都合七人、

右之節出会打留候付、手疵受候、御旗本其外名前左之

通、

小普請組

福鹿野河内守

大貫増播

新御番

三好山城守組熊之助惣領

河野虎吉

廿才

御小姓組

齊藤撰津守組多宮弟

松平久米次郎

小普請組

肩少々

野瀬惣之助組亥之助俵

右手

中尾祐次郎
十八才

肩腰

夷人屋敷門番
豐吉
三十二才

右肩突疵

同岡田將監組
甚太郎金助弟
北条兼太郎
廿八才

左額右手四ヶ所左右肩

同表門番人
倉田勝五郎
廿七才

右足一ヶ所外薄手

同戸田民部組
於菟次郎惣領
今井喜十郎
廿五才

下頤

右同孫兵衛
松平時之助家来
川部助十郎
廿六才

右額ニ半程右手背打腹

小十人頭
日野權右衛門組
雄五郎養子
天野岩次郎
廿才

左額

同
上原瀧之助
廿二才

眼并皆突疵重手

大御番頭
近藤遠江守同心
吉左衛門倅
江幡吉平

但不残薄手之由、

中宿

英夷二人

右手

御書院番
曾我若狭守組
源次郎弟
柘植鉄吉
三十才

一人八肩
一人八腕

鼻少々

小普請組
岩瀬内記惣領
深津弥太郎

右文久元年辛酉五月廿八日
文書原寸 縦一四・二種 横一・二八種

二〇 長井雅楽ヨリ朝廷ニ奉レル航海遠略策

(編纂米書)
「辛酉年何人ノ上書欵」

近年黠夷猖獗仕り候ニ付 御国威日ヲ逐テ逡巡、当今ニ至り候テハ衰微漸ク甚タシク

皇国未曾有ノ御大難ハ縷述ニ及ハス候、斯ル時勢ニ立至り候儀、由テ来ル所之レ有リ、數百年ノ太平、武道地ニ墜チ武備廢弛仕り候ヨリ、一旦黠夷ノ虚喝ニ驚キ、輕易ニ条約ヲ結ヒ、終ニ今日ニ至り候コト口惜キ次第ニ候ヘ共、是レ以テ太平ノ余弊今更論弁仕り候共其益之レ無ク、此余ハ武備ヲ廢レタルニ興シ、国難ヲ未タ覆ラサルニ救ヒ候儀当今ノ急務ニ候ヘハ、上

朝廷 幕府ヲ始メ奉リ、下モ士庶人ニ至り候迄、精神ヲ凝シ、興救ノ策ヲ求メ候ハ同一般ニ候ヘトモ、人心ハ面ノ如ク、策略一途ニ出テ申サス、或ハ鎖國ノ論ヲ旨トシ、或ハ航海ノ議ヲ唱ヘ、自然人心ノ不和ヲ生シ、時日ヲ空手ニ費シ候中チ衰微日ヲ逐テ加ハリ、只今ノ形勢ニ候ヘハ、終ニ黠夷ノ術中ニ陥リ申ス可キモ計リ難ク、箇様人

心ノ不和ヲ生シ候根源ヲ尋ネ候ヘハ 関東御抛ナキ御次第之レ有リ候ヨシニテ、

叡慮御決定モ之レ無キ内、和親交易ノ御条約之レ有リ候由ニ付、

逆鱗一方ナラス 関東ノ御処置御取糺シ、条約御破壊遊ハサレ度トノ御事ニ候ヘトモ 関東ニ於テハ一旦外国ヘ対シ御条約相濟候儀ヲ無筋ニ御破壊相成候テハ、忽チ戰爭ノ門ヲ開キ、即今莫大ノ御国難ニ立至リ、且數百年太平鼓腹ノ武士ヲ以テ于城ニ御当テ成サレ候儀御心許無ク思召候哉、速ニ御奉命トモ之レ無ク、因循無断今日ニ至リ、判然タル御処置之レ無ク、斯ル迫切ノ時節右様無断ニ時日ヲ費シ候テハ、弥増シ頑覆ニ迫り候事ハ凡庸浅智ノ者ニテトモ頓ニ識得仕り候ヘハ、況乎群才富智ノ 関東御洞見之レ無キ筋ハ之レ有ル間敷、仮令御疎漏之レ有リ候トモ言路塞り候ト申スニテモ之レ無ク、定テ忠諫仕り候者モ之レ有ル可ク、然ルニ前段ノ通り御決意ノ御処置之レ無キハ、鎖國ノ御決定之レ有リ候ヘハ即今莫大ノ

御国難ヲ生シ、又航海ハ御決定之レ有リ候ヘハ弥ヤ増シ

逆鱗甚敷 御国内如何様ノ異変出来モ計リ難ク、御国内

異変出来仕リ候テハ所謂鵜蚌ノ憂ヒ眼前ノ事ト御遠慮之

レ有リ、態ト無断ニ時宜ヲ御待チ成サレ候、共ニ之レ有

ル可ク訝カシク存シ奉リ候、元来黠夷ト同等ノ和親ヲ結

ヒ候儀、開国以来未曾有ノ事ニ候ヘハ、仮令御抛無キ程

ノ御次第之レ有リ候共同トカ御申シ宥メ置カセラレ、第

一

叡慮御伺、且ツ後來ノ御処置ヲモ予メ御定メ置キ、其余

ニテ兎モ角モ御沙汰之レ有ル可キ御事ニ候所、左ハ之レ

無ク、輕易 御国体ヲ御動シ成サレ候儀、素ヨリ如何ノ

御事故ヘ

逆鱗遊ハサレ候モ御尤千万ニテ、仮令御敵糺、仰出サレ

候トモ、聊カ御申シ訳之レナキ程ノ御事柄ニ候ヘ共、深

遠ク

叡慮既往御咎メ無ク今日ニ至リ候モ亦 御国内異儀ヲ生

シ候テハ御大事ト

思召候而已ニ之レ有ル可ク、実ニ寛大不測ノ

叡慮、蒼生ノ幸甚之レニ過キス、有リ難キ御事ニ存シ奉

リ候ヘハ、万死ヲ顧リミス直言仕リ候、恐レナカラ九重

深宮ノ

玉座時論悉ク

叡聞ニ達セス、且ツ一時慷慨ノ説

鞏毅ノ下ニ輻湊仕リ候ヲ以テ、天下ノ公論万全ノ策ト

聞シ召シ上ケラレ候哉、頻リニ破約攘夷ヲ以テ 関東ヘ

仰出サレ候由、然レトモ当今ニ至リ破約攘夷ト申ス儀、時

勢事理ヲ深察仕リ候者ハ決シテ落着仕ラサル事ニテ、唯

当時慷慨ト唱ヘ候血氣ノ輩ノミ愉快ニ存シ奉ル可ク候、

其子細ハ只今破約ト相成リ候ヘハ黠夷共決シテ承伏ハ仕

ル間敷、戦争ニ相成リ申ス可ク候、戦争ヲ忌ミ候儀ハ更

ニ之レ無ク候ヘ共、戦ハ国ノ大事存亡ノ係ル所ニ候ヘハ、

深謀遠慮之レ無ク輕易ニ発ス可キ事ニ之レ無ク候、夫レ

戦ハント欲スル者ハ先ツ其利害曲直ヲ明ニ察シ、直利我

レニ在ツテ而後戦ヒ候事、所謂ル勝算ニテ、古今明将ノ

(名カ)

重ンスル所ニ候、曲害我ニ在レ共憤懣ニ堪ヘス、或ハ一時ノ血氣ニ誘ハレ無策ノ戦ヲ発シ敗亡ニ至リ候者、古来歴々數ヘ尽シ難ク候、然ルニ当今 關東ニ於テ御条約相濟候儀

京都ニハ一円御不納得ノ御事ニ候ヘハ 關東ニテ容易ニ御国体ヲ御動シトノ趣ヲ以テ、仮令御取札之レ有リ候共御国内而已ノ御事ニテ、外夷ヘ対シ御口実ニハ相成ル間敷、其故ハ

皇國三百年來 御国内ノ御政道ハ 關東ヘ御委任ト相見ヘ、外国ヘ対シ候テノ御駆引モ悉皆 關東ヨリ 仰セ出サレ候ヘハ、外夷共 關東ヲハ

皇國ノ政府ト心得候ハ尤ノ事ニテ、其政府ニテ条約調印相濟シ候ヘハ同盟ノ國ト心得候事は亦余義無キコトニ候然ルニ当度ニ限リ

天朝御不納得ノ筋ヲ以テ卒然約ヲ破リ、盟ニ背キ候ハ、彼レ各國三百年來ノ例ヲ申シ立テ、不信ノ名ヲ以テ

皇國ヘ与ヘンコト必然ニ候、且ツ 關東ハ武臣ノ棟梁ニ

候所、外夷ヘ面目ヲ失ヒ浩然ノ氣ヲ餓シ候テハ、自然有事時ノ御用ニ相立ツ間敷、是レ我ニ曲ヲ取り彼レニ直ヲ与フルノ拙策ニシテ智者ノ取ラサル所ニ候、扱又彼レハ航海ニ熟シ、利器ヲ以テ數万里ノ海路ヲ不日ニ駛行シ、且ツ數十年航海ヲ業ト仕リ候国柄ニ候ヘハ船數ニ富ミ、殊ニ此十年以來ハ

皇國ノ海路ニ熟シ候コト故ヘ、戰爭ト相成リ候ハ、要津ニ出沒シ府城ヲ剽掠仕リ候ハ必然ニ候、左候時ハ海國ハ申スニ及ハス、海路不通ノ国迄モ、隣國騷動ニ及ヒ候ハ、自國警衛ノ外他事之レ無ク候ハン、仮ニ九州ヲ以テ警ヘ候ヘハ、纔カ四五艘ノ軍艦ヲ以テ朝夕ニハ東シ、夕ニハ西シ、或ハ海浜ニ大砲ヲ発シ、或ハ海辺ノ民屋ヲ放火シ、淺ク働ヒテ輕ク引キ候ハ、陸路ノ將士奔命ニ勞レ、我ニ追討ツ可キ軍艦乏シク、切齒扼腕ノミニテ、手ヲ束ネ彼レニ致サル、ノ外、定策之レ無ク、恐クハ九州數百万ノ士民僅々四五船ノ夷艦ニ羈縻セラレ、心ハ弥武ニ候トモ自國ノ騷動差置キ難ク、只一人モ赤間關ヲ渡テ東ニスルコト

決シテ相成ル間敷、秦鏡ヲ照シテ見ルヨリモ明ラカニ候、六十余州ノ中ニ於テ海路不通ノ國トテハ纒カ四ノ一二足リ申フサス、然ルニ四ノ三余夷艦ノ害ヲ受ケ候ハ、纒カ残リノ國々モ唇亡齒寒ノ戒ヲ守リ、隣國ヲ救ヒ候位ヒハ兎モ角モ、兵ヲ遠國ヘ遣シ候儀ハ決シテ相成ル間敷、京師ハ素ヨリ日本ノ頭目ニ候ヘハ、四支ノ國々拳テ保護仕リ候ハ理ノ当然ニ候ヘトモ、四支病ヲ受ケ候ヘハ頭目ノ用ヲ為スコト能ハス、是レ亦自然ノ勢ニ候、是黠夷ノ胸算ニテ、彼レ恒言ニ日本ハ二三千ノ兵ヲ以テ陥ル可シトノ妄説由テ起ル所ニ候、斯ル時勢ニ相成リ候ハ、京師ノ擁護実ニ心許無ク、万一京師ヲ黠夷ノ蹄ニ穢サレ候儀トモ之レ有リ候テハ、六十余州戰ハスシテ彼レカ為ニ屈辱セラレンコト、思フモ忌々シキコトニ候、尚又數百年太平鼓腹ノ武士ヲ以テ急卒無策ニ争端ヲ発キ候ハ、其利害三歳ノ童モ弁ス可ク候、然レハ曲害ハ我ニ在ツテ直利ハ彼レニ在リ、是ヲ以テ時勢事理ヲ深察仕リ候者ノ軽々シク戰爭ヲ好ミ申サル所

ニ候、扱又鎖國ト申ス儀ハ三百年來ノ御掟ニテ、島原一乱後別シテ蔽重仰セ付ラレ候御事ニテ、其以前ハ夷人共内地ヘ滞留差免サレ、且ツ

天朝御隆盛ノ時ハ

京師ヘ鴻臚館建テ置レ候コトモ之レ有ル由ニ候ヘハ全ク

皇國ノ御旧法ト申スニテモ之レ無ク候ハン、

伊勢神宮ノ御誓宣ニ天日ノ照臨スル所ハ

皇化ヲ布キ及シ賜フ可シトノ御事ノ由ニ候ヘハ、夜國氷

海ハ兎モ角モ、天日ノ照臨ナン賜ヘル所ハ悉ク知シ召ス

可キ御事ニテ、鎖國ナト申ス儀ハ決シテ

神慮ニ相叶ハス、人ノ子孫タル者、上下トナク其祖先ノ

志ヲ継ギ、事ヲ述ルヲ以テ孝ト仕リ候儀ニテ、

往昔

神后三韓ヲ征シ賜ヒ候モ、全ク

神祖ノ思召ヲ繼セ賜ヘル御事ニテ、莫大ノ御大孝ト今以

テ称シ奉リ候、中古ハ未タ海外ノ事明細ナラス候ヘハ、

三韓ノ外若干ノ國アルコトヲ

聞シ召シ賜ハス、若シ

聞シ召シ賜ハ、御征伐シ韓ニテ御止リハ之レ有ル間敷
想像奉リ候、然ルニ当今五大洲若干ノ国アルコトヲ

聞シ召ス而已ナラス、彼ヨリ憚ラス

皇国へ来リ、剩へ

皇威ヲ蔑ニシ奉ルヲ鎖国ニテ御禦キ遊ハサレンコト、

神祖ノ御誓宣ニ御戻リニ当リ

神慮ノ程モ計リ難ク、誠ニ恐レ入り奉リ候、仮令鎖国ノ
議ヲ主張仕リ候トモ、守ル者ハ攻ルノ勢ヒ之レ有リ候テ、
能ク守リ候訳ニ候へハ、鎖国仕リ候トモ攻ルノ勢ヒハ決
シテ欠キ難ク候、徒ツラニ海岸險峻ヲタノミ鎖国仕リ候
テハ鎖国ハ万々覺束無ク候、然レハ當時ニ於テ攻取ノ勢
ヲ張候儀第一御急務ト存シ奉リ候へハ、仰キ願クハ
神祖ノ思召ヲ継セ賜ヒ、鎖国ノ
勅慮思召シ替ラレ

皇威海外ニ振ヒ、五大洲ノ貢キ悉ク

皇国へ捧ケ来ラスハ赦サストノ御国是一旦立セ賜ハ、

禍ヲ転シテ福ト為シ、忽チ黠夷ノ虚喝ヲ抑へ

皇威海外ニ振ヒ候期モ亦遠カラスト存シ奉リ候、然レ共
太平ノ余、即今

神后攻取ノ御跡ヲ蹈ミ候ハンコト、是又下策ニ出申ス可

ク候へハ、急速ニ航海御開キ、渠カ巢穴ヲサクリ、黠夷

ノ恐ル、ニ足ラサルコトヲ士民ニ知ラシメ、漸次

皇国ノ御武威ヲ以テ五大洲ヲ横行仕リ候へ、彼レ自ラ

皇国ノ恐ル可キヲ知り、求メスシテ貢ヲ

皇国ニ捧ケ来ランコト年ヲ期シテ待ツ可ク候、又破約攘

夷ト申ス儀、只今ニ至リ 関東へ

仰セ出サレ候ハ、恐レナカラ態ト

御威光ノ御損シ遊ハサレ候ニ当リ、最モ然ル可カラス乎
ト存シ奉リ候、其子細ハ 関東ニテ只今約ヲ破リ候テハ
御国ノ御為宜シカラスト御決定相成リ居候様相見へ候へ
ハ、幾度

綸命之レ有リ候トモ、表ハ御奉命之レ有リ候テ実事ノ御

奉行之レ無ク、御奉行之レ無キ儀ヲ度々

仰セ出サレ候へハ、其度毎ニ

御威光相減シ、歎カハシク存シ奉リ候、然レ共時勢ヲ以テ私考仕リ候へハ、輕卒御奉行之レ無キモ傍ヲ御不策トモ申シ難ク候ハン乎、然レハ

公武共御国ノ御為ヲ

思召シ候儀ハ御一般ニテ、右様御違却相成リ候ハ定テ

京都ニハ 関東ヲ柔弱恐怖ト

思召シ 関東ニハ

京都ヲ御暴論ト厭ハセラレ候ニ之レ有ル可ク、遂ニ隱微ノ中チ猜疑不和ヲ生シ、千緒万端因循苟且ノ根源ト相成リ、一振ノ目途之レ無ク口惜キ次第ニ存シ奉リ候間、仰キ願ハクハ、偏ニ

皇国ノ御為ト

思召サレ

京都

関東トモ是迄ノ御凝滞丸ニ御氷解遊ハサレ、改テ

急速航海御開キ、御武威海外ニ振ヒ

征夷ノ御職相立チ候様ニト

蔽勅 関東へ

仰セ出サレ候ハ、 関東ニ於テ決シテ御猶予ハ之レ有ル間敷、即時

勅命ノ趣ヲ以テ列藩へ 台命ヲ下サレ、御奉行ノ御手段之レ有ル可ク、左候時ハ国是遠略

天朝ニ出テ 幕府奉テ之レヲ行ヒ

君臣ノ位次正シク、忽チ海内一和仕ル可ク候、海内一和

仕リ候テ、軍艦ニ富ミ、志気振起仕リ候ハ、一箇ノ

皇国ヲ以テ五大洲ヲ庄倒仕リ候コト掌ヲ指スヨリ易ク之

レ有ル可ク候、斯ル時勢ニ一変仕リ候ハ、即チ

神祖ノ御誓宣ニ叶ヒ、万世不朽莫大ノ御大業ト存シ奉リ

候、然ルヲ只今ノ如ク隱微ノ中

公武御不和、判然タル御所置之レナク候テハ 御国内ノ

衰微日ヲ遂テ甚シク、蒼生生活ノ途ヲ失ヒ、終ニ黠夷ノ

術中ニ陥リ、齷臍悲歎ノ期ニ至リ候ハンコト、十年ノ外ニ

出テ申ス間敷クト口惜ク存シ奉リ候、斯ル時勢ニ候へハ

傍看ヲ快ト仕ラス、日夜寢食ヲ忘レ 御国威御更張ノ機

会ヲ熟考仕リ候所、癸丑甲寅ノ際ニ候ハ、鎖国モ上策ニ出申ス可ク候ヘ共、当今ニ至リ候テハ却テ下策ニ落チ候ハン乎、時ヲ察セス勢ヲ制シ申フサス候テハ挽回ノ期之レ無ク、已ニ今年辛酉革命ノ歳ニ当リ、天數モ亦相応シ候ヘハ、禍ヲ軫シテ福ト為シ申スモ

天朝ノ御決議ニ之レ有ル可ク、区々ノ鄙誠黙止スルコト能ハス、愚者千慮ノ一得モ之レ有ル可クヤト、万死ヲ顧ミス狂迷ノ論進献仕リ候、激切屏營ノ至ニ勝ヘス、恐々懼々伏地待罪、

冊子原寸 縦二五・一糎 横一七・二糎 一三枚

三 白石簾作ヨリ堀仲左衛門ヘ

薩藩用達公然拜命ノ件

井上弥八郎様江御付囑之華書、於福岡逆旅拜見、先以殘暑酷敷御座候処、益御清寧被遊御座候由、奉敬寿候、敢瓦全送光、乍憚御休慮可被下候、扱ハ年来之志願筋御推挙ヲ以、不遠御発シ可被仰付哉之段、委細被仰聞、俯仰

喜躍、是迄多々御配慮之趣、不淺奉拜謝候、是ハ定而表向下関宮船ニ而被仰越、左候而御達し相成候次第、当然之儀哉と奉懸察候、其上ニ而入国御受申上候手数ニ御座候所、九月より先キハ建策之内取懸り度義有之、在国仕候方可宜、何卒一日もはやく表向御達し、御国許江罷出度奉存上候、八月ニハ是非く罷下り申度、是のミ御待兼申上候、万一御発し、其後迄も御延引之御模様ニ候ハ、私より押かけ罷下り候而ハ如何御座候哉、当年之処九月より後ハ、殊之外おもしろかるべき時節哉と、折角兄弟内見込罷在候事ニ御座候間、押而御発し、一日も早目之処、失礼ニハ候ヘ共、御内々御伺奉申上候、此外数々内存筋、是非とも御地より入込候而申上度、何分く乍此上表方御発し候処、御策略奉願候、右入国之義ハ、いかゞ仕候方可宜哉之段、急便尊答御一筆奉願上候、いさゝ弥八郎様へも申上置候間、御同人より御聞取可被下候、此外御賢慮筋万事無御介意被仰聞被下度奉願上候、先ハ拜答略礼御伺如此御座候、恐々謹言、

七月八日

白石廉作

堀仲左衛門様

二白、いまだ殘蒸難凌千万候、自重奉仰候、御序之

節、其外様へも宜御一声奉頼上候、以上、

文書原寸（折紙） 縦二三・八種 横四〇・一種

二三 真木和泉ノ楠子論

楠子論

嗚乎、楠子之忠義、蓋天下一人矣、其以孤城破二十万之兵、以為勤王之倡、以寡軍挫二十倍之衆、以竭為臣之節、則不与焉、及言不聽、呼兒而託後事、其意謂訣別之言、施之路人、亦能銘肝、兒雖稚少、必記之矣、而我志必徹子孫矣、我死之後、天下之事可知也、而足利二兄之志、實不可測、然則 天祖之基業、与天壤无窮者、一旦而墜、此實可悲矣、我既以之死于此、子亦以之死于此、孫亦以之死于此、兄弟叔姪、亦以之死于此、而拳族無子遺、則彼二兄之心、亦知不可争、而必知 皇統之不可不繼也、

皇統之有繼、則我志之成、而目始得瞑焉耳、行在于芳野也、其近而藩之、則楠氏焉、而子焉孫焉、或討来犯、或取京師、使 神器不汚乎賊手、而安于此者、四世焉、為其子孫者且能之、若使楠子不死于兵庫、而衛芳野、則其復京師、而天下復歸王政者可期焉、而楠子之不為之者何哉、夫天命之去就、固非人力之所及也、元弘之始天就之、而復去之、一去之而不可亦修也、楠子知之、乃以為皇統有繼則足矣、然而此非其一世之所能及也、而其死于所未可死、則為子孫者、感奮激勵、以其所鬱結者、必泄于此矣、如是然後始得其志之成也、而子焉孫焉、進討退衛、歷數世而不替、皆死于此、而及南北一統而後已、々々則莫一楠氏之遺於世者也、大義滅親、人既難之、而楠氏之滅親非一世、又非十數人、子孫能成其志、果如其所慮、自非至誠貫天者、焉得如是久而愈盛哉、源賴朝之開闢、朝廷之權漸失、北条氏繼攘其權、而天下人心岐焉、足利氏之反、察 朝廷失馭之所由、特利攬英雄之心、而天下人心渙焉、人心之渙、其欲為者何事不成、欲為東宮乎、

東宮可得也、欲為天子乎、天子可得也、蓋其心欲為天子也、其一為天子、繼之者如織田氏豐臣氏、視以為常、亦

皆為之、足利氏而不為之、繼之者皆曰、天潢不可汚也、

天位不可躋也、然後天下之事大定矣、其或繼之者、雖百

世可知也、然而足利氏之不為天子、其索 皇統繼之者、

乃因楠氏之世々死于此、而其不可爭而然者也、孔子曰、

殷有三仁焉、箕子曰、自靖人自獻于先王、楠子与藤房義

貞、亦皆各自行其志、箕子屈身而伝道乎周、楠子滅親、

而繼、皇統、以存天下万世之道、其優乎箕子、蓋倍蓰焉、

嗚呼、楠子之忠義、亦与天壤无窮者哉、

嗚呼赫々公威烈

當日事情何可說

大德雖吾不敢望

闔門死義踐其轍

辛酉秋七月作

文書原寸 縦二六・五糎 横三八糎 二枚

三 真木和泉ノ道弁説

道弁説

天之覆幬、地之持載、道也、人之立乎兩間、亦道也、故無道則無天地也、無人也、道寓之言、而治天下者、堯舜氏是也、道寓之物、而治天下者、

天祖是也、君臣父子夫婦長幼朋友謂之物、親義別序信謂

之言、故言滅則道亡、物衰則道替、彼三代之盛、漢唐之

衰、未嘗不因言之得失矣、蓋道之難明、而言之易渙也、

天祖之垂教也、立一人以為君、使之執三器、而治天下、

使天下億兆仰之、觀其所為、由其所行、而親義別序信之

實、行乎日用之間焉、雖天步之或有艱難、而未嘗有遺君

父者也、蓋道常寓于物、而不離也、然則欲道益明、則在

益尊物矣、我

天子者物之大者也、而執三器、以立天下、万斯年於此焉、

固雖歷大禍、而不可動者也、雖然、食与虧、日月亦不能

免焉、彼戎虜之暴、大國為傾、上國亦覆、我不得独保不

為彼所累也、而今維持天地之道、宇内独有 神州焉、蓋

天地亦欲因 神州而揭其道也、而 神州人民之庶兵卒之勇、今猶古也、撲滅彼熾焰、亦宇內独有 神州焉、然則上下一心、必當從事于此矣、夫戎虜之猖獗、近年殊甚、屢侵清國、今萃其半、而漸窺我、或卑辭以請和親、或覲兵以要交易、而其狡謀既足誑人、其妖教亦足惑人、故其取人之國、先破其君臣、尽奴隸之、壞其教化、皆蕩滌之、使人之耳目心思一于利、混々沌々、如醉而睡、如睡而夢、一概驅之、納其範圍、雖有睨然而覺其非者、而耳目之所觸、心思之所及、既非旧世界、將焉婦哉、語曰、致中和天地位焉、謂天地之道亦待人而立也、今也日月喪光、彗星數見、山崩海溢、天地之失道甚矣、而致之者我也、非戎虜也、戎虜之逞其慾、猶犬羊之爭食、天何責之、特我之華而不攘之、使天地如此、不得避其責也、而攘夷則始自尊王、々々即所以尊物而明道也、特怪

今天皇之聖而武、屢下 詔攘夷、然幕府不奉之、諸侯不応之、而幕府之不奉之、為彼所誑、無足論者、特其諸侯者、或有國富兵強、而其君明且智者、然而默而不言、潛

而不動、視彼白日殺人、眼前掠地、而不問之、曰、時未到也、勢未可也、祖先之國不可輕舉也、殊不知戎虜之恩惠漸敷、我民之心思暗移、彼一旦見幾而動、則其富且強者、為彼所有可知也、其所謂祖先之國者、天下既舉、而獨得其全者、此無其理、何弗思之甚也、昔者周室之衰、其称天子者微于小國之君、然七國猶為周之諸侯、周滅而後天下始号秦、彼雖寓道乎言、其物之尊亦如此、況於寓道乎物哉、嗚呼、物衰則道替、無道則無人也、豈徒指山川草木而謂天下國家哉、

冊子原寸 縦二五糎 横一七・二糎 三枚

係辛酉九月作

二四 物主島津登等ヨリ城下士六組ノ射擊演習

通達

明十八日一番組・三番組・四番組、來ル廿日二番組・五番組・六番組、右之通於調練場、御旗本人數四ツ時揃ニ而、玉打いたし候間、此段申出候、以上、

物主

十一月十七日

島津刑部

川上東馬

島津小平太

仁礼舍人

北条織衛

島津 登

文書原寸 縦一四・三種 横三九・四種

二三 幕臣長坂蒼峯ヨリ幕府へノ献議

朝幕一和ノ議

〔表紙〕 蒼峰献議 〔朱〕 『寅五月中付録』

南部弥八郎

蒼峯献議 文久二酉年

表坊主長坂清壽隠居後
蒼峯と号し候由御座候

乍恐以書取奉申上候、

微賤之私、文政年中父清寿年来出精相勤候ニ付、私儀表

坊主江被召出難有仕合奉存候、然処其後父清寿義大病ニ

相成候節、御時計之間勤被仰付、水野出羽守様・大久保

加賀守様御在役之節、御用部屋勤并御年寄方御手元書留

兼被仰付、就而は父清寿以来加賀守様江は御懇意御出入

被仰付、於私も同様被仰付、毎々罷出候処、御用部屋勤

被仰付候上は、別而御懇意ニ被成下、遂ニ奥向迄罷通り

種々御用向等も相勤候義往々有之候、偕加賀守様未御年

寄役不被為蒙仰候以前より、乍恐

〔徳川家斉〕 文恭院様御振廻御驕奢之趣、且御官位御前代未曾有之御

昇進之御次第等、深く御配慮有之候処、御年寄役被為蒙

仰候より御同列江御相談有之、度々被及言上候由及承、

既ニ御同列様御噂ニも加賀守様は小胆ものにて自己拾万

石之格合ニ而 公儀御格合ニ引当候様相見候杯、私共江

御沙汰有之候、加賀守様思召ニは全く 文恭院様御驕奢

之御振廻被為在候儀を殊之外御苦勞被成候儀は 上ニ驕

奢之御振舞有之節は、必下其弊ニ泥ミ候様相成、行末は上

下困窮いたし、非常之所行御出来、遂ニは他家之為ニ被

伺候様相成、且又外夷之為ニも内乱を被覲候様ニ相成候

事必然之道理ニ御座候、其上外様家ニも其機会ニ乘し、
三百年之太平御恩沢をわすれ御隔意ニ相成、

天子を奉擁尊 徳川家江御敵対致し候様相成可申候間、

上様御驕奢之御振廻を奉諫止度と毎々御噂有之候、然処
天保六年末秋九月初旬、加賀守様御宅江被召寄被仰聞候
ニは、近来国々ニおゐて内々貿易いたす族も有之候様致
風聞候、此義は甚天下之御大事ニ而、盛ニ行はれ候節は
騒乱之基本と相成可申候間、同列共以之外致心配候、就而
は貴様ニは和漢共聊心懸も有之、且遊芸も被嗜候と之事
ニ有之、且年輩と申至極と存候間、天下之御為ニ隠居いた
し候而、国々遊歴之上、其風俗を伺、御為筋と相心得候義
有之候ハ、早々帰府被致候欵、又は密書を以自分共江可
申越致度旨被申聞候ニ付、即日帰宅之上親類共江も及
相談隠居願、且跡式俸清二江被下置候様相願候処、早速被
仰付、依之同年十一月中旬ニ江戸表出立仕候而、九州辺江
罷越候処、其節は先穩便之様子有之候而三ヶ年相立、酉年
春大坂蜂起之趣相聞候間、即刻大坂表江罷帰様子承居候

内、無程相鎮候ニ付、翌戌年罷帰候、乍然九州辺、西国
辺其頃穩便とは乍申、薩州家は隣国之人民を愛憐し、自
国富強之策有之候様粗見受申候、肥後細川家同様とは申
ながら、是は隣国と致約束、相互ニ富強之策略有之様子ニ
御座候、又肥前鍋島は疆界論等相立、他領を掠奪致候趣
風聞承り、全くは自国堅強之策略と奉存候、其余之国々
自国富強之策、且少々ツ、夷国と貿易いたし候も有之候
様風聞承候、其外中国筋は花美を好ミ、士風懦弱ニ外見
を飾り候事、尤摂播二ヶ国は士民共利をこのみ遊芸を嗜
候様ニ見受候、大坂より京都江罷越、東海道致旅行、帰府
之上加賀守様江罷出、内々申上置候、其後天保十二年丑春
又々江戸表出立仕候而、紀州より四国江相渡、播州路江上
陸、山陰道北国筋相廻り候処、紀州御封内は士民共驕奢ニ
流れ、多くは風雅遊芸を好、武道衰弱之様子、上下共利潤
をたのミ候趣有之、四国山内家ハ堅固ニ有之候、本ノマ、
俵を守、國民撫育之筋行届、御用ニ相立候者と奉存候、
乍併文武は手薄ニ相見候、其余は因循姑息之風ニ而無論

と奉存候、山陰道有力之者無之様見受候、北国筋は福井家從來懶惰ニ相流れ候処、聊改革有之、追々秀康公之御遺風ニ復候模様と奉存候、加州本枝家は銃を蔵し、表ニ乱舞等嗜ミ、外見は更ニ相分兼候得共、大聖寺家は嗣主内乱之様子風聞承り、夫より江州勢尾江相廻り候得とも無力之者はかりニて、彦根家は偽欺之風行はれ、下々難波之様子ニ有之、藤堂家ハ自国富強之策専らに行はれ、金銀米穀之相場自己に相立、他国之金銀輻湊いたし候術有之候、尾州御封内は其頃御家督創ニ而御改革有之候得共從來懶惰之御弊風有之候、夫より東海道罷下、弘化元辰年帰府之上水野越前守様江罷出言上ニ及候、翌巳年江戸表出立仕、中山道・信州・越後・奥州路より関八州相廻り、三州迄罷越帰府仕候、偕此度之廻国は越後榊原家ハ専ら節儉を守、質撲を主といたし候様相見、且溝口家も小身ニは不似合富強之模様ニ有之、乍併節儉相守候風俗と見受申候奥羽二ヶ国は更ニ困窮家ニ而、只佐竹家之ミ富強と相見候、其余仙台家ニ而も近年改革之模様有之、会津家は上

杉家之古風を被学、其頃は名有而実は乏敷相見、酒井家ハ領内ニ豪民有之候間、世間ニ富国之評有之候得共、是又実は乏敷、乍併下民撫育行届候様子、水戸御家は節儉を被守、万事御政事被為行届候、自然富強之御国と可被為成候様見受候、乍併輕卒之国風ニ而重大之廻ハ乏敷相見候、

右之通相廻り、嘉永元申年帰府仕候而委細相認書取を以言上仕候、其後も両三年相廻り、又候書取を以御用部屋迄差上候、其後嘉永六丑年不願微賤書取差上候処、其節御沙汰ニ、以来は夫々役筋を以可差上旨被仰出御下ニ相成、依之御坊主頭江差出候処、御落手ニ相成候旨承知仕候而安堵仕候、何分ニも先年相廻り候九州・西国筋難心得模様も相見候付、今一応相廻り御為筋ニも相成候儀有之候ハ、言上仕度と存付、安政元寅年御地出立仕、今酉年迄八ヶ年之間国々相廻候処、存寄之通天下人心騷擾類乱之極ニ相及候様乍恐奉存候、其子細は寅年以来皇国夷狄之御通信ニ相成、天下貿易御許容被仰付候始末、実ニ天下

類乱之基ニ御座候様乍恐奉存候、儲交易之儀は始百年來薩州家ニ而内々取行居候処、自国ニ而は偏土狹隘之土地柄故、家来小松彦八郎と申者ニ被申付、越後新潟・加州金沢・摂州兵庫・奥州仙台・下総銚子以上五ヶ国之町人とも追々利潤を以引込、内々交易被致、其元入等は薩州家ニ而いたし居候処、越前守様御勤役中加州之町人より露頭ニ及候付、嚴重御停止ニ相成候、夫より薩州家遺恨ニ被思、兼而水戸御家風は万事輕卒ニ而与し安き風俗を見込候故、前中納言様江種々取入、越前守様御事を被仰立候、其後御同人様御退役ニ相成候砌、仙台家来江同所并新潟町人兩人相添獵船ニ打乘異国ニ相渡、薩州家之宿意を打明し様子有之候付、則寅年米国浦賀江致入港候は、全本朝之虚実探索仕候ニ御座候、然れ米国存込之通段々成行候間、自然我意増長之仕合ニ相成、薩州家は水戸前中納言様御心中を奉察候而、表ニは外夷を惡ミ、一橋刑部卿様を以將軍御相統を奉推尊、其上阿部伊勢守様江取入(正弘)文恭院様御例を以(徳川家定)温恭院様江御縁組を被相願、且水戸

前中納言様御仕向之儀等種々被申立、右故徳川御家・水戸御家之御間柄も遂ニ御隔意被為成候事ニ御座候、是実ニ天下之御一大事と乍恐奉存候、并ニ是等之策略は已ニ薩州家来小松彦八郎・堀次郎左衛門等之奸計ニ出申候、然れ宰相殿・薩摩守殿死去被致候後、同姓和泉相加り、様々算策仕候間、天下之嚮望ニ随ひ一橋刑部卿様を將軍家御補佐といたし、越前前中将様を天下之大老職ニ推挙いたし、自分主人并陸奥守殿・肥前守殿・大膳大夫殿以上五人を同列と定、天下之御政事ニ相管し候欤、又は將軍御上洛被為遊候様之勅命有之候欤、以上二ヶ条関東ニ而御引請無御座候節は天子を奉擁尊、天下を五ヶ国之人數外ニ肥後・筑前を始、天下之人數催促いたし、夷狄征伐、且徳川御家違勅之罪科を鳴らし御敵對いたし候模様ニ及承候、乍併細川家・黒田家・有馬家・立花等又は両池田・宇和島・阿州・津輕・上杉是等之家々ハ薩長等之差図ニ而は容易ニ動揺は仕間敷、尤御用心可有之家々ハ薩長肥前は不及申、藤堂・山内・佐竹・真田・水戸

御譜代ニ而庄内・酒井・小倉・小笠原ニ御座候、乍併小笠原家は別紙ニ申上候通家風甚悪敷、謡楽を嗜ミ、土風情弱ニ御座候間、左迄之事は有之間敷と奉存候、其余家々之儀は別紙ニ相認奉指上候間、御賢察之上乍恐御所置奉願候、度々右之手段有之候付、来戊年二月頃ニは島津和泉參府と唱、京都江立寄、所司代より奏聞ニ及び候欵、直ニ近衛殿江罷出、及奏聞候様ニ多分可相成と奉存候、長州家も最初宍戸九郎・永井雅楽を以伝奏・議(長カ)奏迄書面差出候、其後長門守殿帰國と唱致上京候旨薩州江御談有之趣承候間、即日薩州を発足仕、長州江罷越候而模様伺合候処、風聞之通彼は騒立候様子ニ御座候、其外沿辺之諸家共何となく騒敷有様ニ見受申候、其内穩便之家は豊前小倉、中國筋より東海道辺ハ至而平穩之模様、乍然其家々ニも文武之世話出来候族も間々有之様見受候、又は太平ニ浴し懶情ニ流れ候ものも有之候、其土地々々國風は先年より致見聞候通委細書取別紙ニ而差出候間、乍恐御賢慮之程奉願上候、何も右之始末ニ而有之候間、幾重

ニも御英断之上、天下之御政事御一洗有御座度乍恐奉存候、万一此俣ニ而御成行相成候節は実ニ以天下之御一大重事此上無御座候、既ニ先年御大老職掃部頭様於榎田御登城懸浪人共狼藉ニ及び、御同人様被為負手遂ニ御死去被致候儀は天下人民憤怒之所為ニ御座候、扱子細は夷狄交易、且皇國を致横行、其上諸品彼國に相渡、総而高直相成、万民困苦ニ差迫り候より有志之族不堪憤激、無拋右之始末ニ成行候間、万一御改革等不被為在候節は又々御年寄様方江狼藉等致候ものも可有之と、乍恐奉拙察候、且浪人共之狼藉等は天下之小事ニ有之候得共、前書申上候通、諸家四方ニ起り立候様相成候而は、実ニ無此上御一大事と乍恐奉存上候、就而は此上御変革筋申上候は誠ニ以奉恐入候得共、不願陋賤御取用之有無ニ不拘書取を以奉指上候上は、何程之罪科被仰付候共聊遺恨無御座候間、不憚天朝幕府以箇条左之通書面ニ奉申上候、一第一、天下之御政事御変革之儀は乍恐日光様御創業より御三代様迄之御振合ニ御基、八代様、且松平家

翁様御勤役中之御時政御取用被為在候様仕度奉存候、

一第二、御上洛早々被為在度、其節御供ニ被召連候家々、御普代衆は申迄も無之、国主外様衆迄被召連、尤以前に御普代衆之内ニ而、式拾万石より五六万石迄之内ニ家も来三月迄ニ京都鎮撫之御役被仰付被遣候様被為在度候、其儀必来春早々天下之浪人共京師ニ相集候様相成候間御用意奉希候、就而は従来 公儀御役筋之者旅行被仰付候砌は、人馬休泊賄料多分頂戴致おり候を自己之儲ニいたし、其国々駅々ニおゐて御定と申立、纒之賃錢差出、其上手違等有之節は彼是と御威光を以難題申立、其所之役人共を引連、剩聊ニは候得共、酒代等掠取候族も多分ニ有之、此義は京都宮家・堂上方之家来衆にも間々有之候而、地頭・領主不容易雜費相懸計ニ而も無之、下民之者共甚難渋仕候儀ニ御座候、付而は此度御上洛被為在候折から、此辺之義至而小事ニは御座候得とも敷敷被仰出、万一右様之所作致候もの有之候ハ、敷科ニ被仰付候様相成候ハ、自然相止り

天下人望之基開共可相成、且堂上方衆も自然と弊風相改候様可相成と乍恐奉存候、

一第三、御年寄様方御始末々之御役人迄、正義之御方を御用被為在、当時之御役人は夫々御撰抽被為在候御所置願度奉存候、其外天下之人望も被為在候得は、一橋刑部卿様御補佐越前前中将様御大老職ニは御家柄ニ而、先規御例も被為在候間、刑部卿様御助言と被仰付候様被為在度、其外御役筋は其家々之家格ニ不拘人才を御撰挙被為在度、乍恐奉存候、且是迄は御役家ニ而御内玄関ニおゐて諸家之使者相受候儀、賄賂之道を開候筋相成来候得共、是全松平衆翁様御勤役中表向ニ而聞入兼候筋有之候而相始候儀ニ有之候処、此儀は衆翁様格別之御人材ニ而被為在候間濟来候得共、其余之御方様ニ而は却而御弊政相成候間、以来断然と御停止被為在度奉存候、

一第四、御先例ニは 上様御年齢御廿五歳ニ被為成候迄ハ、天下之御政事向万端御大老職江御委任被為在候付、

御側御用人を以給而御政事向言上ニ及候御先規ニ有之候得共、当今御時勢不容易御事ニ被為在候間、仮令古典ニは御違背被為在候共御表江 出御被為在、大小之御政事御聞濟之上御所置奉願上度候、且京師宮家・堂上方江も大小一々ニは無御座候得共、御相談被為遊候様仕度候、就而は当今関白職ニ被為在御座候九条殿ニは、専ら利潤を御嗜ミ、金銀を以人々を撰挙被為在候等之儀間々有之、且天下御悪評も有之、且奸人ニ御一味被為在御古典を被為廢候条、実ニ非理之御振舞有之候間、御辭職ニ相成、一条殿欵近衛殿御隠栖ニは被為在候得共、着飾有御座而関白職被為蒙 仰候様乍恐奉存上候、

一第五、夷狄交易之儀従来成行候御事柄ニ御座候得は、今更断然と御断切ニも相成間敷候間、横浜・箱館二ヶ所之儀は敵敷御断ニ相成、旧例之通長崎并致来候薩州・嶺島右二ヶ所ニ而交易御許容被仰付、嶺島は元来薩州領内之事故薩州家江被為任、長崎之儀は奉行職御休役

被為遊、黒田・鍋島両家江被為任候而、異国之応接之儀は給而和蘭・英吉利等之国は 日光様御朱印御下ニ相成居候、万事応接之儀被仰付候故、又は国司江被仰付異国江相渡、此方より差向交易ニ相成候故、両計之内乍恐相願度奉存候、

一第六、徳川御家政之儀は古来 上様大奥ニ被為在御座候節は、上藤衆・局・御年寄を以御政事向言上被及候事往々有之、此儀は上ニ賢明之君被為在候而、下ニ俊哲之臣有御座候得は甚便利ニ相成候事ニ御座候得共、左様無御座候而御庸君と奉申上候も奉忍入候得共、上下共凡庸之御人柄ニ有之節は却而大弊を生し候様相成既ニ 文恭院様御代頃より大奥江取入、諸家衆は官爵、御旗本は御役被仰付候様賄賂手釣を以被相願候従来之御弊風と奉存候、且天下に、古来隠御目付御差出相成候儀は御庭御掃除之者、又ハ御鷹匠・御鳥見之者等被仰付候故遠国江参り、段々居馴染候より所之役人江取入、彼是と申偽、金銀等掠取候者間々有之、又は元来小

身微賤之もの故利之為ニ被引込、遂ニ情実を打明し、御用ニ相立兼候族も間々有之、是は日光様為思召小身之者の一助ニも相成候深御配慮ニ而、其人柄を御撰直ニ被仰付候儀と承居候処、近来ハ人材ニ構無之、順番を以被仰付候様相成候間、右弊風相生し候次第ニ御座候以來は奥御小性^(姓)・御小納戸衆、又は重御役柄ニ而御役被成御勤候様仕度、既ニ日光様御代より近代迄重御役柄ニ而、御府内は申迄も無御座、遠国迄被参候、御方様ニは酒井讃岐守様・板倉周防守様・松平伊豆守様・酒井雅楽頭様・松平楽翁様等之御方々密々被相廻候御先規も有之候間、若御一大事之御事有之候ハ、御自分御側衆之内両三人被召連穩便ニ御探索被為遊候上は、事情儘ニ相分候故、自然天下公平之御所置も相立候様乍憚奉存候、

一第七、近来新吹金銀古金銀と甚相違いたし、却而天下人心を失ひ、徳川家御威光も相落候基開ニ御座候間、古金銀之通被仰出、金銀相場之儀 御四代様迄之通

日光様御定之御例を以上下中和之相場ニ御定被為遊候様仕度、且米穀相場等も国々之豊凶ニ随ひ高下も有之候得共、百俵ニ付金百兩より六拾五兩位を高と御定被為遊、若亦御定直段より高直ニ相場相立候者は嚴重被仰付候坎、又は年々御上納米御積儲ニ相成候式百七拾余万石を御糶米ニ被仰付候様仕度、偕亦近来は諸家共困窮致し居候間、其家々分限ニ随ひ御下金被仰付、其金銀は吹上梅林御構内ニ有之候金銀高分銅を以通用金御吹立ニ相成、御下金相成候節は自然世界融通ニ相成家々優富ニ相成候得は金銀米穀其外諸色も下直ニ相成可申と乍恐奉存上候、

一第八、近来御弊政と申上奉り候は奉恐入候得共、^(和名)内親王様御縁組被為在御座候御事は 皇国開闢以來未曾有之御事ニ御座候、是迄宮家衆より御縁組被為在候而も不容易御事と乍恐奉存候処、此度之御事御内実如何被為在思召候哉、今度御所置善悪ニ随ひ徳川御家之御興廢ニも相係候様乍恐奉存上候間、御大札御滯無御

座被為濟候上は、猶更前文申上候通不日御上洛被為在、是迄奸人共中間ニ相立、奉壅敵候御託を直ニ御 奏聞被為及、御実情御通徹ニ相成、

公武御合体被為在候ハ、実ニ天下泰平不遠ト乍恐奉存上候、是御弊政之御一ヶ条とは乍申、御取扱振ニ而無此上徳川御家之御僥倖ト可相成候、掃部頭様御家督無相違被仰付候御事柄世上様々致風説候儀如何ニ被為思召候哉、実ニ掃部頭様御場所ニ而御落命有之候義ニ御座候ハ、井伊家御改易之儀可被仰付処、左は無御座候而其假ニ而被為濟候、然処私其頃薩州ニ罷在候処、右偏土之地柄ニ而も紛々下説いたし候様ニ而ハ痕跡も無之儀を天下人口ニ相触候様之儀は有之間敷と乍恐奉存候、其余異国金銀御取用相成候義是等之儀は奉申上迄ニは無御座候間、御尋も有之候ハ、遂一愚存之程可奉申上候、右数ヶ条は実ニ微賤浅学之算策之儀ニ候得は御取用之有無は更ニ不奉願上候得共、実以当今不容易御時節ニ御座候間、大御变革無御座候而は將軍職は

申迄も無之、徳川御家御興廢ニも相係り、遂ニは御祭典も相絶、徳川御家と申は天下ニ離候欤、称尊致候も無御座候様可被為成候哉と、乍恐奉存上候、何卒御上洛被為在、尊 王之道第一ニ被為行、日光様より御十余代之御余光を 皇国人民奉仰望候様被為遊、是迄之御弊政御一洗被為遊、格外之御变革被為在度乍恐奉存上候、左様ニ相成候得は、上は

宸襟を奉安、下は 皇国人民安堵之基ニ御座候、偕亦皇国人民は 天子より徳川御家江御付屬之物ニ御座候則

皇国は

天子之御宝土ニ而徳川之 皇国ニは無御座候、若徳川之皇国と被為思召節は独夫之徳川ニ而遂ニ他家江人民御付屬有之候様可相成は必定之理ニ御座候、依之以来天下之御一大重事ハ御上洛被為遊、天下之諸家を京都江被為召寄御算策之上

叡慮御伺被為遊候御上ニ而諸家江御下知被為在候様願

度奉存候、其余之御事柄は徳川御家政ニ被為在候間、御連枝御一門を奉始、溜詰御譜代衆ニ而御建策被為在天朝江御伺被為遊候上ニ而御所置被為在候様仕度候、是則先哲申処、一家之政事治國平天下之規則共可申候左候得は、

皇國は徳川之皇國ニは無御座候共、自然徳川御家之皇國と申ものニ御座候、偕天下之御一大事、漢土其外異國ニ被為對而之御所置、人民生死ニ相係り候御事、且治乱鎮撫是則一天下之御一重事と申候由、人民死生は小民罪科有之、死罪ニ被仰付節は國々家々ニ而徳川御家江達上聞、夫より

天朝江奉 奏聞候御事ニ御座候、五代様迄死罪一刑被為所候節ハ、必關東より飛札を以奉 奏聞候事ニ而、其後は一々

奏聞ニは不被為及、年々暮ニ相成、飛札を以 奏聞ニ被為及候様成行候、此義は

天朝を奉度、且亦人命を被輕候御事ニ相成候間、矢張

御旧例ニ御復被為遊、一々御 奏聞被為在度乍恐奉存上候、天下諸家江被為對、夫々家政向取扱振御下知之御所置被為在候を則徳川御家政と申候由、此等之御事柄は、紅葉山御廟御宝藏ニ有之候 日光様御定書天下^(奉)奏平御記繪録ニ有之候御事柄ニ御座候、依之天下之御政事大小共

天朝江被為達、其上御所置被為在候様被為成候ハ、誠ニ 日光様御余光益相興り 皇國之威權掌握ニ被為在候必然之道理ニ御座候間、則 皇國は徳川之皇國ニ而、万代不朽之御基開と乍恐奉仰望候間、不願前後此段以書取奉申上候、再許頓首、

西十一月

右は本文ニ相見得候通、天保六末年閣老之命ニ依り 数度國々を順歴、 御國許江も罷越候趣も相見得、且時勢之變革、幕府之失体を挙げ尤之筋も御座候様ニ奉存候間、既ニ程過候書ニ御座候得共写取差上申候、此段申上候、以上、

寅五月七日

南部弥八郎

冊子原寸 縦二六・六種 横一九・八種 一六枚

〇二六 平野二郎ニ託セル真木和泉守ヨリ久光公

ヘノ建言

三冊

天祐、迅速ノ二策

二七 近衛忠房卿より島津和泉殿へ

久光公之上京を待つ

(包紙ウツ書の朱)
西十二月

近衛様御書

(包紙ウツ書の朱)
島津和泉とのへ

内々

忠房

(朱)
「辛酉十二月十一日」



三白、前左府・忠房兩人より、御送り申度品在之候
得共、尚跡よりと存候事、

追々寒氣増加候、弥御勇健珍重之至ニ存候、抑尚之介上

京ニ而、御伝言共具ニ承知仕、御尤々ニ存候、何卒御上

京ニ而面謁も申入度、御心易御互ニ隔意等無之、御咄共

申入度、待入存候事、

十二月十一日

追伸

尚之介上京ニ付、内々何寄ノ御看送り被下、喜

悦之至ニ候、御心入之御事、深々御礼申入候、前左府

よりも御同様、御満足之御挨拶可申入、被申付候事、

文書原寸 縦一五・八種 包紙原寸

横五七・三種

①縦三一・五種

②縦三一・二種

横四三・四種

横四二・四種

二六 真木和泉ヨリ東来ノ有志ニ示セル「再思

録」及「檄文」

二通

一、勤諸侯 二、仮諸侯兵 三、義徒 挙

事得失

一一八ノ一

(表紙)

「再思録」

勸諸侯挙事得失

今事を挙には、九千の兵不可無、少しにても三千ハ無てハ不叶也、然れハ大諸侯にあらざれハ挙不得、大諸侯にて九千の兵を出すならハ、事の成ハ勿論、其時の勢甚熾にして、天下諸侯これに應ずるもの速かならん、又天下の士民事の必成を頼て人氣勃起せん、仮令一方に非義の義を守りて籠城するもの有とも、天下不与之、其領国の士民より起て倒戈するにも至るへし、是諸侯を動て挙しむる事、方今の妙策なり、然といへとも今日の諸侯といふもの、誰是といふ差別もなく、其家を重んじ、其事の成否を深く勘へ過して決断するものなく、且老臣など兎角鄭重の説のみ多して、日又一日とおしやり、幾を失事^(總)甚し、幾を失も今日までハ宜しけれとも、明年中も過したらは大変起りて手の下し所なく、九千の兵ハ九万ありても成すへからずに至るへし、是諸侯頼に不足の憂なり、其事成て後に覇を謀るを憂ハ過慮と謂へし、元亀天正の天下とハ大に異なる事あり、事長けれハ此に不論、

仮諸侯兵挙事得失

かりたる兵一千人を以て、華城を取り固く保て 行在とす迄待へし、是には義徒の内にて謀主ともなるへき人物一人差継きて、勇にして断決ある者一人、都て二人付副て可なり、而して京にて鸞輿を抜き取と条城を乗取り、諸有司を討ち、彦城を焼とす義徒可任之、然れハ義徒も一千ハ無して不叶、尤一千の内五百人ハ農民、或ハ力士盜賊の類にても可なり、然れとも是等の人を募るに幾見違易きの憂あり、熟考すへし、扱其兵を仮に華地兵庫等を衛る兵あるに、因土長等元來尊 王の国にて、近くもあれハ天幸とも云へけれとも、因ハ彼の庶流にて遊説に術なくて不叶、土ハ其主東にありて説を納るゝに便ならず、往復いかゝなり、長ハ最上の尊 王国といへとも、即今国是未定ハ、第一最初の挙をなすハ如何あらん、この見を他国に不讓ハ、愚亦保之、勢近來頼に幕の悪を受勢亦可恨之、是もし奮発せば、これに京の事を任して、義徒華城に掛りて可なり、ケ様に事を換るに至れハ甚妙

なり、何は華ハ海辺なれハ、海賊を作りて(カマ)搜船數十艘一同に上陸し、又河内辺にて少々にも農民を俄に募りて裏より起るに尤便なり、扱勢京の事を任るにも義徒随一の者百人内外は其内にあるへき事なり、嗚呼勢もし是に任する力あらハ、天幸いふはかりなし、只恨国是如何、右数国に説こと熟考すへし、

義徒拳事得失

義徒のみにて事を拳るニは前二策とは大段大に異なるへし、何は義徒のみなれハ、皆義勇とは云とも資糧もなく、器械もなく、其勢誰か見ても孤弱なるへし、然ハ諸侯の拳るよりも五陪(ママ)も十陪も人数多く、同志の頼む心熾にして、自然と外に張出す気焰も熾にあるへき事なれと、義勇のみの人さはかり多く募る事も出来かたけれハ、十分に五六百人なるへし、五六百人にてハ京中の事僅に成し得る計にて、逆も華城に手を付る事なし難し、然れハ此拳ハ智計を専にして、或ハ声援を仮り、或ハ疑兵を張り、戦争を不用して彼を圧倒し、彼を迷眩し、彼を逃亡

せしむる様の事を謀るへし、然ハ先つ義徒を二手に分ち、一手ハ速に奉護直に叡岳に幸し、一手ハ条城に火を掛けて失火と号し、且是を蹶躡し、若州か救火に出を討取り、差継ぎ京中役所らしきものを始とし、所々に火を掛けて、何とも訳のわからぬ様に狂ひ廻り、然る後に叡山に集り決議て、右の一手にて二品親王と中将卿を擁し又京に入り、角士を始め種々の人を募り、淀城を屠り器械を取り、男山に楯籠り、中将卿を大将としてこれを守らしめ、右男山の人数を又二手に分ち、一手にて二品親王を擁し、沿道の人の募り、金剛山に楯籠り、摩耶山の事折々大和・河内あるへしに横行し、資糧を積儲へ、叡岳の策応をなし、都下の地に東兵ハ一人も入得ぬ様にし、幾を見透て華城を乗取り、蹕を此地に移すへし、其内には最初叡山より廻したる詔書并檄文天下に敷て、諸侯の兵も義徒も追々集るへし、扱京に事を拳る已前、義徒より二三人詔を齎て東行し、水国に告て期を弄し、五百の兵を一同に挙て江東に打入、八方に火を掛、速に打破り、東主と女宮を抜

出し、水城欽二荒に移し蔽に護之、江東の地ハ黒土となし、奸吏を尽く殺し、弥其地にて人を募り、或ハ獄を破てこれを用ひ、火消の者など亡頼の徒を集て三隊となし、一隊ハ速に富津の嶮を扼し、一隊ハ横浜にて夷人を撃ち館を焼き、舶ハ全して乗取るへし、一隊ハ東禅寺を始め、府内に居る夷人を尽く斬り、又奸吏の館を焼へし、扱教日の後に事稍定たらんに、東巡の命下りて、車駕已に華を發する比、東主御迎として山道より上洛と号して、猶駕を發せず、函嶺に蹕を駐る頃に至り、甲州路を歴て函嶺に赴き、罪を謝すへし、此已後の事ハ神速鈔に述、右三策これを上中下策と称す、下策ハ勿論危して不可用といへとも、人材と時幾の宜を得は、笠置 行幸に比しなは、遙に上策なるへし、中策に出る時ハ十二八九ハ成就すへし、上策に出る時は方か万まで成就疑なし、然れハ義士憤激の腸をおさえて、百方手を尽し、大國にて義を尚ふ君に説き事を挙しむるにしくハなし、扱愚久しく思惑ふ事あり、請此に述ん、諸君これを取つき玉は、幸

甚、夫國の大段封建と郡県の別あり、漢土の事を引て云んに、三代已前ハ封建なれハ、兵を挙て無道を討は、いつにても諸侯の國なり、湯武齊桓晋又是なり、未た烏合の衆にて事を挙るものを不聞、秦より後ハ郡県なり、兵を以て乱を撥するもの皆烏合を集る匹夫なり、漢高祖明太宗其尤なるものなり、亦未た諸侯らしき者にて天下を取たるものなし、是を以て見れハ、封建の世にて烏合の衆にて事を挙ハ、其轍もなけれハ必出来ぬ事なるへし、承久ハ烏合にて破れ穩伎佐渡の狩あり、元弘ハ笠置に破れ穩州の狩あり、其後穩州より拔出玉ひし時ハ、第一に楠氏義を倡へ、名和氏 鸞輿を迎へ、新田氏、菊池氏等東西遂に応し、一時に奮起せり、此時にハ一人の烏合なく、皆列國諸侯なり、是烏合憤激にてハ敗れ、諸侯勤王にてハ成る明徴なり、即今

至尊の聖徳古来比類すへきなく、幕吏暴惡、夷狄猖獗の時にて、天運時勢人心の盛衰向背、前時とハ余程の相違もある事なれハ、一概には不可論といへとも、また区々

の名分ありて、無智の老臣数人にて 天朝をも諸侯をも

思忖に扱ひ、又数代の黠計にて形勝の地ハ皆其守兵あり、

大抵の事にてハいつも其規模の下に出て、彼の思慮の外

に超出する事難し、然ハ十分に思慮を熟し、時幾を見通

し、智略を運らし、形勝に抛り、都て彼か思慮の表に三

四層も超逸し、彼か胆を破るに非ハ、業を成す事出来ぬ

と思なり、故に愚か策を画るにも、務て英発にして神速

を貴ひ、形勝を取を第一とす、又只諸侯を勧て事を奉し

むるを以て上策とす、諸君其蒙蔽を啓き玉はん事を至懇

とす、

文久紀元十二月十二日

油浦老漁

東来諸君各位

冊子原寸 縦二六・七種 横一九・二種

一一八ノ二

檄

恭惟

大皇國ハ

天祖天照大御神文以て教化を施し、武以て国体を立、衣

食の業を始め玉ひしより、

皇統連綿文道宇内に耀き、武威夷狄を畏し、士大夫ハ道

を楽み民庶ハ土を安し、何一ツ不足の事なく、父母妻子

を養ひ、桑田菜土と感戴し来れり、然れハ

神后ハ三韓を退治し給ひ、豊公ハ朱明に討入り、四海万

國まで

皇化を弘め給ふ規模なれハ、嘗て刀伊・胡元の来寇あり

といへとも、皆敗て帰る得る者さへ稀なり、然るに近来

西洋の夷賊、頻に猖狂て、丑の年に至り西米利加(アメリカ)より和

親交易を乞ひ、魯西亞・暎咭利・仏郎察等相繼て来り、

種々輕蔑侮慢を働けれハ

皇帝深く憤らせ給ひ、古来制度の通り打払可申よし、

勅諭を下し給ひけるに、幕府の有司夷狄の虚喝ニ怖れ、

夷狄の賄賂を貪り、只管に彼等か申立のミを聞入て、却て

皇帝の難有

勅諭にも背き、有志の諸公を退け、忠義の士夫を斬り、天下の民庶交易の為に困窮ニ及び、飢渴に逼るをも不顧、己か我意を張、己か安逸を偷むハ、夷狄にも増る逆賊なり、惣して西洋夷狄ハ禽獸にも劣るものなるに、人類と均敷扱ひ、況や賓客にも扱ふに於てをや、此度某とも奮起り、上ハ

叡慮の鬱憤を慰め奉り、下ハ民庶の塗炭を救ひ、且ハ是までの恥辱を雪かんとため、義旗を建、鸞輿を奉守護、幕府の奸吏の罪を糺し、夷狄を打払んと思ふ処なり、嗚呼

大皇国に生たれる人、誰か
皇大御神の御末にあらざる、士農工商の差別なく、心性智識あるものハ申に不及、早く此意を領して、錦の御旗の本に馳参り、奸吏討伐、夷狄攘斥の御指揮に従ふべき者なり、

文書原寸 縦二四・六極 横一一四極

二九 堀次郎ヨリ小松帯刀へ

江戸邸自焼後の情報

一 御参府御月延来秋迄之 御願書式部殿手前ニ而今十七日御差出相成候、御類焼ニ而ハ御月延之例も有之候得共、御自火ニ而御月延之例無之と去方杯は申事候得共、此節ハ無御別条、来秋迄之処ハ相運可申向ニ御座候、一 御遠慮御免、去ル十五日以後被仰出候、

一 遠江守様・淡路守殿、昨十六日御昇進、八戸様侍従・佐土原四品、結構之御事ニ候得共、右ニ付式千余両之御物入相成申候、

一 七万両御拝借 御参府御延引御願、一緒ニ御差出之筈候得共、

天璋院様御訳合ヲ以、幕より式万両拝借被成下候段被仰渡候、仍而員数御損之五万両位も御願ニ相成可申候と存申候、

一去ル十一日 和宮様御入城、来ル十八日・廿二日比ニ御婚姻相成筈御座候由、公家様方も去ル十四日大抵御

帰洛、中山様杯御一兩方御残、先無難ニ何篇相運向ニ御座候、

一当分案内ニ猶残も閑宿ニ有之、安藤江は差次ニ御座候、安太郎も御内用頼相成候後へ、何欵御世話有之候向ニ御座候、閑老柔佞、財宝ヲ貪、且恐縮、断然たる決断ハ六ヶ敷候、幕役一様右通ニ而、監察役ハ随分人も揃宜敷候、

一御焼失ニ付、亀丸様御類焼町家千軒近ク焼ケ、亀丸様江ハ松板五百枚・疊表三百枚・上布二十疋被為進、町家江金五百両・真米三百俵被下候、右ニ就而外方ニも、亀丸様江は三千両、或五千兩御贈相成候杯申唱説茂有之、類焼ニ及候町人杯も、少々之被下物ニ而ハ甚迷惑ニ存杯申、奉恨者も御座候由、西・汾陽存慮ニも前条ハ当座ノ所ニ而入

御聴候之上、思召ニ而町家江今五百兩、亀丸様江三千兩位ハ御贈相成候ハ、此段ハ私より強而願上具候様、類ニ承り候、尤私愚存ニも、当分ハ一同之人氣被為

取候処、金銀よりハ大切と奉存候、殊ニ長州杯ハ、兩三年跡隣国石州浜田御困究ノ砌、米老万石借用、其後返米ノ段ニ及候得共、進し切ト申事ニ而、当分ニ而ハ長州ヲ浜田より本家同様ニいたし候由、亀丸様ニハ因州様御末家ノ事ニ而有之、御本家響合、其外世上借金も相成候事、且亀丸様ニハ伝奏御馳走役ニ為當、当日も御出役にて、小人数丸焼ニ而 広尾下屋敷江御逃、誠ニ憐之体之由、彼御屋敷江致出入候町人咄ニも、涙之出候次第と申居候由、旁右様之事候得は、縦令御用途少々御手支ニ及候共、何卒御義理金旁ヲ以、五千兩位ハ思召ヲ以御贈相成度、心願奉存事ニ御座候、當時之形勢、且御情合之次第御吟味之上、御論談有之度奉存候、此内御納戸蔵焼失之折、外方火消大ニ働候組も有之候得共、何之御挨拶も無之、甚奉恨、此後薩州江出火有之候而も、再度立入問敷杯申居候由、邸中抽て働候者も、早川押留、為何義無御座候よし、已後御賞罪明白ニ相成人氣勸立候様有之度奉存候、

一 兩人消息于今頓と不相知、日々屈指相待居申候、私ニも閑宿御返答相知候折、南部様より久世よりも次郎江申付、御直ニ形行申上、御參府奉勸候様致承知候間、早目出立、成行申上候様被 仰候間、右之段ハ飛脚ヲ以可申上、私ニハ外ニ少々御用之義も候間、今少シ滞在仕候様被 仰越候趣申上候処、於 御国許ヶ様義御存知無之故、右通被仰越候筈候得共、久世よりも承候事故、一先ハ罷歸、御直ニ御内話之趣申上候上引返出府有之度、類ニ御勸ニ預り、彼是と申延居候処、御焼失故、南部様より次郎も今少し致滞府、御參府御都合相定候上、早々致出立、御直ニ次第可奉申上段、仙波江被仰此御一義相分候ハ、凌ヲ取候義甚面働ニ而、岸良ニも着仕候ハ、何様共いたし易候得共、込入申候ハ、何篇八戸様江ハ閑宿江相響候間、嫌疑之廉生候而ハ不宜奉存候、柔和ニ相凌事ニ御座候

一 西ハ誠ニ振はまい御奉公仕者ニ御座候、唯天下之形勢ヲ吞込不申故、事ニ依りいたし(マ)に(マ)きく御座候、汾陽ハ

先上手風ニハ候得共、案外宜敷、是ハ當時之事情形勢も大抵ハ存居、御役場ヲ離、事情探索等もいたし、余程心ハ相用居込候、

一 私存知之小出修理殿(秀光)ニも、先日御目付江転役御座候、此人も福井出職猷白申候心組山々御座候、尤私ニハ音ヲ入手いりも不申出候、右等之義ハ御安心可被下候、

一 邸中御手当向全無之、一小事到来候而も、大混雜何篇不頓着ノつまりニ而、奉恐入事ニ御座候、就而先日より度々式部殿江申上候処、極同意、此方も始終考居候事ニ而、今成ニ而何れ不相濟と被申事ニ候得共、御役場江人物無之故欤、即御手当付候処六ヶ敷、両番頭毛頭不用立、安田・永田不和相談相調模様ニ無之、安田御下しニ相成候ハ、永田ハ随分はまい可申候、乍去永田も多病身弱ノ由御座候、私ニハ一面望も不致候、右様之事御座候間、十分之御定ハ六ヶ敷、殊ニ御焼失後ニ候得は、無申分所ハ逆茂御定付兼可申候得共、当座可也ニ御手当不定候而ハ、此世上甚御危キ訳ニ而御座

候間、式部殿・登殿江申上、是非最速荒増ニも、御議
定有之度申立置候、只今迄ハ、御姫様方 御逃御供茂
表方より四人迄ニ而、其外御手当諸向何も無御座候、
当座御手当向之義も、半数ノ義ハ条件ヲ立、御兩人江
申上置候、御軍場変事御手当、大抵相定候上仰出、数
藩柔弱之人數御糾相成度奉存候、右申上越度、如此御
座候、以上、

酉十二月十七日

堀次郎

小松帯刀殿

文書原寸 縦一六糎 横二七六・六糎

三〇 海老原宗之丞ヨリ藩庁重役へ

琉球通宝鑄造ニ付安田轍藏ノ件

(紙ツッ書)
「上」

手扣

安田轍藏存慮承届申上候様、先達而被

仰付置、其後承候内、別ニ差掛申上度存候訳、先日
拜謁之節申上度存候得共、段々申上候条々、都而被為遊
御配慮御事而已ニ而、何分ニ茂奉恐入、適轍藏江承候哉と
御沙汰茂奉承知ながら、得不申上時宜ニ御座候得共、猶
退而愚考仕候処、何分ニ茂不奉入

御聴候而は、向後御難決之儀共到来可仕欤と奉存、不得
止事申上候、轍藏於屋久島、有村壯一・川上助八郎等江、
折々嘶仕候儀、至此節証拠相見得候廉有之、大坂鑄錢場
等其一ニ御座候処、仙台江通用之鑄錢被差免、是以前廉
より為申居事之由御座候、然は先達而より嘶ニ何分
公辺江之御会釈以前ニ不被為相替、

御親睦被為在度、左様無之候得は、立所ニ御危難ニ被及
可申、右は兵力之筋ニ無御座、手先を以相制シ、可申、法は
国々之依次第国初より相建有之事之由御座候、然は既ニ
長州之混雜治定ニ及候上は、能々御心を被用、御良策有之
度、頻ニ申事ニ御座候、其訳は御国鑄錢之儀は、疾より響
合居候、大坂并仙台江相開候得は、自然銅価高直ニ罷成、

御引合ニ不相成、猶此上大坂同様長崎江可被相建茂難計、且米払底之國々は九六大名と唱へ五侯ニ為限由ニ候、粗九斗六舛を以高老石ニ鎮候御方々は

御国南部様米津田沼等迄御座候間、此節大坂豪富之兩替屋江、兼而御手当之金御取立ニ相成、公辺御囲米御詰替被仰渡、数百万石御買上相成候得は、直ニ日本国中之米価一時ニ沸騰いたし候儀差見得、然時は近国其外大坂中国辺逆買入米之手段尽果、至極之御困苦可罷成、其外ロシヤ印度辺之支配地より砂糖廻込候得は殊之外下直ニ相当候儀茂有之、御国を縮メ度術と申には、掌中之物を翫弄仕候様之儀ニ而、全兵力を相用候ニ及不申事之由御座候、右等之儀弥其通成立可申哉、其段は愚昧之私式弁へ不申候得共、万一御用之御見合ニ茂相成儀ニ御座候ハ、大意迄を申上候付、何卒此涯轍藏拜謁被 仰付、

委細被 聞召上度儀と奉存候、此一条は甚以申上兼差扣罷在候得共、何分夫形難承擔、此段申上候、以上、
十二月十八日 海老原宗之丞(清熙)

文書原寸 縦 二六・九種 包紙原寸 縦 二九・三種
横 二一・一種 横 二〇・八種

(同文書ハ文久元年トスルモ同三年以降ノ誤リナランカ)

三 近衛忠熙忠房両卿より島津和泉殿へ

小野道風書贈与の件

(包紙ウツ書) 島津和泉とのへ 内々 忠房
(近衛忠熙)

(朱[紙]) 島津和泉とのへ 内々 忠房
(封紙ウツ書)

(朱[紙]) 島津和泉とのへ 内々 忠房

尚々寒氣御自愛と存候也、

敵寒之節弥御安康珍重候、猶先達而ハ尚之介上京、何か御趣意之条々御尤ニ承候、且又其節ニハ御心入之御品恵

給、深く喜悦く千万ニ候、依何成共入覽之品ハ無哉

ト尚之介へ尋問ニ及候処、書を御好之由ニ申居候故、前

左府・忠房兩人色々勘考致候へ共、存付も無之候、当家

官庫秘藏之内、小野道風草書一枚進入候間、永々御所持

ニ相成候様頼入存候、外ニ鹿肴兩人より入覽候、道風書

ハ御内々讓申進候事ニ候、何か短日大取紛乱書、其上書

様交り推覽御頼申入候事、

極月下旬

文書原寸 縦 一六種

包紙原寸

縦三〇・三種

横 一一四・九種

横四一・五種

三 熊本ニテ大豆五千石買入其他ノ件 二通

熊本藩重役氏名書共

一一三ノ一

横目助

三島方掛

三原彦之丞

右御用關兩人召列、熊本江被差越、印形役場江引渡置、

此節は大豆五千石取入、以来米大豆買入之手筈治定仕置
賦ニ御座候、

下町年寄

徳重伊兵衛

右同

波江野休右衛門

阿久根

川南源兵衛

右三人御用關被仰付候、

文書原寸 縦 一三・八種 横 四四・五種

一一三ノ二

物頭

長谷川仁右衛門

嘉悦市之進

山県典次郎

文書原寸 縦 一三・八種 横 一五種

三三 文久二年茂久公参府ニ付警衛人数書

小松帯刀覚書

当時天下之形勢内外危急之御時節、殊(先)去春(去春)不良之御(先)一条も在之候付、来戊年

御参勤之義、不容易御場合之事御座候、就而は非常之

節御動揺無之様、御手当(朱)在之度義と、愚存之形行左

ニ相記申候、

一 御道中御宿割、成丈六七里之間ニ而、

御立御刻限六ツ半時と被定置、七ツ半時ニは是非御泊之駄迄

御着相成度義ニ御座候、

一 奥御小姓之義、此節御供拾四人被仰付(朱)在之候得共、今

八人も被相重メ、御番方七人ツ、忒組、御供方八

人忒組、都合三組ニ分テ、御供方八人之内より忒人

ツ、は繰廻、御番相勤候得は、御番人数八人宛ニ

相成候付、其内忒ツニ分テ、夜半代リニ不寝之番相勤

候様(朱)在之度候、

一 御参勤ニ付而は、御供目付之義不容易御役場候間、今

両三人位も被相重、兩人ツ、は御本亭 御番相勤、彼

是氣ヲ配り指揮いたし候様有之度候、

一 御発駕前、他所向取馴候者兩人計被差立、中途風説等

虚実分明ニ聞合、以飛脚 御道中先江申上候様、尤足

軽慥成者両三人被召付、被差出度候、

一 御先荷・御跡荷等成丈天祐丸ヨリ被差廻御発駕当日前

之浜出帆、小倉辺江相廻居、大坂迄船路差廻之荷物積

込、小倉出帆、大坂河口迄相廻居、大坂

御発足(朱)後出帆、江戸之様相廻、

御滞府中滞船被仰付候得は、急変之御手当相成可申義

ニ御座候、

一 御供廻り之事、

御定式外ニ

御小姓与八拾人

足輕三拾人

右中小姓之名目ニ而、人柄御吟味之上、御供被仰付

度、右人数式拾人ツ、四組ニ分テ、仮令ハ甲乙丙丁之
次席を以

御供并不寝番ヲ輪番いたし、甲乙四拾人

御駕之左右ニ透間なく必至と奉警衛、

御供相勤、丙式拾人

御立刻限半時前

御先キニ発足、中途非常を戒め、山林或は道橋ニ氣ヲ
配リ、

御本陳^(ママ)之場所は尚以相探シ、地形案内等微細ニ熟問い

たし置、即晩不寝之番相勤、丁式拾人は 御立刻限一

時後レ発足、

御跡警固仕候様^{是ハ御跡警固ながら 非番ニ而休息之姿也} 右之通ニ而甲丙ニ替

リ、乙丁ニ替リ、日々繰廻候様、右八拾人之内八人は

御供目付之場ニ而、老組^{(朱)之役被仰付何種}兩人ツ、願取ニ而指揮いたし

候様^{(朱)有之度候}被仰付度候、

但足輕三拾人は拾人宛三組ニ分テ、 御先式拾人、

御供四拾人、 御跡式拾人江被召付度、尤 御先不

寝之番之義は、式拾人二組ニ分テ、夜半代リニいた
し、足輕之義も右ニ準シ夜半代リニ而、夜廻等嚴重
行届候様有之度候、

一 重人数之義も多人数之事ニ而、諸松等自分ニ而は混雜

可致候間、御物御取替ニ而大弘被成下候様、有御座度

候、

一 万一出火騒動之節は、惣御供中少も動揺不致、一同除

火ニ心を不懸、

御本陳四方を奉警固、仮令近隣ニ延焼いたし候而も、

可成

御動座不被為 在、上下整肅いたし、不被得止事之御

時宜ニ被為 臨候節ハ、

御側廻りは勿論、

御供人数前後ニ必至と被召列、 御逃相成度、手広之

要地江 御布屋ニ而も、一旦 御扣相成、其候 御供

之人数は奉警衛、大抵沈火相成候ハ、依時宜 御本

陳^(ママ)不時御手当相成候様、諸役場都合無滞致弁別、早々

御立被為 調候様、其職を旨といたし候様、兼而下知号令行届、混雑不致様、御治定在之度候事、

一夜廻足輕等違変之廉見請候節は、当番御供目付江直ニ注進いたし、差図ニ可任旨、兼而被仰付置度候、

但本文出火騒動亦是

急変之節は、

御本陳江兩貝相図次第早々駆付、夫々ニ而御役場差図相得候様被定度候、

一御発駕前後ニ守衛人数被差立度候、

但本文諸郷人数被仰付置候得共、此節不容易御砌候付、交代被仰付、御城下より御立前後ニ被差立可

然候、

一酒食等猥ニ不相用、且万端相謹候様、(朱)此節は別而屹と仰渡被置度候、

候、

以上

小松帯刀

文書原寸 縦一六・二種 横三九八・三種

三四 江戸ニテ島津登ヨリ堀次郎へ

面会ノ件

(封紙ウラ書)

「堀次郎様

島津登(久包)

ノ

」

尚々岸良よりハ、後日ニ御咄申候而ハいかゞ可有之哉と存申候、

今晚御入来ニ付而ハ、汾陽氏御同伴被下候儀はいかゞ可有御座哉、於御同意は、貴公より島渡御誘引被下度、平ニ御願申上候、尚い細貴顔かたゞ可申上候、以上、

十二月廿七日

文書原寸 縦一六種 横三三・二種

三三 近衛忠房卿ヨリ宸筆御詠下賜ノ副書

極御内々厚々以 思食、此

宸筆御詠賜候と之御事、

御剣伝献、厚

御満足之御沙汰ニテ、何カラ被込、極密修理大夫殿・

和泉との等へ賜候と之御沙汰ニ候事、

文書原寸 縦一六種 横二二・四種

〇三六 久光茂久二公へ下賜ノ御製

〇三七 真木和泉ノ天業恢弘ノ上奏

三六 京都大坂兩薩邸ニ於ケル大砲調査

一二封度野戦砲 拾三挺

一小船忽砲 四挺

一十一半拇携旧砲 四挺

一十二拇右同 式挺

一七百目野戦砲 壹挺

一五百目右同 式挺

合式拾六挺

右京都御在合

一七百目野戦砲 式挺

一五百目右同 式挺

一二封度右同 三挺

合七挺

右大坂御在合

文書原寸 縦一四・七種 横五〇種

〇三八 真木和泉ノ義挙計画

三九 濟範法親王ノ神仏論

(端裏朱書)
一壬戌

元勸修寺宮濟範入道御作

夫我 皇国之冠、於_レ宇宙、

皇神之大統赫々、於_レ今二千有余年矣、宗廟神明之所_レ衛

護、不_レ亦偉_レ乎、其所_レ以然者何也、賢明之主世不_レ絶

徳化之篤敷、于_レ海内也、且延喜天曆之有_レ聖代、或隆寒

脱_レ御衣、或損_レ宝算、以代_レ民命、何其仁也、

応神帝在位、百济国使_レ学士王仁来_レ而、献_レ經書及先聖先

師像、是以

皇國聖賢之教始伝而、以助治國平天下之政、當

欽明帝在位、百濟國又獻仏像及仏書僧尼等、然而其奏

慢而諛也、宰官何不罪之、妖言以惑亂黔首、於是

皇國疫癘大行天札以万數、是蓋

皇國守護之八百万神怒西戎妖教之穢、神州也、儒仏二

教共是百濟之所獻貢而、其於國家有得失如何哉、夫

經書之伝

皇國、君以得為君、臣以得為臣、父子兄弟夫婦朋友

仁義礼智之綱、士農工商之倫明着順正民得其所、猶大

陽之排雲霧而輝九天而、乱臣賊子之遠猶霜雪之見睨

期消而、仏法之穢

神州弘道之始、魅殺皇民、尊奉戎俗、遂啓大逆

無道之乱、幸有三守屋大連中臣鎌子等、忠良剛直犯顔

諫之而、姦臣殿戸蘇我以下俟仏故、讒訴百端直言格而

不聽、不亦痛乎、嗚呼某

帝之昏暗不聰明、怠惰廢事、宜哉、遂取弑逆之禍、

悲哉、彼仏説之妄可知也、夫僧尼之為本體曇也、瞿

曇放光六動何其靈哉、既有靈而不能濟積滅之殃、且

夫漢土奉仏者、莫若梁武而不免餓死、仏而有靈、

何不使出彼所謂神通力者以少救之哉、由此觀之、仏

教固不足信也、苟淫之則害國家、豈不彰明較著

哉、且仏氏以妄言為方便、以慈悲為究竟、然而

或入定或異死、悉於人界不利、益駭俗之姦計、所説

之妖妄可知、中世以來政在武臣、

朝權之棄至於此、故皇族無尺寸之処、故往々兒而

入寺剃髮胡服、哀哉、蓋非信其教也、不得止也、

于今數百年政事之蔽無甚焉、戎教之入我使人不

得其所如是、仰願

聖帝賢臣為國家勵力、以敷

神聖之大道、以塞仏氏之妖妄、以除

皇國之巨毒、不亦愉快乎、予幼而為仏徒、亦非所

好也、不得止也、故外奉仏氏之律、內信神聖之道、

楊氏所謂在門牆者深有歎于此、因表而論之、告後

之為政者、矣、

皇文久二年初冬上浣

文書原寸 縦一八・八種 横一一・三種

三三 安藤对馬守坂下門外要撃一件

(端裏朱書) 「壬戌正月」 「端裏付箋」 「島津登名前」

今十五日昼九ツ時比、書生体之者一人、大膳大夫外桜田屋敷内稽古場江罷越、家来桂小五郎と申者江相對之儀申入候処、折柄小五郎他行中ニ付、其由申聞遣候得共、待合相對可然と之事ニ付、夜六半時小五郎帰宅、及相對候、然処是迄識面之者ニ而も無之候ニ付、姓名旨趣相尋候処、水戸浪人内田万之助と相唱、今日御曲輪内ニ於て及狼藉候党類ニ候処、機会を失ひ遺憾不少、於途中致自殺候も心外之儀ニ付、兼而姓名をも承及居候間、死後仕舞をも相頼度罷越候趣申述候ニ付、相宥免置、其段役向之者江申達罷帰見候処、其場江書付一通残置、及自殺居候由、申出候、此段御届申上候、以上、

正月十五日

(毛利慶親) 松平大膳大夫家来 大和源八郎

水府浪人

財布 半切二卷 (前野顯三) 三島三郎

懷中物内ニ斬奸趣意書と認有之書付 豊原邦之助

懷中物一ツ 細谷忠斎 麻裏草履一足

斬奸趣意書と認入候 吉野政助 書付 手拭一筋

西洋短筒一挺 但玉目式刃五分程風呂敷ニ包有之

斬奸趣意書と認有之書付 浅田儀助 木綿桐卷一内ニ斬奸趣意書と認有之相田千之允

西洋短筒一挺 認有之書付 孤細面集二冊 是は例之取落し物

右之通内桜田御門持場死骸見分口書ニ御座候、

文久二年壬戌正月十五日、於西丸下御老中安藤对馬守登城掛同勢江切掛、对馬守江手疵為負、一同討死いたし候者、

豊原邦之助

(三郎カ) 三島三平 三十才位 細谷忠斎 三十一才位

吉野政助 杉見千之助 浅田儀助
二十三才位 三十五才位 三十才位

右死骸場所江短筒二挺有之、銘々懐中ニ願書一通ッ、所持罷在、其文左の如し、

申年三月赤心報国之輩、御大老井伊掃部頭殿を斬殺ニ及ひ候事、毛頭奉対

幕府候而、異心を挟ミ候儀ニ無之、掃部頭殿は執政以來自己之權威をのミ振ひ、奉蔑如

天朝、只管外夷を恐怖いたし候心情より、慷慨忠直之義士を惡ミ、一己之威力を示さんか為、専ら奸謀を相廻らし候体、実に

神国之罪人ニ御座候故、右之巨奸を倒し候ハ、自然幕府に於て御悔心も被為出来、向後は

天朝を尊み、夷狄を惡ミ国危人心の向背に御心被為付候事可有之と存込、身命を投候而及斬殺候処、其後一向御悔心之御模様も相見得不申、弥

御暴政之筋のミに成行候事、幕府之御役人一同之罪ニ

は候得共、畢竟は御老中安藤对馬守殿第一之罪魁と可申候、对馬守殿は井伊掃部頭殿執政之時より同腹ニ而、暴政之手伝を被致、掃部頭殿死去之後も、絶而悔悟之心無之のミならず、其奸謀詭計は掃部頭殿にも超過し候様の事余多ニ有之、かねて酒井若狭守殿申合、堂上方ニ正義之御方有之候得は、種々無実之罪を羅織して、

天朝をも同腹之小人のミに致さん事を相謀り、万一尽忠報国之志烈敷、手ニ余り候族有之候節は、夷狄之力を借り可取押との心底顯然ニ而、誠に神州の賊とも可申方ニ候、此假ニ打過候而は、奉腦

叡慮候事は不申及、於幕府も御失体之御政事のミに成行、千古迄も汚名を被為受候様ニ相成候事、鏡に懸て見るか如く不容易御儀と奉存候、此上当時之御模様如く、因循姑息之御政事のミニ而、一年送ニ被為過候ハ、近年之内ニ天下は夷狄乱直之物と相成候事は必然之勢ニ御座候故、旁以寢食を安んしかたく、右は全对馬守殿奸計邪謀を専らに被致候処より指起り候儀ニ付、臣等之至

情難黙止、此度微臣共申合、對馬守殿を斬殺申候、對馬守殿罪状は一々枚拳ニ不堪候得共、今其一端を拳而申候、此度

皇妹御縁組之儀も、表向は

天朝より被下置候様ニ取繕ひ、公武御合体之姿を示し候得共、実は奸謀威力を以て奉豪奪候茂同様之筋ニ御座候、此後必定

皇妹を枢機として、外夷交易御免之

勅諭を申下し候手段ニ可有之、其を若も不相叶節は、窃に天子之御讓位を申讓候心底ニ而、既に和学者共江申付、廢帝之古例を為調候始末、実に將軍家を不義に引入、万世之後惡逆之御名を流し候儀取計候所行ニ而、北条・足利ニも相越候逆謀は、我々共切齒痛憤之至、可申様も無之候、扱又外夷取扱之儀も、對馬守殿弥増ニ慇懃丁寧を尽し、何事も彼等申処ニ随ひ、日本周海測量之儀早々差許し、皇国之形勢委數彼等ニ相教へ、近頃は品川御殿山を不殘彼等ニ貸し遣し、江戸第一之要地を外夷共に

渡し候類は、彼を導きて我国を取しめ候も同然之儀ニ有之、其上外夷応接之後は、毎々差向ニ而密談教刺ニ及び、骨肉同様ニ親睦致し候而、国中之忠義勇憤之者共をば却而仇敵之如く忌嫌ひ候段、国賊と申候も余り有事ニ御座候、對馬守殿大ニ執政被致候ハ、終ニは

天朝を廢し、幕府を倒し、自から封爵を外夷に請候様ニ相成候儀明白ニ而、言語道断之所行と可申候、既に先達而「シーボルト」と申醜夷ニ対し、日本之政務ニ携與候様相頼候風説も有之候間、對馬守殿存命ニ而は数年を出すして我國

神聖之道を廢し、耶蘇之邪教を奉して君臣父子之大倫を忘れ、利欲を尊ミ候筋のミに落入、外夷同様禽獸之群と相成候事疑なく、微臣共痛哭流淚大息之余り無余儀も、奸邪小人を令殺戮、上は奉安

天朝幕府、下は万民共夷狄と成果候処之禍を防ぎ候儀ニ御座候、毛頭も奉対

公辺異心を存候儀ニは無之候間、此後之処、井伊殿・安

藤殿ニ奸遺轍を御改革被遊、外夷を擒逐し、

叡慮を慰め給ひ、万民之困窮を御救被遊候而、

東照宮以來之御主意ニ御基キ、眞実ニ征夷大將軍之御職

任を御勤被遊候様仕度候、若し只今之俣ニ而、弊政御改

革無之候ハ、天下之大小名各幕府を見放、自分々

々之國之ミ相固候様ニ成行候は必定之事ニ有之、外夷之

御取扱さへ御手ニ余り候折から、日本國中之心市童走

卒も夷狄を惡ミ不申者一人も無之候間、万一夷狄誅戮を

名といたし旗を拳候大名有之候ハ、大半其方ニ心靡き

候事疑ひ無之、実ニ危急之御時節と奉存候、且

皇國之俗は君臣上下之大義を弁し、忠烈節義を守り候御

風習ニ候故、幕府之御所置段々

天朝ニ相反し候処を見受候ハ、忠臣義士之輩一人も

幕府之為ニ身命を投候者有之間敷、幕府は孤立之勢ニ

御成果可被遊候、夫故此度御改心之有無は、

幕府之興廢ニ相係り候事ニ御座候故、何卒此儀御勘考被

遊、傲慢失礼之外夷共を疎斥し、

神國之御國体も幕府之御威光も相立、大小之士民迄も

一心合体仕候而、尊

王攘夷之大典を正し、君臣上下之誼を明しまし、天下

ニ死生を共ニ致候様御所置希敷、是則臣等身命を投、奸

邪を殺戮して

幕府要路之諸有司ニ懇願愁訴する所之徴忠ニ御座候、恐

惶謹言、

安藤様御供方手負左之通、

深手 原田庄兵衛

浅手 太田六藏

深手 小葉平次郎

深手 松本録次郎

浅手 上坂大太郎

浅手 村上秀吉

浅手 齊藤勇之助

浅手 高橋幸之助

浅手押 万藏

今朝交代後五時御太鼓ニ而、御老若方御登 城之御様子

ニ付、見計として私共冠木御門内迄罷出候処、立番同心

共下座申込候ニ付、大御番所ニ而も下座仕罷在候処、立

番同心共より御門外ニ而混雜之様子有之趣申込候ニ付、
与力両三人・同心四五人冠木御門内江罷出、様子見計候、
同大和守殿御上リニ而、御門ノ敵重心付候様被 仰渡候
内、御跡より対馬守殿御上リ相成、御門内ニ而大和守殿
御同道ニ而、御番所前迄御出有之、又候御跡より堀出雲^(之敵)
守殿御番所前迄御出有之、対馬守殿ニは御手疵之御様子
ニ而御番所へ御上リ被成候処、大和守殿・出雲守殿直ニ
御登 城ニ相成申候、対馬守殿御手疵、御番所ニ而御家
来共打寄御手当いたし候様子ニ而、無程御門外迄御歩行
にて御退散ニ相成申候、右ニ付冠木御門立寄階りより往
来敵重相改、通行為致居候処、只今御目付小出修理殿よ
り御小人目付桜井新作を以御門平常之通立番同心差出、
出入之儀敵重相改候様被 仰付候ニ付、右之通相勤申候、
此段御尋ニ付御届申上候、以上、

正月十五日

坂下御門当番
小堀大膳組

封廻状

一卜通尋之上

揚屋江遣ス、

一卜通尋之上

改揚屋江遣ス、

一卜通尋之上

揚屋江遣ス、

右於黒川備中守御役宅、御目付浅野伊賀守立合、備中守
申渡申候、

正月十五日

一橋付

近習番

山木繁三郎
戌四十八才

戸田越前守家来

大橋順蔵
四十七

順蔵養子

大橋燾次
二十六

戸田越前守家来

松本鎮太郎
二十七

安藤対馬守様去ル十五日御登 城之折、浪人者及乱妨、
御同人様被負御手疵候段は、先便申越通ニ候、其後今以
御登

城も無之、深手ニ而、逆も御全快六か數との風聞有之由

候得共、突留候儀は不相分、尤致狼藉候者共は、水戸浪人之由、御届相成候旨、御坊主より為知越候、且又討死いたし候者、懐中いたし居候斬奸趣意書と認有之候書付之由ニ而、南部弥八郎方より別冊差出候ニ付、別紙五通相添、御心得旁此段申越候条、可被達 貴聞候、以上、

戊正月廿九日

島津 登

川上筑後殿

喜入摂津殿

川上但馬殿

川上式部殿

今朝五ツ時比、御老中久世大和守様・内藤紀伊守様・安藤对馬守様御一同御登城之折、坂下御門下馬所手前、安藤様裏御門前ニ而、町人体之者三四人、下馬見体之者兩人御行列江通り懸り候処、町人体之者袖之内より小銃筒先キ頭れ出居候を、安藤様押之者見受、鉄砲ト声懸候処、右鉄砲持候者行成ニ安藤様御駕籠江向而打放し候処、匆卒

(忽カ)

之間故欵、筒先キ相下り候而、御駕籠脇力番之者両股を打貫キ、御駕籠ニハ別条無之由、然ル処右砲声を合凶ニ外同列之者共、羽織下より拔身を持出し、御駕籠を目懸切込候処、最初鉄砲ニ而兩股打貫レ候者、乍倒狼藉者江切付ケ危急を救ひ候内、陸尺之者共右騒動ニ驚キ、御駕籠を抛捨逃去候由、右ニ付御駕籠之左之方戸打離し候ニ付、安藤様ニは其処より御出可被成と被致候処を、後口より一人、右脇より一人拔身を以御駕籠を刺通し候由、乍去後口より参り候者は御駕籠之板江突当、十分ニ働キ兼、御腰辺江少し突当り候節、御供廻り之者打果し候由、右脇より刺通し候者は、切先キ御肩先より面部ニ懸ケ而淺手ニケ所御蒙り被成候由、楮右御兩人様ニは、早速御駕籠より御飛出し被成、御腰物も不被為取負、素足ニ而御供廻り一兩人ニ而坂下御門之方江御立退之処を、狼藉者之内一人為奉追懸由候得共、蔭御供之者共式三十人追々走続キ、其外御屋敷内よりも四五拾人、駆出、狼藉者六人討留、外扨兩人ハ逃去り、行衛相知不申由ニ候、且又

最初鉄砲打懸候者ハ無刀ト相見得、鉄砲打懸ケ其佱逃走
リ候得共、蔭御供之者追掛ケ、打果シ候由、左候而安藤
様ニハ、坂下御門御番所ニ而、手疵御手当為相成由候得
共、出血難止、今日御登城御遠慮被成、直ニ内藤様御行
列御借用ニ而御帰殿相成候由、取沙汰ニ御座候、

一右狼藉者之儀ハ、水府浪人又ハ故堀織部正家来共ニ而
為有之由、種々取沙汰有之候得共、多分ハ水府浪人ト
申事ニ御座候、

一安藤様御手疵ハ、前文通り御腰ニ沓カ所、肩ト御面に
忒カ所、都合三カ所ニ而、其内御腰之疵沓寸余も有之
候由候得共、御死命ニ係リ候程之儀ニ而ハ無御座由、
一安藤様御供廻リニも式人ハ即死、其外手負四五人為有
之由ニ御座候、

右之通承得候形行、早々御届申上候、猶承得候儀も
有之候ハ、追々御届可申上候、以上、

戊正月十五日

中原猶介

先日御届申上置候坂下御門前騒動之形行、猶亦細々承

合候処、安藤様御手疵弥左迄之事ニ而も無御座、追々
御快キ向ニ御座候由、

一最初久世様・内藤様御二方御登城御通行有之、安藤様
御行列丁度右御二方様御行列間江御繰入相成らんと致
し候砌ニ而為有之由、左候而内藤様御行列は其佱散々
之体ニ而、急速ニ其場を御駆抜有之、余程見苦數体ニ
為有之由、其折戸田采女正様(氏彬)・松平肥前守様(鍋島直正)・秋田安
房守様御供人数其辺江相扣居、能々為見居ニ而も有之
候由ニ御座候、

一狼藉者之内一人ハ、早朝より安藤様本門前堀涯江、氣違
候狂人之体ニ而蹲踞居、其外ハ町人体ニ而バツチ白足
袋ニ而、宗十郎頭巾打被リ通り之体ニ而、切込之三人
ハ早速御駕籠江切付ケ、一人ハ御立退を見掛ケ奉追候
処、御供之御家来兩人立廻り相支候内、蔭御供之者後
口より諸足を払ひ打果シ候由ニ御座候、右奉追懸候者、
両刀を遣ひ、秀逸之働仕候而為有之由、

一後口より飛入候者は着込ニ而も致着用居候哉、背ニ數

太刀相受候而も切通り不申、漸々突留候由、

一安藤様御家来共討留候狼藉者共江、銘々名札結付引取候由、

一右狼藉者共死体、昨年高輪東禅寺ニ而生捕相成候水府浪人江御見セ被成候処、私共同盟之者ニ別条無之由ニ而、姓名迄も為申上由、左候而私共同盟之者共ハ是涯ニ而、外ニハ無御座由申上候由、

一右狼藉人共懐中江銘々名札相入居、且斬奸趣意ト申ス書付并ニ詩歌致懐中候者も有之候由、

一同日昼時分ニ相成、長州侯御上屋敷居住御家来、桂小五郎ト申ス御家来江、書生体之者一人、以前斉藤弥九郎方ニ而致同塾居候由ニ而尋参り候ニ付、留守之由申聞候処、是非面会不致候而不相濟儀有之由ニ而、同人帰宅迄相待居、其内小五郎罷拂面会之上致切腹候ニ付、当分は公辺御沙汰ニ相成、小五郎甚迷惑ニ相成候由、左候而右致切腹候者懐中相改候処、安藤様御門辺より坂下御門迄之絵図面取仕立、駕籠之形を相記し、其

脇ニ朱点八ツ相記し、其朱点より鉄砲之玉線ニ而も候哉、朱筋一ツ御加籠之方江相記し為有之由、左候得は右之人数八人ニ而も有之哉之風評有之候、尤右書生体之者ハ、水戸浪人内田万之助ト申者ニ而、当月六日水戸表致発足、御当地馬喰町辺江相忍候段申聞候由、

一去ル十五日比被召捕候 一橋様御付近習役山本繁三郎・戸田越前守様御家来大橋順藏父子并山本鎮八郎儀被召捕候訳合色々取沙汰有之候得共、しかといいたし候義相知不申候、右順藏義は、此節

和宮様御下向之儀ニ付、京師江手を廻し相支候義有之、且又同人妻矢張右御下向之儀ニ付、長歌相詠し時世を致誹謗候由ニ取沙汰も有之由、又一説ニは色々々時世を致誹謗、不所謂武器相貯へ候由相聞得、被召捕候由、風評も有之候、又之説ニは当水戸中納言様国家を御治め被成候御気量無之候間、一橋之御隠居を水戸之太守ニ奉崇候目黒ミ仕候而、長州之家老江相謀候処、多日返答無之候ニ付、一橋御屋敷を焼払ひ、其紛れニ

一橋の御隠居を、水戸表江御誘引可申上旨、右山木を
以上書仕候処、一橋御隠居様右上書封之候ニ而、御老
中方江御差出し相成候間、早刻御老中より之命令ニ而
被召捕候由、専ら取沙汰有之候、

一右順藏儀は長治流之兵学者故清水俊藏ト申者之三男ニ
而、総州宇都宮之豪家町人佐野屋幸兵衛ト申者之□
ト罷成、悴は養子ニ而御儒者川田八之助二男ニ而候由
左候而右順藏被召捕候節は、右妻宿許より、町人体之
者両三人用事有之体ニ而、順藏方江差越、遮而致談合
度義有之候間、外方江罷越呉候様申入、神田鍋町信楽
屋ト欵申内江致誘引、召捕候由、山木繁三郎儀ハ番町
辺江罷居候者之処、朝出勤掛中途ニ而召捕候由、将亦
右大橋一件ハ此内より何欵風評ニ而も有之候哉、旧冬
廿七八日比、大橋方江致入塾居候諸生式三人ハ、急ニ
御屋敷ノくより御召返し相成候者も為有之由、
右之通承得候成行申上候、以上、

戊三月

中原猶介

一御船手頭松平左門殿中川御番所辺ニ而怪敷浪人体之者
見当、声を被懸候処、直ニ切懸候ニ付、抜合被討取御
届ニ被及、夫ニ付多分御褒美ニ可相成由ニ御座候、
一西洋江御使節乗組之英国船琉球海ニ而、大颶風ニ逢大
危難ニ而、損所も有之、且松平石見守殿・京極能登守^(高明)
殿恰も死人の如く有之、長崎江入港仕候由申来候、
一右同時比ニも候哉、「トルコ」国より 日本江条約願
之使節船、清国海ニ而同様難船いたし、九死一生ニ而
漸帰国仕候由、

一昨年来亜米利加合衆国中南北分離いたし、戦鬪に及ひ
夫ニ付「イギリス」領「ハナダ」人民之儀、何れニも
左袒いたすましく旨、本国より申渡相成居候処、昨年
南方英吉利より差送り候綿積入の船を、北方より相奪
申候ニ付、夫を名として英吉利と合衆国絶交ニ相成、
英仏合同して合衆国を討、南方に荷担いたし、未戦ハ
不始由ニは候得共、大混雑ニ有之、右ニ付御詔之軍船
製造方并其見分として、海軍所審^(書)所調所より被遣候人

も、今一左右御座候迄、御見合被下候様「ハルリス」申上候、尤此儀は元来最初英国之管轄を脱し、独立いたし候以来、内心不相容事情も御座候故、前条之事件を名として、事を起し候儀と奉存候、

文書原寸 縦一六・五糎 横二六八・五糎

右御軍役方問合之内、

右之通世上風説并外国新聞之趣ニ御座候、以上、
正月廿八日 南部弥八郎

一 横浜在留之英仏人、近比暴行甚敷有之候付、此儀は兼

而合衆国と 日本と親敷有之、何欵事ある時ハ、「ハ

ルリス」取扱為濟候事柄も多々御座候処、右ニ申上候

通、二国と絶交ニ相成候得は、亜国之仲立無之故欵と

奉存候、何れニも前条之余殃は少しハ可有之哉と申風

説ニ御座候、亜国ニ而も叛賊と英仏敵ニ相成、頗難渋

ニは可有之候得共、魯西亞素より英仏之志を得るは不

喜事故、多分合衆国ニ声援可仕哉、

本邦ニ而は英仏等より条約等ニ事寄、援兵糧食等借用

申掛、夫より事を始め可申も難計、方今之所至極御用

心第一之御場合ニ可有御座哉と奉存候、

一 洋学者大鳥溪助儀、阿州様ニ而五十人扶持に被召抱申

候、

三 坂下門事変ノ書取

九通及地図一葉

仁孝天皇御祭ニ付和宮様御代拜申渡書付

二通

(端裏朱書)
「壬戌正月」

風聞

一 当十五日御老中安藤侯御登城先、西丸下御居屋敷御門

前ニ於て、致乱妨候浪人未人数睨ト不相分候得共、種

か島ヲ以御駕挾打ニいたし、引続切込切付、手もなく

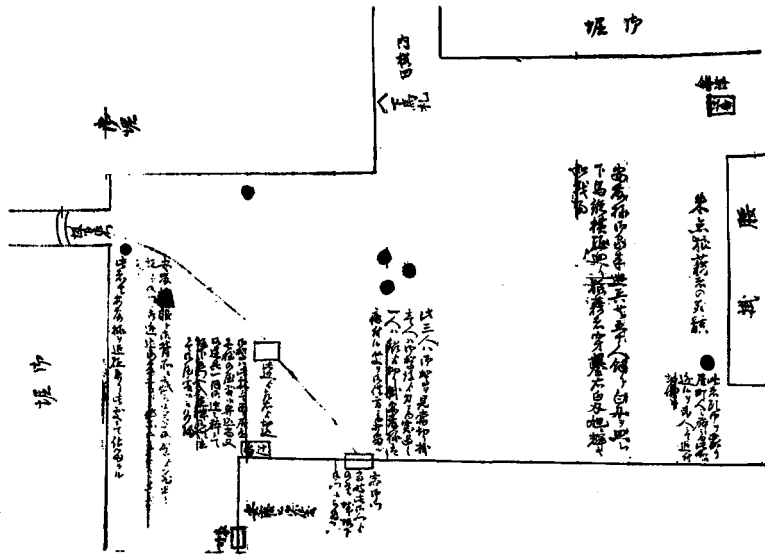
三月三日一件同様之騒動出来仕、供侍之内八九人怪我、

即死式人有之候由、殿様既ニ危所御駕より逃助り被

成候由、尤少々御怪我御座候由、

一 乱妨者六人即死、其外逃去候者も有之由、

地図原寸 縦二八・七種 横四〇・八種



〔朱〕「朱点狼藉者の死骸」〔朱〕「此者頭巾ヲ蒙り居、町人之

体ニ而此所江逃候ヲ式人ニ
て追付切伏ル

安藤様御家来遊兵共五十人余り白刃ヲ廻シ下馬、縦横駆
廻り狼藉者穿鑿、右白刃旭ニ輝キ如戰場

〔朱〕「此三人ハ御籠ヲ見当切り掛、老人ハ御駕後

より刀ニ而突通し、一人ハ脇より切り掛、

安藤様太疵付候処ヲ御供方ニ而打留ル

客御門、当時此御門より御

登 城坂下御門江被為入

此辺より左右より切込

御駕ハ此所にて留り居置、無程御屋敷江昇

込、尚又御道具一同御迎之体にて、坂下御

門へ入、直様御供立にて御屋敷江被為帰

〔朱〕「安藤様ハ眼ト御背所ニ疵被為受、御駕より飛出し坂下

御門へ御逃込御番所にて疵所御手当有之、御退出有之」

〔朱〕「此者は安藤様ヲ追駆参り、此処にて仕留ラル

一右之死骸吳服町河岸ニ指出候ニ付、見物人夥敷、筆紙ニ難尽候、

一今日式日ニ而諸大名御登城、下馬先大混雜ニ紛込、其中より前文之通乱妨いたし、誠ニ不穩候、

一三月三日一件後は、丸ノ内見付々々御嚴重ニ相成、殊

ニ西ノ丸下往来留ニ而候処、無腰仲間体ニやつし候由御座候、

一昨十五日朝、安藤様御登 城掛ニ狼藉者六七人及乱妨

安藤様は下馬中比より御駕より御飛出し、坂本御門江御逃込、御頬と御背ニ疵被為受候ニ付、水御門番所

ニて御手当、無程御退出之由、

一狼藉者六人打留られ、一人逃去候ニ付、実否不相分候得共、多分水府人と申事ニ御座候、絵図ヲ入尊覽候、

安藤様御家来名前左之通、

御供之内

御刀番

深手

鉄砲ニ而打れ

深手

大小姓

小原平次郎

松本運次郎

浅手

同

齊藤勇之助

薄手

御徒士

高沢幸之丞

深手

友田六蔵

浅手

上阪大五郎

右同

村上秀二

遊軍御供之内

深手

元しめ役

原田庄兵衛

無疵ニて式人打留

徒士目付

伊藤東左衛門

薄手

中間頭

横山盛之丞

押方 万蔵

下馬ニ相果居候狼藉者名前

惣髮

三島三平

十八九才

坊主

豊原邦之助

二十二三才

細谷忠才

右同

吉田政助

三十前後

浅田儀助

右同

相見千之助
三十六七才

正月十五日仕立、同十九日飛到着

十五日登城

鉄砲四挺

人数十人

御供廻り

内一人即死

五人手疵

五人深手

四人欠落

右十九日昼時分着、廿日晚落手、市中風聞廿八日昼時分、

正月十五日五時、御鼓ニ而登城一統被成候時、安藤様登城を待受、浪人体之者凡三十人程、短筒或ハ刃を抜揃へ御駕を目差して掛り、鉄砲ニ而駕脇之者を打、其上頭切れ申候外、忒人深手・薄手七八人有之候、残浪は逃去申候由、安藤様ニも少々疵御受被成候由、其仮坂下御門江

駕より出歩行被成候、同所御番所にて御着替被成、直ニ御歸り被成申候、今日は御礼ニ付大混雜いたし申候、追々実事相分り次第ニ可申上候、

但浪人体下駄、或ハこま下駄・草履等相用ひ申候、袴平常の相用ひ候者、馬乗袴相用ひ候者、はづちにて着物からげ候者、いろ／＼と風俗御座候、浪人体之者六人切れ、即死之者風俗右之通ニ御座候、右は安藤様御供方にて切れ申候、此段不取敢申上候、

申渡候書付、

正月九日

和宮様御付上藤
ふち

来月

仁孝天皇拾七回御忌ニ付、

和宮様より御代拝として 京都江罷越候様、被仰出候、

和宮様付御年寄
玉島

来月

仁孝天皇拾七回御忌ニ付、

和宮様御代拜としてふち事 京都江罷越候付、付添被遣候、

右御広敷江美濃守差越、両度ニ申渡書付渡し候、

正月十日

公方様東叡山窓御霊屋江

御参詣被為在候事、

昨十五日御老中安藤対馬守様御登 城之節、御行列江西之丸下ニ於て、浪人体之者鉄砲打掛、及騒動候段相聞得候ニ付、則新地廻足輕を以為致聞合候处、同日五ツ過御登 城之砌、西之丸下ニ而大小を帯、馬乗袴を着候者八九人罷居、御行列江鉄砲二筒打掛、直ニ駕籠廻右脇、又は後之方江詰込、刀を以後より突候由ニ而供廻り人数も直様刀抜放切合候央、安藤様ニは駕籠左

脇戸引明、技身を持たながら坂之下御門より御登 城有之、安藤様御屋敷も纔一丁位之所故、同所より鎧類を以駆付、互ニ相戦、暫時は及騒動、安藤様ニも頭上江少々疵相付候得共、命ニ相かゝる程之儀ニ而は無之由、尤御家中江二人即死、浪人体之者ニも六人、其外は逃去り候由、専水戸浪人之仕業と評判有之、当御屋敷者相加里候と之取沙汰等は無之由、

一浪人体之者拾七人、西之丸下御堀涯江罷居、鉄砲二筒打掛、直ニ駕籠脇江右之通詰寄、安藤様ニは前文通坂之下御門之様被成御越候節、浪人者一人追掛候を、御家中之者より足をへらひ候故、無難御遁被成候由、尤浪人体之者六人即死、十一人は生捕相成候、右之内ニも手負も為有之由、

右之通区々之風説承得候形行、此段申上候、以上、

正月十六日 御裁許掛

昨十五日朝五ツ時過比、安藤対馬守様御登 城之節、

坂之下御堀の方より鉄砲二発程打掛候者有之、左候而

直ニ凡十五六人一度ニ拔れ、御行列江切込、安藤様御

方よりも凡三十人程も拔れ戦合候由、然る処徒党之内、

六人程も則死、其内御前ニは御下乗ニ而坂下御門江御

入ニ相成、暫之内同所内御番所ニ而御休息被成候処、

直ニ御屋敷より御迎ニ而、御登城ニ不相成、御帰殿

ニ相成候由、尤御前御下乗ニ相成候と、直ニ拔身ニ而

呼はハリ追掛、御草履取江深手為負、既ニ御前江向ひ

候処を、安藤様御供方之内追掛、両足を切払、右徒党

之者は其俣相倒候由、右之者は年齢六十歳位之者之由

御座候、

一右徒党之人数御曲輪内江入候ニ付、御門々御糺相成候

処、朝六時前和田倉御門十人程、馬場先御門より六七

人程、何れ茂安藤対馬守様御家来と申、銘々名前を申

立入候由御座候、

一徒党之人数六人程則死、拾壹人程生捕、其内手負六七

人御座候由、安藤様御方御供方手負計、凡拾壹人程御

座候由、

一右浪藉者死体、其外生捕相成候者、不残御月番町奉行

江、則日御引渡ニ相成候由、

一右人数之内、町人体之者式人程交り候由御座候、

一右場所江長身之鎗老筋捨有之由、

一徒党之者着類木綿綿入割羽織、小倉馬乗袴亦是たつ

け并平袴着用之者も為有之由御座候、

右之通風聞承申候間、此段申上候、以上、

御留守居組小頭

正月十六日

小野金之助

写

今朝登城掛ケ、坂下御門下馬所手前ニ而、狼藉者鉄砲打

掛、七八人程拔身刀を以、左右より駕籠江切掛ケ候ニ付、

供方之者防戦致し、狼藉者六人討留、其余之者共は逃去

申候、拙者儀も捕押方等致指揮候内、少々致怪我候ニ付、

坂下御門御番所ニ而手当致し候得共、出血等も有之候ニ

付、一先帰宅致候、供方初手負之者も有之候間相糺、追

而御届申達候、以上、

正月十五日

安藤対馬守

狼藉者即死六人名前

三島三郎
十八九才

昨日御届申上候家来手負之者相糺候処、別紙之通御座候、

此段御届申達候、以上、

正月十六日

同人

別紙

深手

原田莊藏

同

友田六藏

同

小草平次郎

同鉄砲打れ

松本鍊次郎

浅手

上坂大五郎

同

村上秀二

深手

斉藤勇之助

同

高津幸之丞

浅手

押方万藏

別紙

豊原邦之助

二十二三才

細谷忠斎

二十二三才

吉野政助

三十才

相田平之助

三十五六才

浅田儀助

三十才

今朝安藤対馬守様御登 城之節、御供連中江何者共不知
及狼藉候旨相聞候ニ付、早速為見廻候処、持場内ニ即死
之者六人程、其余落散候品も相見候付、人立不申候様制
足輕差出、入念番人付置申候、先此段御届申上候、以上、